
ニートな勇者で鬼畜な邪神

setshow

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ニートな勇者で鬼畜な邪神

【Nコード】

N1759M

【作者名】

setshow

【あらすじ】

35歳ニートの男が異世界に召喚される。

何もしてはいけない主人公はヘタレでダメ男。一応、力はチートのはず？

草食系中年が逝く、ハートフル外道ストーリー。
完結しました！

プロローグ

白い

目を開けると真っ白な空間にいた。

濃霧のように見えづらい空間に白き闇と言う単語が連想される。

俺は現状を把握するために思い出す。が、どうしても現状の不思議空間と記憶が一致しない。

家のベットで寝ていたはずなのに、地球上に存在しないようなトんでも空間にいることが一致しないのだ。

夢だなこれは。

『残念ながら夢ではありません。』

俺の結論に突っ込むような返答が返ってきた。

『あなたはこれから別の世界に召喚されます。』

が、あなたは何もする必要はありません。いえ、むしろ何もするな。』

男でも女でも子供でも年寄りでもあるような不思議な声が命令してきた。

俺は混乱する頭で何故、自分がと非難した。

『世界にとって不必要なものだから。』

35歳にもなってニートで、

自堕落な生活をしていて、

社会にとって居てもいなくてもどうでもいいような存在。

心の穴を埋める狂喜を悟り、安定した精神を持つものだから。

あなたはこれから異世界に勇者召喚される。

私が干渉すべきものではないのだが世界にとっては現状維持が望ましく、これ以上の介入は必要のない事象である。

したがって、あなたのすることは何もしないこと。』

声の説明が、終わると俺の体がどこかに引っ張られるのを感じた。

勇者召喚？異世界？どういうことだ。勇者でも周りに流されて否応なく何かをしてしまっただろうに。

『心配いらぬ。邪神の力が宿るし、わずかながら私の力も受け継がれる。』

ぐるぐる回る俺の疑問に答えが返ってくる。

反論しようとして口を開きかけたが、この場所にとどまることを許さねずに俺はどこへともなく引っ張られていく。

第1話 召喚

ツアルテユース王立魔法研究所と言う場所がある。

古代に失われた勇者召喚という秘術を今なお受け継ぐ、人類勢力の要とされる場所である。

そんな重要な場所で、世界の勢力図を塗り替えようとする実験が行われようとしていた。

「準備はよいな。」

では、これより邪神の力を融合させた勇者召喚の儀を執り行う。

では、はじめよ。」

体育館ほどの広さの部屋の中に老人の声が響き渡ると、中央の台座にある魔方陣を取り囲むようにしていた人間たちが呪文を唱え、唱和させる。

直径10mぐらいの魔方陣が段々淡い光を放ち、やがて強烈な光に変わっていくと魔法陣の前に白い少女が歩み出る。

「世界神に申し奉ります。」

我ら人の子に過ぎたる御力にて召喚の儀を執り行うことを許したまへ。

魔のものを退けたる勇敢なるものをここに現し我らに栄光の未来をさずけたまへ。」

白い少女が朗々と祝詞を捧げると魔法陣の中央に球状の闇が発生し、魔方陣と同じ大きさになると中央に白い人型を生み出した。

「では、第二術式をはじめよ。」

白い不思議空間から引き離された俺は、今度は違う不思議空間にいることに気づいた。

まず、背景が重厚な鉄扉と石壁である。

足元には幾何学的な図形と円を組み合わせた魔方陣のようなものがあり、ローブを着ている人間がその周りを取り囲んでいる。

身の内には衝動が沸き起こる。

喰らいたい

「餓えた獣よりも深く」

虚しい

「哲学者の嘆きよりも尊く」

落ちていく

「神の啓示よりも昏く」

心に孔を空けたような懐かしい心情は現実を犯す。

魔方陣を覆うような透明な壁に意識を向けると透明な壁は消え去り、いまだ残る魔法陣の燐光に目を向けると魔法陣の光が消え去る。

俺は目を瞑り意識を再び芽生えた衝動に集中する。

なるほど、あの白い空間での選定条件が此れなのか。

確かに似たような心を克服していないと暴走してしまうかもしれない。

思い出せあの心を

虚しさに蓋して、飛び上がらんばかりに狂気に狂喜した思いを。

心臓の鼓動一つ打つごとに気分が盛り上がる。

顔に笑みが浮かんできて身の内の衝動が消えていく。

狂喜した笑顔で俺は目を開いた。

もう力が勝手に喰い荒らすことは無い。

絶対の自信を持って何時の間にか伏せていた面差しを上げる。

目の前の人垣から少女が歩み寄ってくる。

身体の線が浮き出るほどの薄い衣服を纏った、白髪に黄金の瞳、散り逝く花びらのような儂い雰囲気を持つ美少女である。

それにしても小さい少女だ。十代前半かそれ以下に見えることから幼女と言ったほうが良いのかもしれない。

無表情で近づいてくるその姿はまさに人形である。

俺のそばに近づくと何か小さく口ずさんでいる。

囁くぐらい小さく、分からない単語で聞き取りづらい。

「…あなた様のお名前をお教えてください。」

少女は名を問ってきた。

「俺の名前は鈴木正樹。」

名前を答えると少女から流れ出てくるドロドロとした何かが、俺を縛りつけようとしてくる。

不快なので身を守るように身体に力を入れてよじると、それは逆に少女を縛りつけ始める。

少女は目を見開いて驚いた顔をしたが、すぐに無表情になる。

「…召喚の巫女、アリスアインです。」

目の前の少女の瞳が虚ろになっていくのは気になるが、まずは現状を把握しなくてはならない。

「アリスアイン、質問にいくつか答えてもらっていいか？」

俺は腰をかがめるとアリスアインの視線を合わせて下の魔方陣を指差した。

子供を怖がらせずに話すには視線を合わせることに。…基本である。

「この魔方陣は何のためのもの？」

「…異世界から勇者を召喚し、邪神の力を付与するためのもの。」

聞いたくない単語が、認めたくない事実が、現実逃避したくなる。

「この国と近隣の国の名前を言ってみて？」

「ツアルテユース王国、マルア聖王国、イグジナート帝国、スンジリ商国…」

「わかった。ありがとう。」

一縷の望みをかけての問いに返ってきた言葉は、実に絶望感にあふれるものであった。

どれも地球上で聞いたことのない国名ばかり。
周囲を見ても異国情緒あふれるローブ姿の魔術師ルック。

腹を括るしかあるまい。

どうせ前の世界にいてもグウタラ生活していたのだ。白い世界での約束事は何もしないこと。ならばこの世界でニート生活を満喫すべき！

となると、これからすべきことは自分の能力の把握、金、居心地の良い場所、この世界での習慣、文字などを覚えること。

テンプレ的展開として、まず目の前の少女に教えてもらって、国から金を咽び取るのが王道。

「これからパートナーとしてよろしく。」

「…パートナー？」

俺がにこやかに手を差し伸べると小首を傾げられてしまった。もしかして英単語が通じない？

「相棒とか協同者と言う意味なのだが…？」

「…いえ、私たちの関係は主従関係が望ましいかと。」

「主従関係？」

「…はい、先ほどの使役魔法が反唱されたので、私の主となります。」

衝撃的な言葉であった。

使役魔法？俺が主？奴隷、隷属化する？それを俺にかけるのはなぜ？もしかして邪神の力のせい？

「…これからよろしくお願いします。ご主人様。」

アリスアインの挨拶に俺は固まった。

いくらなんでも幼女にご主人様と呼ばせるのは不味いだろう。でも本人から言ってきたことだし、背德的だし、手を出さなければオツケーということで、ここは全力でスルー。スルーするのだ！

「これからよろしく。」

俺はにこやかに（たぶん顔が引きつっている）返答した。

「よろしいかの？

ワシはツアルテュース王立魔法研究所所長のアドルフ・アイゼンバークというもの。

よろしければ、すこしお話を良いかな。」

長い白髭を持つ好々爺といった感じの爺さんがアリスアインの背後に隠れるように声をかけてきた。

俺を怖れているのは分かるが幼女の後ろに隠れるようにして話しかけるのは男としてどうだろう。

……たぶんアリスアインに使役魔法を使わせたのはこいつ。

「そうですね。今後のことで色々とお話がありますが、とりあえず着替えを下さい。」

俺は笑顔で答えるとジジイは引きつった笑みを浮かべて一歩後ろ

に退いた。

「寝ているところを召喚されたんで、寝巻き姿なので意外と恥ずかしいのですよ。」

俺がさらに笑みを深めるとジジイは後ろに控えている人に服を持ってこさせるように慌てて命令した。

召喚の間から出た後、あてがわれた部屋で俺は考え事をしていた。題名はあの白い空間での「何もするな」について。

何もするなどはなんであろうか？

何もしないという存在してはいけないのか？

だとすると現状の存在していることに矛盾が生じる。

第一、存在してはいけないのであれば、あの白い空間で何らかのアクションがあるはずだ。例えば召喚に失敗して何も呼び出せなかったとか、呼び出されたと勝手に植物人間になってしまうとか。

基準がほしい。

制約として魔王を倒してはいけないならば分かりやすいのだが、何もしないとすると何をしても良いのか悪いのか分からない。

とりあえず平民として生きるのは大丈夫だろう。さすがに平民として生きていけないと困る。

次に貴族はどうだろう？

限りなくNGに近いが挑戦してみないと分からない。大丈夫だといいな。じゃないと食っちゃ寝の夢のパラダイス生活ができなくなる。

勇者はNG、同様に史実に残るような行動もNG、貴族でも王に意見するのはNG、発明もNG、戦争に使われるのもNG………なんか考えていくうちに負け犬人生のダメ人間しか残らなくなっていくのは何でだろう？

俺は考えるのを放棄してベットに身を投げ出した。

精神的な疲労でウトウトとまどろんでいると、コンコンと控えめなノックがされた。

俺は入るように指示すると、入ってきたのはローブ姿の白い少女であった。

「…ごめんなさい。」

部屋に入ってきて言いにくそうにしていたのを待った結果、五分後に喋ったのは謝罪の言葉であった。

「何について謝ったのか教えてほしいな。」

「…まず、召喚してしまったことについて。そして、使役魔法をかけたことに対して。」

「召喚も使役も自分の意思じゃないんだろう？」

「…いえ。使役魔法は私の独断でやりました。」

驚いた。てっきりあの爺さんの差し金だと思っていたのに。

「理由は？」

俺が追求すると、怒られていると思ったのか小さな肩がフルフルと震えだした。

「使役魔法を使ったのは、助かりたかったからです。

……私は召喚魔法の実験の為だけに育てられました。

召喚魔法が終わったら捨てられるか慰み者になるか実験動物にされていたでしょう。それから逃げたくて使役魔法を使いました。

使役魔法を使えば、私に価値ができるから。

使役魔法が成功しても失敗しても価値があるから。だから成功するはずのない魔法を使いました。」

……つまりアリスアインは召喚実験のための使い捨てであったわけだ。

おそらく幼いころから教育されてきた彼女は、実験が終わるのを恐れて絶望的な状況の打開策として使役魔法に踏み切ったのだろう。相手にかかれれば儲けもの、かからなくても反唱されても将来はさほど変わらないと考えて。

アリスアインのまつすくな瞳を受けて、俺は覚悟を決めようと思っ

た。

一生、彼女をそばに置いておくという覚悟を。

俺はアリスアインの身体を抱き寄せると少女の頭を抱いた。

「お前は一生、俺のものだ。」

我ながら陳腐で臭い台詞である。

だが、このときはこの言葉しか思いつけなかったし、後悔もしていなかった。いや、幼い少女の身体を抱いて犯罪者だなあとは思っ

たが。

俺はアリスアインをベットに誘って添い寝してあげることにした。
彼女に価値を与えるためだ。

後から冷静に考えると、彼女の言葉は全て作り話で俺の監視役兼
暗殺役かもしれないとは考えたが、畏でも構わないから彼女を受け
入れることにしたのだ。

俺って甘いなあ……

第2話 どうでもいい話

困を固められて引つ立てられた罪人になった気分が豪華な広間に通されると、大勢の騎士、文官、貴族が待ち構えていた。

跪かされた俺の周囲で、彼らはヒソヒソと俺のところまでギリギリ届くか届かないかの声量で悪口を罵っている。

ピーチクパーチク五月蠅いのを聞き流しながら見回していると、無関心や値踏みするものがあることから宮廷内にはさまざまな思惑が行きかっているようだ。

それにしても言われない誹謗中傷を受け続けるには我慢が限界に近づいている。

その他大勢を見回すと罵っていたり冷笑しているのは男だけで、女性は好奇心に目を輝かせたりしている。男女共通の感情は嫉妬だったりするが……。

しばらくすると王らしき人物と王妃、王女、近衛騎士が数人、謁見の間に入ってきた。

王の顔を見ると反抗心が噴出してくる。

……あいつは気に喰わない。

遣伝子レベルで命令されたかのように反発心が湧き出てくる。

たぶん前世から殺し合いをしてきたのだろう。

王の顔を見る限り、向こうも怒りに顔を歪ませているから同じ想いであろう。

さすがに俺と王の雰囲気気づいたのか場が段々静まっていく。

王との謁見で利点があったのは周囲の雀が静かになったことであるだろうか。

どちらが先とは言わないが、我に返って取り繕うと謁見の儀が始まった。

王様との謁見を行ったのだが、いきなり王への祝辞を述べよとか言われても、そんなことできるかというの、こちらら純粹培養の日本人だぞ。ライトノベルの主人公じゃあるまいし簡単にできるかボケ。

勘違い華々しい謁見が終わると、俺は面倒くさい派閥闘争やら王への無駄な忠誠心やらに巻き込まれる前に、早々に王宮から離れることを固く誓った。

午後に身体能力の確認だとかで騎士との一騎打ちをさせられた。

平和な日本で、格闘技も知らずに又ク又クと暮らしてきた青少年ちゅうねんに、いきなり何をやらせると憤っていたが、何時の間にもやら闘技場の真ん中に立たされては、言い返す気力も起きない。

相手はニヤニヤと下品な笑みを浮かべた美形のアンチャンで、装備が高そうなところで派手な衣装を見ると良い所の坊ちゃんらしい。俺達の世界の一見美形だけど心の底から腐った嫌らしい笑みを浮かべるチーマーを思い浮かべる。

正直言っただけであんなのがもてるんだろう？世の中腐っているとはいえない。

結婚しない暦が、そのまま年齢になる自分を棚上げして現実逃避を始める。

始めの合図で我に替えると、美形のアンちゃんが突っ込んできたので、慌てて距離をとる。

まともによっても勝てそうにないから作戦を立ててみる。

俺にできることは実力を低く見せて平穩無事を勝ち取るだけである。

まず、ど素人のようにドタドタ走って近づき、両手でおもいつきり剣を振りかぶって、フェイントに左手だけを振ると同時に左足をローキック、左足を相手の右足に引っ掛けながら、その反動で身体をクルリと回して剣を振り回す。

とりあえず、戦術ともいえない作戦で戦ってみることにした。

近づいて剣を振りかぶるのはうまく演技できたと思う。だが、格闘なんかやった事のない俺は、距離感を間違えて足を思いつ切り伸ばした。死に体の蹴りになってしまった。

相手は威力が無いことが分かつていたので避けようとせず、蹴りを受けたままにして剣を高く掲げている。

上段から見せ付けるための行動だろうが、思いつきり馬鹿にした行動である。

とりあえず足の甲が相手の膝裏に入ったので足をそのまま引っ掛けて軸にして、無理矢理に身体ごと剣を振り回した。
が、

その行動を読んだのか左足で引っ掛けている相手の足を外されてしまった。

それでも独楽のように無理やり身体を回すが、崩したバランスはどうしようもなく。拳句に剣がすっぱ抜けた。

闘技場に甲高い悲鳴が響き渡った。

相手の動きが止まった。チャンス！

剣の行き先を確認している対戦相手に体当たりして、尻餅つかせると顔面にトゥキックを入れて首輪で押し倒した。

このときになって俺は飛んでいった剣を確認したが、金髪のお姫様の前に青い髪の女性騎士が剣を抜いて此方を睨んでいる。

どうやら剣はお姫様に向かって飛んでいき、危うくぶつかりそうなどころを女性騎士に叩き落とされたので事なきを得たらしい。

対戦相手の騎士がそちらに振り向くはずである。
一歩間違えれば王家の一大事。こんな茶番劇など如何でもよいはずである。

この後、慌てて謝ったのだが、謝れば謝るほど、なぜか女性騎士を怒らせることになって、最後にはフルボッコにされました。

……実力が下に見られたから良しとしよう。

医療室行きになった俺はアリスアインの看護を得て自室に戻った。ボコボコにされてベットから起きる気力の無くなった俺は、アリスアインが近寄って衣擦れさせる音を無視して寝ようか考えていた。アリスアインが俺の横に寝そべってきたので、確認のために目を向ける。

全身の白さが目に眩しい。

幼い肢体に桜色の突起、女であることを意識させる少し丸びを帯びた身体。

信じられないくらいに華奢な手足に、縋りつくような目。

可愛い唇は吸い込まれそうに美味しそうで意識を持ってかれる。

ハッと気づいたときにはアリスアインの顔が間近にあった。

このまま流されようかと思ったが理性が勝ってしまった。

勝てばヘタレ、負ければロリコン。

ダメ男と人間失格の狭間にゆれながらアリスアインに質問した。

「なんで裸なの？」

第一、服を全部脱ぐ時間など無かったはずだ。

床を見ると落ちていたのはローブ一枚。

裸だったのか？ローブの下はマッパだったのか？全裸でローブを着ていたのか？

「…医務室の医療士が男を癒すのは、これが一番だと。」

……俺にどうしようと。

これは俺に対する挑戦か？理性が何処まで持つかの我慢大会か？本能のケダモノに付いているの鎖の強度を知るためなのか？

よし。買ってやろう。その喧嘩買ってやる。

ヘタレだとか、意気地なしだとか、インポだとか言われようとも一切手を付けるものか！

俺は決意で身を雁字搦めに固めるとアリスアインの反対に身体を向けた。

検査などの対策のため、裸にローブは普段どりの服装だそうです。

第3話 勇者とは

「…この世界についてお教えします。」

「ちょっと待って、この世界のことは後にして。まず、勇者について聞きたい。」

俺はアリスアインの説明を遮った。

「この世界についてはどうでも良いが自分の力について把握しておかないと痛い目を見る。最悪、暴走するかも知れない。」

「…勇者は異世界から召喚された人間で、魔王を倒すべく呼び出されます。」

魔王を倒すなんてテンプレすぎる。せめて他国を攻め滅ぼすための決戦兵器にして貰いたい。もちろん自分がそんなものにはなりたくないが。

「…異世界から召喚された勇者には、身体能力の向上、神霊の加護、あらゆる言語の読解、そして、そのひと個人の一つだけの能力が確認されています。」

「神霊の加護？」

「…神霊の加護とは、悪運が強くなる、実は何々であったなどの、ご都合主義としか思えない現象とされています。」

「されています?」

「…はい。勇者学によると、代々の勇者に似たような現象がある」とから神霊の加護と呼ばれています。」

「勇者学？学問になるほど勇者が呼ばれているのか？」

「…記録では二千年前から召喚があり、私がこの国の百一代目の召喚の巫女を引き継いだことから、過去にご主人様を含めて百一人の勇者が呼ばれていると推測されます。」

そんなに召喚されているのは驚きだが、それでも争いが終わらないのには軽い苛立ちがある。

「…まあいい。次に俺の中にある邪神についてだが。」

「…分かりません。」

「分からない？」

「…研究では古代の邪神とされていますが、何も解っておらず。勇者の召喚魔方陣と融合させた形で、勇者に邪神の力を与えるのが今回の実験目的でした。」

頭の痛い話だ。

つまり、今までの勇者では魔王戦との決定打にならず、力の強い勇者を造るため融合系の魔方陣を使用したのだろう。邪神の詳細が分からないのは、金とか利権とかのため見切り発車で今回の実験に踏み切ったのだろうか。

……よく事故が起きなかったものだ。

「使役魔法が跳ね返された結果から、実験は成功とされています。」
使役魔法が返されるほどの抵抗値ならば成功か。単純だなあ。そういう能力だったらどうするんだろ？

だが、能力の分からない未知なものとして扱われるよりましか？正体の分からないものは実験動物にされると相場が決まっている。

「……実験動物は嫌だな。逃げるときはよろしく。」

俺が笑いかけるとアリスアインは頬を染めた。良い関係になれそうだ。味方は多いほうが良い。

この後、アリスアインに色々と質問をしたが、どうやら彼女は一般常識に疎いらしく分からないことが多い。魔術とかには強いので、本当に促成栽培の使い捨てだということが確認できた。

俺たちが一息ついてると扉がノックされ、美しい女性が入ってきた。

……女神かと思った。

白と青のドレスを身に包み、腰までとどく艶やかな黒髪。白い肌。メリハリのある肢体。ツリ目勝ちで、顔立ちは若いのだが美少女というより、美女といったほうがしっくりくる。そして、凜とした雰囲気を持ち、自然とこちらの背筋が伸びる神秘性を持っている。

「こんにちは。私はアララギ公爵の長女、サクヤ・スワミニ・アララギ。私の婚約者になった、マサキ・スズキに挨拶に来ました。」

俺は女性としての完璧な美と心を蕩かせる美声にフリーズして、婚約者と言う単語に石化した。

「コンニチハ。コンヤクシャトハナンノコトデシヨウカ？」

顔が引きつっているのが分かる。こんな状態で声を出せる自分に褒めてあげたい。

「私が政略結婚させられそうになった時に賭けをしてね。

もし、今回の召喚で男性だった場合は、その人に嫁ぐことになったの。」

「ソナナコトガ、カノウナノデシヨウカ？」

どこの馬の骨とも知れない男と貴族の令嬢が結婚できる状況がおかしい。

「普通は無理だけど、今回の実験で普通の男性になる確率が低かったから賭けが成立したわ。」

後、私のお爺様が異世界人であることも一つの大きな要因ね。勇者には牝馬をあてがって厩舎で管理しろと言うことよ。」

ああ、それなら分かる。勇者に色事はつき物だし、自分の陣営に入れるのに良く使われる手である。

アリスアインにしても、幼女で使い捨て感覚なので計算に入っていなかったのであろう。しかしながら見切り発車の実験で暴走の確立が高かったはず、成人男性になる確率も低いはずだし、賭け率は最悪じゃないのかな？

それにしても、段々頬が緩んでいく。

人生、三十五年目にして始めての彼女がこんなに美人で逆玉の越し。嬉しくて心の涙が止まりません。アリスアインの射殺するような

視線も気にならない。人生バラ色ビューティホー！

……いかん。冷静に、ダンディに。婚約だ。まだ、結婚できると決まったわけじゃない。婚約解消もありえる。

「嬉しい申し出ですが、互いを知ってからということですね。それよりも助けてください。」

情けないのは分かってる。こんな美人の前でカッコつきたい。さつきと違う意味で心の涙が止まらない。だけど、しょうがないじゃないか、権力を持っていて一般常識を知っているような彼女を逃すわけにはいかない。

「ええ、もちろん良いわ。」

いきなりのヘルプ宣言に驚いた顔をしていたが、にっこり微笑んだ彼女のビューティホースマイルに心がサラサラと崩れていく。

……ああ、昨日の貴族たちの発言は嫉妬によるものだったのだな

……

「迷惑をかけたくないから町の郊外で練習ができて、実践的なマトがあつて、今後のために金が稼げればなお良し。」

五分ほどで立ち直れた俺は、お言葉に甘えて相談に乗ってもらい身に付けた能力の試し場所の条件を挙げていく。

「あら、魔術や剣の練習をしなくていいのかしら？」

「後々するかも知れないけど、現状では自分の能力を把握して使い

こなすことを優先する。

いつ暴走するか分からないものを城の中で使用するほど俺は常識はずれじゃない。

第一、魔術はアリスアインがいるし、剣術は付け焼刃にしかならない。」

護身用に持っている分はいいかも知れないが、慣れるまでへっぴり腰の姿しか思い浮かばん。

「それでしたら、冒険者ギルドを利用するのが良いと思うわ。」

「冒険者ギルド？」

「さまざまな依頼をして、冒険者と呼ばれる方々が解決して下さるための支援の場で、

仕事としては魔物の殲滅、商人の護衛、遺跡の探索、貴重な材料の採取など色々な仕事があるのよ。

そこで経験を積むといいわ。」

さすが異世界、冒険者ギルドなんてテンプレなものがある。

「それはいい。できれば明日からそこに行きたい。」

「ずいぶんと急ぐのね。できれば理由を知りたいわ。」

サクヤの問いに俺は皮肉な笑みを浮かべる。

「……異質だから。」

イジメ、民族紛争、魔女狩り、人は自分と違うものを嫌う。

「俺はこの世界の異質でね。

人は異質を嫌う。

そして人は嫌ったものに対して排除を行う。

最悪、俺を嫌う人間に暴走されたら、使用人の誰かが殺されて俺の仕業にされるだろうね。」

俺の答えにサクヤは驚きの表情を浮かべている。そこまで考えなかったであろう。

俺だって考えたくないが、ヒトはいつだって愚か者がいる。

「まっ精神衛生のためにも、城の外出許可とお金、護衛役が必要だな。」

俺は重くなった空気を払うように軽い言葉で必要なものを告げる。

「それでしたら、私が何とかするわ。」

サクヤは笑みを浮かべて了承してくれた。

「では、お言葉に甘えてお願いします。」

「あら、夫婦になるのですもの。是位は当然よ?」

「えーと、その夫婦は決定事項なのですか?」

「決定事項よ?」

「なじえ?」

「気に入ったから。」

そんな素晴らしい笑顔で言われても……

俺の周りが危険になること請け合いなので今後のことを考えて、諦めさせるのも良いかもしれない。

なぜなら俺が勇者だから。しかも邪神の力を持った異端の勇者。

「歳はいくつですか？」

「17よ。」

「俺は35歳です。歳が離れすぎていると思うのですが？」

「あら、貴族の結婚でそのくらい当然よ？」

「……ですよね！。」

「えー。俺は好きな人を虐めなくなる性癖があるので結婚生活が大変ですよ？」

自爆的に変態性を暴露する。これでどうだ！ひくだろう！

「わたし虐められるの大好きなの。性癖の相性があって良かったわ。」

笑顔で返されている俺。

……なんか見透かされいるような。……17歳に見透かされる3

5歳って……。
ならば実力行使！

「へえ、じゃあ虐めてあげるよ。」

俺はサクヤの腕を取って引つ張り込むと倒れてきた身体を抱きとめた。

「こんな色っぽい身体をして、滅茶苦茶にしたかったんだよね。」

サクヤの首筋に口を這わせると胸に手を当てて軽く揉む。サクヤが一瞬身体を硬くしたのが解ったがすぐに俺に身を預けてきた。

これはもう我慢比べである。

……頼むから拒絶してくれ。

俺は祈るような想いでサクヤの耳たぶを甘噛みする。

サクヤの身体がビクンビクンと痙攣する。

しまった。やりすぎたか？

「大丈夫かい？」

心配そうに顔を覗き込む俺とは対照的に、サクヤの顔は陶然として淫靡な瞳で俺を見つめてくる。

これ以上はやばい、深入りする。

俺の完敗である。

「あら、ここでして下さるのではないの？」

俺が身体を離すと目を笑わせて非難してくる。

「明日、じっくり上げてあげますよ。」

俺の言葉にからかいの笑顔を浮かべて退出していった。

アリスアインよ、どうかそんな冷ややかな目で見ないでくれ。

……明日からは楽しいピクニックになりそうだ……orz

第4話 旅支度

城の城門前でアリスアインと二人でサクヤを待っていると、貴族用の豪華な馬車が目の前に止まった。

馬車から出てきたのは予想通りにサクヤである。

濡れ羽色の黒髪に銀色の胸当て、紫のケープを羽織った姿は戦女神そのものであり、背負った大太刀が異様に感じられる。

次に降りてきたのは妖精のような少女である。

歳はアリスアインと変わらないように感じるが、アリスアインが人形で、彼女は清純なアイドルといった生氣にあふれた存在。

栗色の髪に水色の瞳の少女は白い皮の胸当てに緑のブリーツスカート、腰に小太刀を二本下げて動作の一つ一つに魅せられる。

「おはよう。この子は、私の妹でマイカ・スワミニ・アララギよ。」

「マイカ・スワミニ・アララギです。よろしくお願ひしますお義兄様。」

少女は挨拶して可憐な笑みを浮かべた。

「マサキ・スズキだ。そしてこっちはアリスアインだ。」

ところで、昨日言っておいた護衛なのだが。」

俺は挨拶をそこそこにして、サクヤに昨日の確認を取った。

彼女達の格好を見れば一目両全なのだが、何事にも認めたくない事実がある。例えば、貴族の令嬢にも関わらず平民のごとき冒険に出てるという小説のような物語のような現実。

「護衛役なら私達が引き受けるわ。剣の腕ならお爺様に鍛えられた

から、騎士隊長ぐらいの腕はあるわよ。」

予想通りの答え。

まあ、淑女らしからぬことをしてきたんだろうなと当たりをつける。

マイカちゃんも腕に自身がありそうなところを見るとかなり鍛錬を積んでるようだ。

アリスアインはある程度魔術が使えて、ニートの俺よりは強いことは確定してるし、うら若い女性の中で俺が一番弱いというのも悲しすぎる。

いざとなったら盾ぐらいにはなるだろう。

……なってくれるといいなあ。

「ところで、この世界の成人は何歳からなんだい？」

とりあえず成人年齢を聞いておこう。郷に入れば郷に従えといっても、成人年齢で却下できるものは却下したい。

「十三歳です。」

マイカちゃんが満面の笑みで答えてくれた。よほど嬉しいらしい。

「歳は？」

「十三歳です。」

「へえ、今年成人したんだ。」

「…ご主人様。何かあっても俺の言うことを聞けとは、彼女を奴隷にするのですか？」

「なっ!？」

アリスアインの言葉に俺は驚きの声を上げた。

なんてことを淡々と言うんだこの子は！真実味がある口調だと誤解されやすいんだぞ！

「お義兄さん。私はお義兄さん専用の奴隷として、一生お使えします。」

「なに言ってるのマイカ！専用奴隷は私がるのよ！」

「じゃあペットで」

「頼むから鬼畜変態ペド野郎にしないでくれ。」

俺の泣きそうな嘆願にも関わらず、アララギ姉妹は楽しそうに笑っている。

早速、玩具（精神的にいたぶる道具）になった俺は、泣きそうな顔でアリスアインを見るとアリスアインが微笑していた。

俺はアリスアインがこのまま溶け込めるといいなあと考えながら、城下町に出るために三人に声をかけた。

「本当に、この荷物の大半を持たなくてすむんだな？」

俺がアリスアインに聞き返したのも無理はないことだろう。俺の足元には四人分のキャンプ用品やら何やらが山となっているのだ。まだ、武器屋と冒険者ギルドに寄っていないのに、防具屋と服屋、道具屋だけで山になってしまった。

はつきり言っただけである。

まず、武器屋と冒険者ギルドに寄らず、最初に服屋に入った時点で荷物が一杯になってしまった。

女性の服は色々と物入りである。と言うか着せ替えはやめてくれマジで（涙）

次に、旅行初心者ばかりなので、余計なものばかり買ってしまった。ている。

基本的に出不精で、海外旅行も行った事のない俺は、彼女らの意見に口を挿めなかった。

最後に、財布を持つ金銭感覚が大雑把な貴族の二人と施される側であるお金の疎い二人ではブレーキをかける人がいない。

結果、膨大な荷物になるわけだ。

しかも、その大半が俺が背負うわけで、（三人がうら若き少女という時点で、彼女達の荷物の大部分が俺が持つというのを、拒否権どころか考えることすら許されない。）これを担いで山に登ると思うとウンザリする。

いくら勇者補正で力が強くなってもこれはない。というか勇者は行商人の格好をしない。（トル コは商人である。）

「…はい。亜空間倉庫の呪文を使えば大丈夫です。」

アリスアインが俺のギラついた目に多少引いたが、頷いてくれた。

「亜空間倉庫ですか？便利な魔法があるんですね？」

マイカちゃんが聞いたこともなさそうに小首をかしげている。

本当にあるのか？

アリスアインは無表情なので、サクヤの顔を見ると驚いてる。

「亜空間倉庫は、召喚術師の最高位が使うことができるとされているわ。」

サクヤは信じ切れていないようだが、本人が出来ると言うのだから出来るのだろう。

概念としては狭間の空間に荷物を放り込んで、必要なときに目印の付いた荷物を召喚するらしい。

言葉では簡単だが、狭間の空間を作り出すことが難しいようだ。

アリスアインがこの年齢で亜空間倉庫の呪文を使えることは、本来ならば悲しいことなのだろう。其れは魔法のことしか習ってこなかったことの証明なのだから。

だが、細かいことは言わん！この荷物を動かさずに済むならば！

「ここで出来るかい？」

「…いえ。時間がかかるので、出来れば人が来ないところか、部屋が良いです。」

俺の期待した瞳に目を伏せながら申し訳なさそうに言ってくれました。

結局この荷物を動かさなきゃならんのかい！
……はあ、リヤカー（文明の利器）が欲しい。

荷物持ち専用の召使になった俺は、武器屋で槍とナイフを買った後、冒険者ギルドで登録することにした。

「へえ、曾お祖父さんは軍刀造ってたんだ。」

アララギ家の曾お祖父さんにあたる二代前の勇者の話を聞きながら歩いていた。

彼女達の話によると、曾お祖父さんは日本海軍の高級将校用の軍刀を造る工房で働いていたらしく、王国に錆びない折れない曲がないという金属を伝え、本人も魔王軍を撃退した英雄中の英雄として伝説となっているそうだ。

世間話をしながら冒険者ギルドの建物に入ると、冒険者ギルドの内部は銀行のようなカウンターと談笑スペース、依頼用掲示板があり意外な広さと清潔感があった。

はつきりいって、すっごく意外だ。

もっと小汚くて柄の悪い連中がいるイメージがあるから。

俺は一通り見回すと、カウンターに近寄って全員の新規登録の旨を伝える。

「失礼ながら、十三歳未満の方は登録できませんが、よろしいでしょうか？」

係員の視線をたどるとアリスアインとマイカがいる。

「十三歳です！」

「…十五歳。」

二人が慚然とした顔で抗議している。

「ごめんなさい？この子は私の妹で十三歳よ？」

サクヤがマイカのフォローを入れて、係員に説明している。

マイカが泣きそうだけど、あちらは何かかなるとしても、「こちらはどうしよう。」

……俺が説明するのか？

アリスアインがこっちを見ている。

泣きそうな顔は俺の妄想だろうか？

マイカとアリスアインを見比べると、アリスアインの方が明らかに幼い。

どうやって説明すればいいのか？

アリスアインが嘘を言うとは思えない。本当に十五歳なのだろう。考えても思いつかないというか、考えるのが面倒くさくなってきた。

逃げたいな。

部屋の隅で気配を消しとけば、そのうち解決するだろう。

だが、三十五歳の男が十代の少女を矢面に立たせることは情けない。

……訂正。すっごく情けない。

考えているうちにサクヤの説明が終わったようだ。

係員がこつちを見ている。
ああ、逃げときゃよかった。

「人間って不思議だよね。」

俺は悲嘆に暮れた顔で係員に向き合った。

サクヤとアリスアインに視線をくれる。正確にはサクヤの胸とアリスアインの胸に目を向ける。

誰しも身体のコンプレックスを抱えながら生きていたいわけでは無い。

「……何も言わないでください。」

俺の物悲しそうな瞳に係員は納得してくれたようだ。

第5話 宿屋

「あの係員ひどいです！」

マイカがふくれっ面でギルドの係員を非難している。

係員が説明しているときの粘っこい視線が気に入らないらしい。

この年頃の理不尽な怒りは、くだを巻く酔っ払いのオジサン並みに理不尽で手におえない。

あれからギルドの説明を聞いた後、山に登るタイプの薬草調達依頼を見付け、買い物で時間をとられたということで冒険者がよく泊まるタイプの食堂兼宿屋に向かうことにしたのだ。

小奇麗で清潔感漂う店内は、女性客を意識して花が多い。

はつきり言って男の俺は非常に居辛い。

だが、俺の我侭で城で泊まるよりも、宿を取ることを決めたのだ。贅沢は言えない。

だって、お城は怖いんだもん。サクヤとマイカの宿屋お泊まり経験になっていいじゃないか。

冒頭からマイカが怒っているのは、ギルド係員が任務失敗時の罰則説明で、マイカに向けていた不信な目だろう。

何しろつい最近、マイカ頃の年で任務失敗した拳句、依頼者の所為にして、逆に賠償を求めてきた人物がいたそうだ。

マイカにとってとんだとばっちりだったわけだ。

「マイカ？折角の美味しい料理が冷めてしまうわよ？」

サクヤの叱責にマイカは慌てて居住まいを正して料理に向き合う。マイカの若さに付いていけない俺としては静かにしてもらえるの

は嬉しい。だが、食堂全体が静かになつてゐる状況としては嬉しくない。

原因としては俺いるテーブルを囲む三人の美少女の所為である。アリスアインとマイカは特殊な人間にしか、興味を受けなさそうだからいいとしても、サクヤが凄い。どのくらい凄いかと言うと、酒場にいる全員がサクヤの一挙一動に息を止めて見惚れている状況なのだ。

はつきり言つて特上の美女が、食堂の安っぽい料理を豪華フルコースのように上品に食べている様子はどこの異次元空間かと。

さらに輪をかけて左右には美少女が異次元空間を引き立てる。

もはや気分は王族の宮殿にいる気分させられる。

彼女達を見ている彼らの瞳には同じテーブルにいる俺など映っていないであろう。いや、嫉妬が痛いから認識されても困る。

「そつといえは部屋割りつてどうするんですか？」

沈黙に耐えられなかったマイカが話を振ってきた。

この宿屋に泊まる事が出来たのだが、結構人気の宿屋なのか二人部屋が二つと、二手に分かれてしまった。

「あら？夫婦で一緒に泊まるに決まってるじゃないの。」

サクヤが艶っぽい表情で俺に流し目を送ってくる。

俺は思わず口元に運んでいたスープを噴出しそうになった。

昨日の続きをするつもりか！

逃げ場を求めて目を泳がせると、アリスアインが俺の顔をジツと見つめている。

上目づかいで縋るような視線にグラツときて、やばい、萌える。

マイカがきゃーきゃー騒いでいなければ、お持ち帰りしそうなく

らい反則的な威力である。

これは、行かないで、一人にしないでと言っているのだろう。アリスアインにしてみれば気が置けない人に取り残されたくないのだろうし。

だが、ここは心を鬼にして、他人に慣れるために彼女達と一緒に寝るくらい良いのではないか。サクヤたちを信頼出来なければ、この世界で生きていくのは厳しいだろう。もちろん無条件で信頼して良いものではないが……

ふと、周囲に気を向けると、なんか周囲の圧力が強くなった気がする。というか呪い殺されそうな視線を感じるのだが、もしかして俺、にわか親衛隊に敵認識されている？

この食堂には男が少ないはずなのに、サクヤの美貌は同性すらも魅了するのか！

「部屋割りにはジャンケンで決めといて、俺は角の部屋にいるから。」

俺は早口で告げると、サツサと二階の部屋に逃げ出した。

俺は二階の部屋でベットに腰掛けると、サクヤの言動を反芻した。

サクヤがもし、この部屋に来た時、俺の理性は崩壊するであろう。そしたら俺は期待しても良いのだろうか？

アリスアインが部屋に来てても理性が持たないであろう。

また、あんな顔されたら襲ってしまう。

サクヤの艶やかな黒髪と女性らしい肢体、アリスアインの白く透き通った肌と神秘的な金色の眼差しに想いを馳せると口元がだらしなく緩む。

しばらく、トリップしていると不毛なことをしているのに気づい

た。

本人が来るわけでもないのに期待してても仕方ないし、彼女も下卑た笑みを浮かべて待つて居られるよりもストイックな漢の方が良いだろう。

俺はそう考えると明日の登山日程を考え始めた。

しばらくすると、部屋の扉を叩く音が響いてきた。

心臓が早鐘を鳴らすのを必死に押さえつけて、ノックの主は部屋に入るように返事をした。

「失礼します。」

部屋に入ってきたのはマイカであった。

「……なんで？」

完全に予想外であった。

あの様子だと、サクヤかアリスアインだと期待していた俺は、予想外の人物の訪問に間抜け面をささげている。

「お義兄さんをお願いしたいことがありまして、譲ってもらいました。」「

ハニーボイスでのお願いに、俺は居住まいを正すと平静を取り付けて相談に乗ることにした。

可愛い美少女の頼みに断れるわけじゃないじゃないか。

「あのですね。お願いしたいことは、私とシテ欲しいんです。」

断っていいですか？

扉を閉めて俺に近寄ってきたマイカ言葉に再度固まる。

……落ち着け。シテセックスとは限らない。

「何をして欲しいんだい？」

「セックスですよ？」

即答に三度目のフリーズがかかる。

「……何で？」

「だって、リリイが十三歳になったら誰でもするものだって。」

「リリイ？」

「あつうちのメイドです。」

なるほど、下世話なメイドの吹き込みか。

貴族令嬢に何を吹き込んでやがる。いや、それよりも、この世界の倫理はどうなってるのか？

「なぜ俺？」

「えっだって優しそうだし、お姉ちゃんがあんな顔するくらいだから上手いのかと思って。お姉ちゃんがあんな顔しているの始めてみたんですよ。だから私も気持ちよくさせてもらえるならいいかなと思ってお願ひしたいんですけど。」

マイカ本人も一杯一杯になってきたのか口調が早口になってきた。

「……一つ断っておく、サクヤとはヤツてないぞ。」

「えっ嘘。」

「嘘じゃない。第一、昨日あったばかりでできるものか。」

「でも、愛し合うことに時間は関係ないって。」

頭が痛くなってきた。耳年間の彼女はメイドの言葉を鵜呑みにしての行動らしい。

元の世界での性生活の乱れも、こういう噂話とかの所為なのか？
三十五年間、彼女なしの童貞男としては倫理観の低さに嘆かざるを得ない。

ここは性教育をして、女性としての危機感を高めたほうがいいだろう。

「まあ世の中にはそういう意見があるけど、もう少し危機意識を持つた方が良くかな？」

例えば、病気の問題、男性とするとということは病原菌を体内に入れるということだ。

男性は問題なくても、女性には一生残る病気や場合によっては死にいたるものもある。

次に責任の問題、快樂だけで男性と行為をすると男性はやり捨て感覚で性行為に走るから、赤ん坊が出来た時に男性が逃げて女性だけが泣くはめになる。

だから、本当にその人がいいのか見極めるのが肝心だよ。」

少し大げさかもしれないが、俺としては貞淑な女性でいて欲しい

から説教に近い説明をしてしまった。

これでフラグをへし折っただろう。変態じゃないからこの選択は正しいのだけど、何だろう、凄くもつたいない気がする。

「……やっぱりお義兄さんがいいな。」

小さい声だけど、ポツリと漏らした言葉を俺は聞かないことにした。

全身全霊で無かった事にする。俺の夢想の中の出来事だ。白昼夢だ。電波だ。

「まあ、時間はあるんだし、本当に好きな人が見つかったら考えればいいことだよ。」

それよりも、男の人の喜ばせ方とか教えて上げるから、ね？」

俺は思い詰めた表情のマイカを元気付けさせるために、男性が女性にしてもらって喜ぶことを俺基準で吹き込むことにした。

「いいかい？男は恥らう女性に燃えるものだ。」

昼は貞淑、夜は娼婦という言葉があるように、始めは清楚につきましく。行為が始まったら嫌がることなく積極的になることが一番いい。」

俺の言葉にマイカは真面目に聞いている。

ふと我に返って、三十五歳の童貞の自分が年若い少女に性教育していることに悲しくなってくる。

なんで異世界にきて光源氏計画してるんだろう？

でも目を輝かせて真剣に聞いているマイカを見て話を終わらせることが出来なかった。

「男性のモノを見たことはあるかい？」

俺の問いかけにブンブンと首を振って答える。
父親のモノを見たことあるかと思っただが残念ながら無いようだ。

「じゃあ見せてあげるからよく観察してね？」

俺は断りを入れるとズボンを脱いで下半身を露出した。
マジマジと好奇心のまま見られて興奮してくる。

やべっ俺って露出癖があつたのかも。

「こんなに大きくなるんですね。」

「これに触ったり、舐めたりすると男性が喜ぶ。チョット触ってみるかい？」

俺が許可を出すとマイカは恐る恐る指で突いたり摘んでみたりして、初めは抵抗感があつたものの次第に慣れてきたのか大胆に弄るようになってきた。

「あまり強くしないように。」

で、先端の穴からオシッコや子供が出来る液体が出るんだけど、飲んであげると男性は嬉しがる。」

「ええ〜オシッコもお〜？」

「大抵の男は尿を飲ませることはしないんだけど、たまにそういう性癖の人もいるから。」

マイカがイヤな顔して抗議するが俺は極一部の变态がすると付け加えておく。

「大抵の男性は征服欲を満足させてあげると気分よくなる。

後は、その人の個性や状況によって変わってくるから、好きな人と交わったときに経験を積んでいくといいよ。

さて、これで講義は終了。手を洗ってきなさい。」

感触を楽しんでいたところを強制的に終わらされて不満そうなマイカを宥め、部屋の外に出した。

「今夜寝られるかな？」

ズボンを穿き終えてベッドに腰掛けた俺は、悶々と欲求不満な長い夜を迎えるのだった。

第6話 ハイキング

地図ともいえない目印だけの地図、視界を覆わんばかりの草、道ともいえない獣道、日本の山道が恋しくなるほどの大自然の洗礼を受け、俺は今、冒険者の方々をとても尊敬している。こんなひどい山歩きで良く遭難せずに生きて帰ってこれるものだ。

元の世界よりも生命に満ち溢れるとは聞こえがいいが、逆に言えば喰うか喰われるかの弱肉強食の世界。アマゾンの密林に放り込まれたときのような緊張感の連続で俺達は疲弊した。

目的の行程をこなして、キャンプ場所に辿り着いた時には安堵感から溜息が出た。

冒険初心者だけの俺達が、よく道に迷わなかったと自分に誉めて上げたい。

山岳ガイドの重要さを思い知る。近くの集落でこの場所の位置をキチンと聞いていなければたら絶対に遭難していたという自信がある。

もう二度と山系のクエストは受けまい。

「薬草探しは明日からにして、今日はここでキャンプをする。」

俺は年長者兼パーティーリーダーとして宣言する。

日はまだ高いけど、朝早くから起きて山に登り続けた俺達は、かなりの疲れがたまっているはずだ。焦って行動して怪我するよりも、じっくり腰をすえてキャンプをするべきだと判断した。

まあ、魔物しだいではなんとも言えないが、今は戦闘よりも自然相手の方が怖い。

幸いにも、この山には目立った魔物の噂は無い。

俺の宣言を聞いてアリスアインは亜空間倉庫の準備を、サクヤと

マイカはキャンプ経験があるのか水汲みと竈作りを始めた。

誰の手伝いをするか考えたが、荷物の無いのに手伝いも無いと思
い、アリスアインが荷物を取り出すまで修行をすることにした。時
間は有限である。特に今の力の使い方の解らない状態では、敵対す
る連中に襲ってくださいと言っているようなものだ。

まず、勇者の力に対しての考察。

身体能力の向上は、ニートで力の無い俺が昨日あれだけの荷物を
持っても疲れなかったことからある程度あるのだろう。更なる力の
使い方、戦闘技術の身に付け方に付いては誰かに師事する必要がある。
る。

次にあらゆる言語の読解、便利能力だけど今のところ使い道が無
いからパス。

神霊の加護、良く分からないからパス2。

そして、個人に一つだけの能力。これはどんな能力か分からない
ため、なんとも言えないが、召喚魔方陣の光を喰らった力かもしれ
ない。

もしかしたらあれば、白い空間で貰った力かもしれないし、邪神
の能力かもしれない。最後が一番ありそうだが断言出来ない。

このキャンプではあの喰らう力をうまく使えるように練習すると
しよう。

力といえば、俺にはどの位の魔力があるのだろうか？普通、こう
いう勇者召喚物だと魔力が高いのが一般的だけど……。

魔力や魔法については最高位アリスアインの召喚術師に聞いてみよう。

剣もサクヤかマイカに教えてもらう。もしくは、彼女達の師匠に
教えを請うとするか。

ああっ！家でゴロゴロしたいのに、そんな暇が全然ない！

でも、やらないと命に関わるし、でも身体と脳は極力動かしたくない。

葛藤で悶絶しているとアリスアインの儀式が終わったようだ。とりあえずはキャンプの手伝いをするか。

「このスープ美味しいな。」

「お姉ちゃんは料理も魔法も何でも出来る天才なんです！」

マイカは自分のことのように自慢気に胸を反らしている。塩と香辛料が絶妙なバランスで、空腹の胃に沁みこむ。

「そういえば、魔法って誰でも出来るの？」

話しに魔法が出てきたので、魔法の使用条件について話を振ってみることにした。

「理論上では誰でも出来ることになっているわ。」

「じゃあ、俺でも出来るのかな。」

「…魔術は生まれ持つ魔力量、魂の形による属性形質、現象の想像能力によります。」

魔法はさらに魔法回路の知識、精神の手の器用さ、純粹魔力への昇華が必要です。」

サクヤが答え、俺が期待した声にアリスアインが否定した。

「お姉ちゃんは何でも出来るけど、私は付与系魔術しかできないんだよね」

マイカが自身の能力に嘆いたが、そんな姿は何時もの事なのか、サクヤは器用貧乏なだけよ。と、こつちを向いて苦笑していた。

「魔力とか属性を測ることはできないのかい？」

話を軌道修正して、俺が魔法を使えるか質問を試みた。

良くある召喚ものだと魔力と属性が解るアイテムがある。もしかしたら簡単に分かるかもしれない。

「魔力と属性は反応石を使えば、ある程度解るけど詳しくは解らないのよ。」

「じゃあ、その反応石使えば大体でも解るんだな。」

「…ご主人様は、すでに反応石を使用されています。」

サクヤが答え、俺が期待した声にアリスアインが否定する。

俺は間抜けな顔でアリスアインを見た。

俺のやる気のことごとく奪っていくアリスアインが憎い。

すました顔で説明するアリスアインの頬つぺたを、むにーって伸ばしてやりたい誘惑に駆られる。

「…召喚の時に触れられて、粉々になった石が反応石になります。」

えっ、あの石が反応石なの？

召喚された時、じいさんが自己紹介した後、イラついてる俺に近

寄ってきた勇氣ある研究者に石に触るように指示された。

何の変哲の無い石だったから、疑問に思いながら触れると石が光ながら粉（砂よりも細かい状態）になっていく。

びっくりして、石を持ってきた研究者をみると、研究者も吃驚していた。

研究者は驚きから返ると、光る粉をかき集めて、どこかに飛び出して行ってしまった。

あの石に何の意味があったのだろうと考えたのだが、あのときの石が反応石だったのか。

だが、石が粉になるとはどんな属性なのだろうか？

光ったということは魔力はあるのだろうけど。

「……魔力があると考えよう。」

何とも言えない顔で黙っていると、俺は希望的な意見で話を締めくくった。

薬草はベースキャンプから二時間歩いた奥地で採取できた。

地元の集落で聞き込みしといて良かった。じゃなければ、この山を延々とさ迷っていた事だろう。

当然あると思っていた王都からの見張りはなさそうである。

俺達の動きについてこれなかったか、被害妄想で取り越し苦労であっただか。

買い物で一日潰れているはずだから、見張りを付けるのであれば十分可能な時間のはずだ。

見張りの質が良すぎて、こちらが気づかなかったが、一番ありそうでいやだなあ。

力の制御も予想よりも旨くいった。だが、予想外のことが二点。一つは魔法陣の光だけじゃなくて石とかも吸い込むこと。つまり、魔力だけでは無く、物質も吸い込む。召喚されてすぐに押さえ込まなかつたら、周囲にいる人は全員死亡していたわけだ。すでに過ぎ去ったことなので、制御できて良かった良かったと胸をなでおろすだけである。

次に、力を押し返し、枯れ枝に包むように力を与えると鉄並みに硬くなった。

どうやら、付与系魔術のように魔力だか、なんだか分からん力を付与できるらしい。

らしいと言うのも魔力だと思って付与したら、惨劇が起こってしまったからだ。

その惨劇は帰り支度をし終え、帰り道を降りようとしているときに起こった。

藪の影からひょっこりと小柄な人影が飛び出してきた。本当にひょっこりという擬音が相応しい位の唐突さだ。

小柄な人影は汚らしい身なりで、邪悪な顔つきで、こちらに驚いてる。(後で聞いた話ではゴブリンだったらしい。)

こちらに驚いていたから、お見合いした感じだ。

俺達が戦闘態勢を取るとゴブリンが叫び声を上げた。

すると、叫び声を上げたゴブリンの後ろから仲間のゴブリンがゾロゾロと藪影から出てきた。総勢二十四匹、やはり一匹見たら数十匹なのは、Gの名をもつ彼らと同類なのだからだろう。同じGの名をもつ彼らに引けをとらない数である。

俺は覚えたての付与魔術もどきを使うことにした。検証なしで使用するのには不安であるが、枯れ枝を鉄並みの硬度に変えたのだから防御には中々のものだろう。

数が脅威なので無傷じゃ済まないかもしれない。

周囲にいる三人の少女達に纏わせることを意識して力を放出する。呪文を唱え始めたサクヤとアリスアイン、二人の邪魔にならないよう脇に退いたマイカに向かって、触手のように力が飛んでいき、スライムのように三人の身体を包みこんでいく。

二十匹のゴブリンの中に飛び道具を使うものがいなくて良かった。この状態で飛び道具を使われると折角の呪文が台無しになってし、最悪バラバラにされて各個撃破されてしまう。

ゴブリンが駆け寄ってきて前方5mのところまでサクヤとアリスアインの呪文が完成した。

サクヤが足を止めさせるため、一番前のゴブリンに向かって氷の矢を飛ばし、アリスアインがゴブリンの群れ全体に、石の雨を召喚してゴブリンの頭上に降らせる。

呪文の範囲外で生き残った二匹のゴブリンがいたが、マイカが風のような流麗な動きでゴブリンに向かっていき、ゴブリンの間を駆け抜け、そのまま遠くまで行ってしまふ。

その動きに見惚れながら、頭の片隅で何であんな場所まで行くのだろうかとの頭の片隅で疑問に感じていると、ゴブリンの頭が胴体から離れて首から血が噴出した。

どうやら彼女は血を被るのが嫌で遠くに離れたようだ。

終わってみると完勝で、俺のしたことがまるで無駄になってしまった。

俺が一番弱いだろうと予測は付けていたのだが、実際に現実を知らされると悲しい気持ちになる。

それにしてもマイカの技量はかなりのもので、達人並みでは無かるうか？

あの年でこれだけ動けるのはたいしたものだ。三十五歳の二ートには逆立ちしてもついていけない動きである。

こちらに駆け寄ってくる姿を見ながら、マイカとの実力差に寂寥の虚しさを感じてしまう。

「お義兄様。マイカの剣技見てて下さいました？」

嬉しくて尻尾があつたら振りちぎらん限りに喜びを現している様子に、なんだろう違和感がある。

「ああ、綺麗で見惚れちゃったよ。」

「嬉しい。」

抱きついてきたマイカの頭に手を乗せる。

……はて、こんな娘こだったっけ？

何かが引っかかる。

出会って間もないから、気のせいといえれば気のせいなのだが、気になる。

疑問の答えを求めてサクヤを見ると、陶然とした表情で俺を見つめている。

服の袖が引っ張られたので、目を向けるとアリスアインが物言い

たげに上目遣いでこちらを見つめている。

……なんだろう、この状況は。

なんだか嫌な予感がする。

例えるなら、俺の人生で絶対にありえなかった状態になる予感。それは向こうの世界では感じなかった生命の危機にも似た予感。人生の根底が崩されてしまうような予感。

……逃げなければ。

急いでこの場から逃げなければ。

ちようど良い。ゴブリンの死体がゴロゴロしている。

この場から逃げるのだ。

「みんな、ご苦労さん。とりあえず山を降りようか。」

何かの危機的予感に突き動かされて、俺は周囲を最大に警戒しながら下山を促した。

第7話 告白

下山した俺達は麓の集落の人たちにゴブリンが出たと忠告し、冒険者ギルドに薬草を届けたついでにゴブリン遭遇の報告をしといた。一応、義務として報告だけはしといたけど、脅威とは見做されていないようだ。後は上の人が考えることで俺には関係ないことなのだが、妙にここの人たちの危機意識の低さが気になる。

しかしながら、現在頭を悩ませている事態に直面している俺としては、そんなことどうでも良い話しにするしか無かった。

王都に帰り、以前に泊まった宿屋にもう一度部屋を取ることができた。

以前と違い、部屋が空いていたので一人と三人で分けようとしたのだが、サクヤたちが反発し、一緒の四人部屋に寝ることが決定してしまった。この時、貞操の危機を感じたのは気のせいでは無いだろう。

そして、今、宿屋のベッドの上に座って頭を悩ませている。

結果から言うとサクヤ、マイカ、アリスアインの三人が元に戻らない。

三人が身体に引っ付いて神と崇めんばかりだったので、敵の攻撃が毒物でも盛られたのかと不審に思って王都に帰り道を急いだのだが、冷静に考えるとどう見ても魅了系チャームで敵の有利になるメリットが無い。

原因は他にある。

馬鹿馬鹿しいが俺にそういう能力がある場合。

神から貰った力、勇者の能力、邪神の力、この三つのうちどれか

がそういう能力があるのかもしれない。

それ以外に考えられるとしたら俺が使用した付与魔術もどきのせいだ。

力あるものへの依存としてハロー効果というものがある。

力あるものは何でもできると思い込んでしまうこと。

簡単に言うと、後光が差すものへの依存だ。

現代社会でいうと議員の子供やスポーツ選手、タレントに政治ができると思いついてしまふ現象である。

俺を召喚したときに使われた邪神も神ではある。

付与魔術もどきも神の加護と言えなくも無い。

今まで力を使用してこなかったが、あの山で始めて力を使用した。というか三人は直接、力に触れた。

それはもうどっぶり浸かるほどに。

力への依存である。

強力な力を感じ、力無くては生きていけない。

力の元は俺である。

つまり俺なしでは生きていけないという、すり替えが起こったと考えられる。

後者の方がありえる気がしてきた。

推論に推論を重ねた暴論で結論に、納得している自分がいる。

誰か否定して欲しい。

知らなかったとはいえ、彼女達の心を強制的に変えるようなことをしたことに良心の呵責を覚える。

叶うならば、彼女達が元どつりになるまでキッチンと紳士的に付き合っつていこう。

そうしないと、今の状況に耐えられない。

理性が限界になる。

俺はペドでもロリでも無い筈なのに据え膳には抗えがたい。

「ねえ、こつちむいてえ」

俺の横に座っているサクヤが甘ったるい声で誘いをかけてくる。本能を刺激する色香に俺は決意する。彼女達には自分の状況を説明しよう。

鬼畜なやつならこの状況を利用して彼女達と行為を持つだろう。だが、俺は紳士として誠実に逝きたい。

ヘタレでも意気地なしでもいいから彼女達に説明するべきだ。

「あゝ、俺の話聞いてくれるか？」

俺の声に反応して三人の顔の表情が改まり、真剣な表情になる。

一語一句、動作の一つでも逃さないと俺を見つめる。

俺は表情を改めて三人の瞳を見返す。

三人とも顔を真っ赤にするが、この変化も俺の所為だと思つと悲しくなる。

「この前ゴブリンを倒した後から変な感じがしていないか？」

俺の質問に不思議そうな顔をしている。自覚が無いらしい。

「実は俺の所為で三人が変わってしまったんだ。

自覚は無いみたいだけど、あの時に俺が使った付与魔術もどきの後から魅了チャームされたように積極的に俺に迫ってきているんだ。

敵の仕業かと思つたけど、その様子が無いから多分俺の所為じゃないかと……」

彼女達の視線に耐え切れなくて最後のほうは目を泳がせてしまった。

本当に申し訳なく思う。

「構わないわ。貴方に心を捧げられるなら何されたっていいもの。魔術で強制されることだって都合が良いぐらい。」

「何で？」

「だって、貴方は私の運命の人だもの。ずっと待ち続けた運命の人だもの。」

サクヤのトリップした言葉に、俺は軽く引いてしまつと同時に絶望感が襲う。

あの魔術もどきを解呪しないかぎり、言葉は通用しないのかと。俺はサクヤを諦めて他の二人を見る。

「…私はご主人様の奴隷です。」

「お義兄様がしてくださるのなら何でも受け入れます。」

アリスアインは何を今更という感じで冷めた答えが返ってくるし、マイカは決意を新たにしてくれる。

やはり言葉は通用しないらしい。

これからの予定は魔術もどきを解呪することを重視するべきか。でも、ハロー効果は相手の精神や考え方に寄つて違うから解呪は意味が無いし、(そもそもあれは暗示の一種である。)自分の力を自分で解呪するのは難しい気がする。もっと自分の力を操れる時間が欲しい。でもその時間が取れたとしても貞操は無事だろうか?その前に敵に対抗して生き残る術を身に付ける時間を造らなくてはいけない。そうしたらサクヤ達の猛攻に耐えられるだろうか?

「ねえ、私達に償いたいなら良い方法があるのだけど。」

サクヤが俺の二の腕に腕を絡ませて迫ってきた。

俺はループしかけた思考を止めて、間直に迫ったサクヤの瞳を見た。

結果は、改めて見惚れてしまった。

腕にあたる胸の感触の耐性を付けるために、あえてサクヤの顔を見て煩惱を払おうと思ったのだが……

その美しい顔に宿る桃色の色合い、恋する乙女は美しいと言うが彼女の美しさはその美しさの十倍は魅力的で此方を見つめる瞳の澄みやかさは引き込まれるようだ。否、すでに引き込まれている。

「私達と結ばれれば問題ないと思うの。」

俺のトリップした思考に囁かれた甘い言霊に俺は頷きそうになった。

結ばれればいい。

むずぶ。

誰と。

俺とサクヤが？

私達？

マイカとアリスアインがいる？

俺はハツとして、マイカとアリスアインの瞳が異常に熱を帯びているのを見て取ると、この場を逃げようと試みた。

しかし、ガツチリ掴まれた腕は外せず逃げられなかった。

「さて、明日からの予定の話をしようか。」

俺は無理やり話題を方向転換させて起死回生の一手を打とうと試みた。

だが、三人は聞く耳を持たず、俺の周りに集まる。右手にサクヤ、左手にマイカ、正面にアリスアインが陣取り、絶對絶命の窮地に陥ってしまった。

まるで女郎蜘蛛の巣に捕まった羽虫になった気分である。

サクヤの顔が迫ってくる。

何をしたいか分かっていたが、俺にはもう抵抗する気力も無くされるがままに流されてしまう。

サクヤは自分の唇を俺の唇に押し付け、一度軽くはなれてから舌を入れてきた。

サクヤの濃厚な口付けが離れたら、後ろに引っ張り込まれる。

「お義兄様、次は私を……」

マイカが可愛らしく口を突き出してキスをねだる。

俺は誘蛾灯の様にフラフラと唇に吸い込まれて行く。

頭の中でキスくらいなら大丈夫だろうと甘く考えていたことは否めない。

マイカに軽くキスしようと近づいたら頭を抱きかかえられて濃厚なキスの嵐を喰らってしまった。

二度目のキスで酸欠になってクラクラしているところに袖を引っ張り込まれ、身体が横に倒れこんだ所をアリスアインに唇を奪われた。

三人のキス攻撃に屍になったところで再びサクヤに引き込まれ、身体を完全に預けることになってしまった。

「私まだ初めてなの。リードよろしくお願いね？」

完全に俺が押し倒した格好で耳元で囁かれた言葉は、童貞の俺に無茶な要求であった。

マイカとアリスアインの様子を見ると自分の番はまだかまだかと

待っている。

俺への助けは空から隕石が降ってこない限りありえない。

俺がケダモノになるのに時間がかからなかった。

俺はサクヤの唇を奪うと胸をまさぐる。

美しく形の良い母性を強調する膨らみは、柔らかさと弾力性が絶妙であり揉んでいて楽しくて気持ちが良い。

一度離れて二人とも裸になると、どちらからともなく再び唇を合わせてベッドに横たわる。

吸い付くような胸を優しく触れるように撫で回し、搾り出すように下から上に持ち上げる。

酸欠するぐらい吸い取ってやると口を胸の頂に寄せて舐めまわす。白い肌がピンク色に染まり、美しい顔が羞恥に赤く色づいている。片手を股の間で優しく探るように動かすとサクヤの口から喘ぎ声が漏れ出した。

俺は愛おしく狂おしいほどに身体を弄もよほった。

湿り具合は上々である。これ以上やると逝ってしまうかもしれない。

童貞の俺に女の加減など判るはずも無く、準備良しとして自分のケダモノを押し付けることにした。

キスをしながら両手で狙いを定めて貫き通す。

途中で抵抗があつて痛そうな顔をしていたが、かまわず奥まで突っ込み身体を止める。

痛みが和らぐまでキスと胸の愛撫をしてやると、サクヤは腕をまわして抱きついてきた。

息継ぎついでにアリスアインとマイカを見ると、二人はいつの間

にか裸になって手を自分の股間に当ててこちらを凝視している。

俺は二人を呼んで慰めてやるうかと思っただが、顔を両手で挟まれて無理やり唇を奪われたので断念した。

いつまでも俺の頭を離さないのが抗議の意を込めて腰を動かす。ゆっくり複雑な軌道で動かすとやっと唇から離れたが、今度は胸に抱かれてしまった。

窒息死しそうなくらいキツく抱かれて、俺はもがく様に腰を振る。サクヤの両足が腰に絡まってこようとサクヤの身体の痙攣が止まらなくなっていようと、俺は生存本能の命じるままに犯しつくした。

やっと力が弱まって腕の中から抜け出すとサクヤは失神していた。正直やり過ぎた感はあるが、こうでもしないと俺が逆の立場になっていたかもしれない。

セックスダイエツトという行為が解るような疲労感である。

荒い呼吸を整えているとマイカとアリスアインが俺のそばに近寄ってきた。

正直言うとサクヤとの行為でお腹いっぱい、これ以上する気が無いのだが、二人の雰囲気があるのを許しそうに無い。

二人に手を出すと人としての尊厳が削られていきそうだなのだが、俺は死者に鞭打つように自分に叱咤して年齢順でアリスアインから受け入れていく。

マイカを抱くまでに俺がへばっている事を期待してのせめてもの抵抗である。

第8話 王城襲撃

カンカンカンカんと、宿屋の外から鐘が鳴り響く。

俺は気だるい身体と眠い頭を振り払いながら服を着替える。ハツキリ言っただけの後で、疲れ果てて何も後始末しないでいたから気持ち悪くて仕方ない。

カピカピの、汗の匂いがムンムンなので、風呂に入りたい。

サクヤ、アリスアインは既に着替え終えて、マイカは半分寝ながらサクヤに手伝って貰っている。

四人で行為をしたから寝不足で仕方ない。三人の少女達も初めての後で辛いだろうが、緊急事態だから文句も言ってもらえないだろうというか、もういい年の体力の無い俺を心配して欲しい。

昨日の行為を思い出し、気を抜くとロリの道に子牛のごとく連れて行かれそうになる。(手を出した時点で既に手遅れという意見は置いておく。)

この鐘が緊急のものならば火事か魔物の襲撃か、いずれにしても王都では大騒動になることだろう。まだ夜明け前だから外にいる人が少ないが、規模によっては混雑を通り越して騒乱になる可能性もある。

早めに行動する必要がある。

俺達が出立の準備を終え、部屋を出て一階に下りると、既に宿屋の主人と女将さんが起きていて、商人らしき人と話している。

商人らしき人は何かしら喋った後、すぐに宿屋を発って行った。

「なにかあったのですか？」

「王城が魔族に襲撃されたそうです。避難命令が出ました。」

俺が尋ねると宿屋の女将さんは顔を青くさせて、他の宿泊者を叩き起こすべく二階に上がって行った。宿屋の主人は既に自分達の荷物をまとめにいつている。

俺はこの襲撃をチャンスだと考えた。

俺はいくつか懸念していたことがある。それは俺の命を狙う存在と俺を召喚した魔方陣を使用し新たな邪神候補が生まれることだ。

今回は奇跡的に何事も無かったが、次回はそうとは限らない。誰にも止められないような邪神になってしまうこともありえるのだ。

今なら王立魔法研究所も混乱しているに違いない。

こちらには公爵家令嬢という権力とアリスアインという研究所内を良く知る人がいるのだ。無理を通して今回の魔方陣に関する資料を焼却することだってできる筈だ。

罪は全部、魔族の所為にすれば良い。

「これから研究所に向かう。」

「王城に行かないの？」

「助けてやる義理も無い。足手まといにしかならない。それよりも勇者と邪神をつなげた資料とかを焼却する。」

俺が強い意思を込めて言うと、文句も無く黙ってしまった。

三人ともなぜか顔を赤らめていたが今は構っている暇は無い。急いで研究所に向かって走り出した。

やっぱり付与魔術もどきの所為なんだろうなあ。このまま人形みたいにならないでほしいなあ。

少女達の未来を按じながら走っていくと研究所に辿り着いた。始めのころは押し合い圧し合いの通りであったが、城に近づくにつれ城に向かう人しかいなくなり、研究所に向かうところには周囲は俺達以外誰もいなくなっていた。

研究所は最低限の人を残してみんな城の防衛に向かっているらしく。サクヤを前面に出して研究所所長に用向きがあることを伝えると首をひねりながらも素直に中に通してくれた。

「召喚で邪神と勇者をつなげる研究をしていた研究者の部屋はどこ？」

俺が尋ねるとアリスアインは前に出て部屋を案内してくれた。

「部屋の主の名前は？」

「クラアイスト・ヘーベンです。」

「特徴は？」

「…痩せていて、メガネを掛けて、偉そうです。あと、召喚術の腕は並みですが、魔法陣の解析と改造に関しては天才と噂されています。」

俺の質問にアリスアインは事務的に答えてくれる。

やはり、この研究所に来るのは嫌だったのか表情が固い。

俺は部屋の前に立つとノックし名前を呼んだ。しかしながら、返事が無かったので無断で部屋に踏み込ませてもらった。

部屋の中は意外に綺麗に纏まっていると言っているだろうか。しかし独身男の六畳部屋と比べればの話で、大貴族の令嬢達を見るに耐えないぐらいの汚さである。

俺達は扉を閉めると散開して各自で資料を調べることにした。中々肝心の資料が見つからない。

「貴様ら何をしている!」

しばらく調べて目的の物が見つからなくてイラついてきたときに、突然部屋に入ってきた人物が怒鳴り声を上げた。

痩せ型でメガネをかけて尊大そうな雰囲気である。

この部屋の主がきたことで安堵感が生まれる。

手詰まり感があったのだ。ここは頭を冷静に切り替えて、この場を切り抜ける。

「クライスト・ヘーベン様ですね？」

私達は裏からの命令で召喚術に関する資料を焼却しろとの命令でやってきました。

急ぎですので、部屋に無断で立ち入った事をお許しください。」

俺は嘘八百を並べ、その場を誤魔化す。

「ふん。裏だと?」

「はい。今回使用された召喚術に関する資料はクライスト様の頭の中にあるものだけで良いとの答えです。

下手に資料が散逸いたしますと軍事バランスが崩れますので。」

俺って詐欺師の才能があるのだろうか?こんなことをペラペラと喋れることに自分自身で驚く。

「ふん。資料ならそこにあるわ。」

一応、信用してくれたらしい。男が示したのは隠し扉の奥にある本棚であつた。

俺はサクヤとマイカに本棚の資料を燃やすように指示すると外の様子を男に尋ねる。

「お城の様子はどうですか？」

「ふん。完全に負けだな。今は騎士どもが町に被害が出ないように踏ん張つて膠着状態にしているが、王は討ち取られ、王族の居場所は分からん。お前らも早く脱出しろよ。」

男は持ち出す物を仕分け、身支度を整えながら返事を返してきた。彼は形勢が悪いと見て逃げ支度をするために戻ってきたのだろう。

俺は城の様子に好都合と思ひながら、手伝う振りして男に近づいた。

「クラアイス様から見て、この研究所で他に漏れると不味いと思われるものは何でしょう？」

「ふん。知つてどうする。」

「いえ、我々の知っているものとの情報の摺りあわせです。」

「ふん。地下の実験室だ。」

すでにこの研究所と見切りを付けたつもりなのか簡単に喋ってくれる。(まあ、急いでいるのもあるだろうが。)

アリスアインに視線を送ると顔色が悪いので存在を知っているの
だろう。

もうこの男に用はない。

落ち着け、心穏やかに、花を摘み取るように、殺気を出さずに、
心を凍らせて、にこやかに、物を素早く置く感覚で、視線でばらす
な、一瞬を逃すな。

「ありがとうございます。」

俺はお礼の言葉と共に喉に向けて手を伸し、吸引の能力を使用す
る。

男は完全に油断して喉輪をまともに喰らった。

驚いた顔をして何かを喋ろうとするが、もう既に喉を吸引の能力
で潰されているので声にならない。

俺は男の身体に意識を傾けて能力を調整した。

すると周囲に影響を与えず、男だけが綺麗に吸い込まれていく。

しばらくすると男の姿は完全に消え去っていった。

「資料は消したな。すぐに地下に行くぞ。」

うまくいって安堵感があるが、呆然とこちらを見る三人娘の視線
から逃れたい。

男を殺したと非難を受けているようで辛い。

罪の感傷をしたいところだが時間が無い。かといって地下の存在
が気になる。

俺は男を殺したことから逃げるように命令を下した。

時間を理由に逃げているのは解る。

だが今は反省している時ではないのだ。

再びアリスアインを先頭にして廊下を駆け抜けると鉄格子の扉に辿り着いた。

鉄格子の先には下に降りる階段があるが扉には鍵がかかっているようだ。

俺は鍵の部分だけ吸引の能力を使用して鉄格子の扉を開ける。

なにやら魔法も掛かっていたようで魔力も吸収していく。

魔法陣の一部を空白にした感じで、魔法が発動する心配が無い。便利な能力である。

階段の先は明かりが無いので、研究所の闇のように真っ暗だ。

「明かりは使えるか？」

俺の問いにサクヤがすぐに魔法で光球を生み出す。

アリスアインの顔色が相当悪い。

だが、立ち止まっている暇も無ければ、残して置けるほど人数も無い。

最悪、背負いながら探索することも覚悟で階段を降りることに決めた。

第9話 地下研究室

研究室は幾つかの区画とその他の部屋に分かれていた。

まず、紙束が飛び散っている研究室と人魔らしき胎児の培養室（胸糞悪い。）、人間とか魔獣の肉片がそのままの解剖室（嘔吐決定）、魔獣召喚用の魔方陣室（魔法陣の一部を吸収。）、山となった紙束室（書籍資料室らしい。開けると着火するように火種を置いていた。）。

住居区は、誰かが寝ていたが何もせずに、そおつと扉を閉めなおした。

資料保管室は、ガラスの筒に眠るアリスアインのお姉さん達がいるた。（アリスアイン気絶。）

廃棄室は、闇の奥でパキパキと骨の折れる音がしたので何も見なかったことにした。

そして、遠く深く伸びる通路。

「どうする。ここまで来たら確認して置きたいが……。」

行きたいが戻れなくなる可能性がある。

「…行きます。全部を知っておきたいです。」

気絶から回復したアリスアインが強い口調で決意した。

アリスアインがここまで決意するのは珍しい。

アララギ姉妹を見ると頷いたので方針は決まった。

「じゃあ行くか。」

俺は慎重にかつ急ぎ足で暗闇の通路に向かった。

通路は二手に分かれていた。

右手から向かい（右手の法則）しばらく歩くと扉があり、扉の反対部分は隠し扉になっていたらしく岩の保護色扉になっている。

近くに鉄格子の扉があつたので覗くと、囚人服を着た男が寝ていた。他の数ヶ所も同様だった。

ここはどうかやら牢獄らしい。

俺達は無言で隠し扉の中に戻り、隠し扉を閉めた。

「どうやら牢屋らしいな。」

「そうね。」

「じゃあ、ここは一番最後ということだ。」

「えっ、なんで最後なんですか？」

「脱出経路が嚴重。万が一にも囚人を街中に放したくない。」

と、ヒソヒソ声でマイカの疑問に答えてやり、ここから出るのは最後の手段ということまで一致させた。

元に来た道を戻っているとズーンと崩れる音が聞こえた。

二又になった場所を越え、研究室のあつた場所に近づくと通路が土砂で埋まっている。

どうやら、侵入者の俺達に対する畏か魔族に対する畏かしのれないが完全に証拠隠滅を謀つたらしい。

やはり時間を掛け過ぎたか……。

「もう一方を探索してから考えよう。」

俺は建設的な意見（思考放棄）を提案すると左側の未探索の道に戻った。

左側の道も右の道と同じく石で補強され、人の手で造られた道である。

右の道とは違い、すぐ近くに無骨な鉄製の扉が姿を現した。さて鬼が出るか蛇が出るか。

サクヤ、マイカ、アリスアインを見回すと若干疲れが見えるものの、まだまだ元気そうである。

流石に現代日本と中世異世界では身体づくりからして違うらしい。

俺は現代人のひ弱さを嘆きながら扉を開いた。

扉を開くとまたも通路になっており、左側の扉があつたので入ってみる。

中には少女達が詰め込まれ、思い思いの格好で座っていた。

その数は八人。

いずれも美少女で綺麗な服を着ていたりする子もいるのだが、汗と汚れで薄汚くなって髪がボサボサなのが勿体無く思う。

研究成果に変化を求めるためか、亜人と人間が入り混じっている。少女達は一様に手枷と首輪をしており、首輪と手枷につながれた鎖が隅にある鉄の金具に繋がれて不自由そうだ。

「君達は？」

「私達は奴隷として連れて来られたのですが、幾人かは実験に使うとかで別の場所に連れてかれたんです。」

俺が尋ねると手前にいる少女が答えてくれた。

聡そうな子で、居なくなつた子達を心配して俺達に探させるつも

りだろう。

だが、その想いも既に無駄となっている。

解剖室の肉片と廃棄室の音は連れて行かれた子であったのだろうと想像がついた。

少女は俺の顔を見て悟ったのか何も言わずに口をつぐんだ。

俺は黙ってその子の腕を取ると吸収能力を使って手枷を乱暴に引きちぎり、首輪に付いてる取っ手を掴んで慎重に首輪を切っていく。ここまで生き残って手元が狂って身体に傷を付けたら目も当てられない。

なにやら魔法が使われているようだが、吸収能力には関係ない。

せめて彼女達だけは幸せに生きて欲しい。

精神を指先に集中して何度もなぞりながら切り裂いていく。

実験動物にされた無念を思うと、やりきれない想いが募る。

何かに集中していないと余計な思考で動きを止めてしまう。

今は考える時ではない。動くとき。

動け。動け。

俺は首輪を切り裂き終わると他の少女達も同じように解放していきのであった。

少女達が集められていた部屋を出て通路を進むと民家の隠し扉に辿り着いた。

民家といっても貧民街の中にある馬車が入るほど大きな建物で、周りからは浮いている。

ここに奴隷を乗せた馬車が入るのは周知の事実であったのだろう。奴隷が二度と戻らないことに恐怖し、目を逸らせ続けたに違いない。

屋敷と言ってもいいほどに大きい家の地下室の隠し扉に出た俺達は、内部を探索して安全を確保する。

一息ついたときには夕暮れ近くになっており、これからの行動について考えなくてはならない。

意思統一するために全員を一番大きい広間に集める。

「まず、ここで選択してもらおう。」

ここはツアルテュース王国の王都であり、現在、王城は魔族に乗っ取られている。俺達はこれからアララギ公爵領に向かわなくてはならない。

ここで分かれたほうが都合が良いひとは、この屋敷から出て”さようなら”だ。

分かれたいものは屋敷を出てくれ。」

俺は静かにそして意思を込めて言うが、誰も動こうとはしなかった。

再びの違和感。

山で付与魔術もどきを使用した後よりも分かりにくい違和感を感じる。

例えば、人形のように反応が薄いつか。

普通は今のようには話しかけたら周囲の人の行動を伺うものである。アララギ姉妹は何時もどおり、アリスアインは良く分からない。

その他の人達がこちらを顔見したまま動かない。

シールドである。

そういえばこの屋敷に来るときも従順すぎやしなかったか？

俺達に不審を抱くものもおかしくない。

現に首輪を取る前まで不審そうに、こちらを眺めていたのも少ない。

首輪を取った後の礼を言われなかったのも、不審に思っていたり、言うタイミングが無かったのだと思っていたし、俺自身、罪の意識で集中するあまり聞こえて無かったとも言える。

この屋敷まで来る道中で、この人数を息を潜めさせて行動させるのはよほどの訓練を積まない限り不可能に近い。何かしら揺らぎと
いうものがあるものだ。

奇跡的な行動だったと思っていたが、そうではないとしたら。

サクヤも異変に気づいたのか不審そうに周囲の反応を伺っている。

「反応が薄いのは首輪を付けた奴隷組。」

もしかして俺は再びやってしまったのだろうか？

人形のようになってしまったのが俺の所為だとすると不味い。

今度は八人。

9Pとか勘弁。

そうではなく。

全員を養っていけない。

サクヤのヒモを頼るしか無くなる。

男の尊厳が無くなる。

ダメ男が確定する。

俺は負のスパイラルに陥りそうな思考から起死回生の一手を打ち
出すべく、マイカにお願いした。

「マイカ。この子達に付いていた首輪を一つ持ってきてくれないか
？」

マイカは快く承諾して首輪を取りに行った。

もし、俺の所為だとしたら、それは首輪に掛かっていた魔法の影
響があるのだろう。

解析用のサンプルとして持つといたほうが良いだろうと判断した。

マイカは大丈夫かな。中は何も無かったといっても狂気の研究所
への入り口だ。もし罠があったらと思うと気が気で無い。

気分は初めてのお使いを見守る母親だ。

心境はマイカを待っていたいが、そうは言っていられない現状だ。

時間が立てば立つほど、こちらの不利になる。

「アリスアイン。十二人乗せて、夜間も移動できる生物は召喚できるか？」

俺の問いにアリスアインはしばらく考えたがコクンと頷いた。
よし、足確保。

「サクヤ。アララギ領へはどのくらいかかる？」

「歩いて一週間は掛かるわよ？」

一週間は掛かりすぎだ。馬でも三、四日かかる計算になる。

「前に行った山が邪魔して、グルって周らなくてはいけないのよ。」

俺が難しい顔を見ると補足説明してくれた。

アララギ領は地図上では王都から近いものの、山の所為でUの字に迂回しなくては行けないらしい。

「山を登ればアララギ領なんだな？」

「ええ、山を越えれば反対側は修行したことのある場所だから心配ないわ。」

俺の意図に気づいてくれる。サクヤは本当にいい女だ。

サクヤとの打ち合わせが終わるとマイカが帰ってきた。

意外と早く帰ってきたマイカとあわせて行動予定を伝える。

「では、これからの予定を伝える。」

アリスアインに召喚獣を召喚してもらい全員が乗り込む。

王都の東側にある山に逃げ込み、山の反対側を目指す。

行動日時は夕日が落ちる前に行く。」

「ちょっとまって、それは急ぎすぎではない？」

サクヤが反対意見を述べる。まあ当然だろう。だが、忘れてもらっては困る。

「君の立場はなんだい。アララギ公爵のご息女？」

俺が少し意地悪に質問すると、それですぐに悟ったらしい。

頭がいいなあ。

魔族側に公爵家の令嬢がいることを知られると不味い。

公爵家が健在な場合、人質にされることになるからだ。

そしてここが貧民街であることも急ぐ理由の一つだ。

貧民の誰かが金欲しさに魔族に通報したり、生け捕りにしようと押し掛けたりする可能性がある。ましてこれから日が暮れる。夜は貧民達の味方であり、この場所は彼らのホームタウンなのだ。

マイカにも貧民街にいる危険性を説明し、気分転換にアリスアインに聞いて見た。

「そういえば何を喚び出すんだい？」

「…大ムカデです。」

理解に数分かかった。

俺とサクヤとマイカの顔が恐怖に引きつったのはいうまでもない。
こんなとき、人形同然になっている彼女らが恨めしく思う。

「ほかにないのか？」

「…無い。」

アリスアインの断言した声が無常に流れる。

計画を立てて、時間が無い以上、妥協しなければならぬ。

例え生理的に受け付けなくても死ぬよりもましではある。

俺達は覚悟を決めなくてはならなかった。

第10話 ムカデ様山へ

それは禍々しくも妖しい生き物であった。

赤い頭、深緑の背、黄色い足、どこをとっても立派なムカデ様である。

日本の伝承には龍神を苦しめた猛者がいて、戦国時代には凶柄になつたりしたそうだが、生憎の現代生まれ、忌避する感情しか湧き上がってこない。

大型バス二台ほどの大きさの大ムカデに乗った俺達は、後ろから抱き付いて支えあう形で王都を脱出した。

ムカデの背でムカデになつたわけだ。

サクヤとマイカには王都を出るまで顔を伏せておくように注意してある。万が一、顔を見られて山狩りをされると面倒だからだ。

王都の中では道行く人を恐慌に叩き落とし、縦横無尽にまかり通つたムカデ様とその一行。

王都の入り口では検問をやっていたが、ムカデ様の敵では無く。兵士達（悲鳴を上げて逃げ出した。）をなぎ倒して山に向かった。

幸い追っ手を掛けられることも無く、無事に前にキャンプした場所まで辿り着いた。

（前のゴブリンの死体があつたが、ムカデ様の餌となりました。）

アリスアインが亜空間倉庫からキャンプ用品と携帯食料を取り出し、アララギ姉妹が焚き火の小枝を拾い集めに行っている。

俺は奴隷として研究所に連れて来られ、今は人形のように呆けている彼女らを観察することにした。

まず目立つのは耳の長い少女。背丈はとか体つきはアリスアイン

と同じくらいか其れよりも華奢で、人形同然になっているのに超然として儂げな雰囲気を持つ。まるで神様がその眷属を見ているかのようだ。白に近い金髪でアーモンド形の目だが、一番の特徴は尖った耳で15cmぐらいの長さのいわゆるエルフ耳で、へによんと垂れているさまは愛らしいの一言に尽きる。

次に耳が長いのは緑の髪の少女で耳の長さが10cmぐらいだ。人形のようになっているはずなのにツリ目できつい感じがする。

同じ緑の髪で耳が尖っている程度で、タレ目の少女がそばにいる。同じ血筋なのか先程の少女に何処と無く似ている感じがする。

耳と言えば猫耳、猫尻尾の少女だ。栗毛の彼女は残念ながら肉球グローブを付けていないが、現代日本が誇る猫耳少女を具現化した存在だ。

あとは、人間として余分なパーツが無い(亜人間じゃないと思われる。)少女達で、俺が首輪を切った部屋で、最初に言葉を掛けた青紫の髪の少女。

赤毛で筋肉質の身体を持つ少女。立ち方に軍人のような雰囲気を持つ。

綺麗な白銀の髪で、着ている物も高貴そうな少女。
くすんだ灰褐色髪の栄養失調でガリガリの少女。

少女達は似たような年齢だが、三人のエルフ耳をもつ少女達を除くと、青紫の髪の少女と赤毛の少女が一番上で、栄養失調の少女が一番下に見える。

髪の長さが今まで見てきた女性全員、髪を下ろすと腰まであるような長い髪なのは、この世界の慣習なのか？これは後で聞いとう。

美少女達を観賞して目の保養になったが、思いついたこともあった。
人形のような状態を見ていて漫画で催眠術を使ったものがあつた。

が、その状態に良く似ていることを思い出したのだ。

もしかしたら催眠術の要領で彼女達の意識を取り戻せるかもしれない。

メリットは護衛の数が増えること。八人を護衛するのに俺、サクヤ、マイカ、アリスアインの四人では少ない。戦える人が増えると楽だ。

デメリットは失敗したら恥ずかしいし、裏切られる可能性があること。

……やはりこれはやって見る価値はあるか。

人形状態であるなら催眠導入なし。指示どおりに動くから言葉だけで良いけど心の奥底から引つ張り出す感じにしなくてはいけない。俺は注目を浴びるように話しかけて精神を表に出すように語り掛けた。

「みんな聞くように。」

君達は今、人形のような状態になっている。

俺の言葉に疑問を抱かず、言いなりに人形のように機械的に動いている。

俺はそんな状態は好きでは無い。

自分で考え、行動するほうが好きだ。

だから、これから君達の心の置く底に眠ってしまっている本当の感情を喚び出そうと思う。

君達は人形のような状態にあるが、決して人形ではない。

これから俺が手を叩くと、ありのままの自分をさらけ出し、普段どおりの感情を取り戻す。

思い出すんだ。君達は何を考え、どうやって生きてきたのかを。

泣き、笑い、怒り、楽しんだ日々を。

昔の自分を否定するような人形の仮面など吹き飛ばしてやれ。

そして自分で考え、自分で行動するんだ。

いいかい。

さん。

に。

いち。
「

パン。と拍手を打つと人形のような彼女達の表情に生気が戻ったようになる。

やがて、ざわざわと隣の人を見たり、喋ったりしている。

どうやら成功したようだ。

……後遺症。無いと良いなあ。

焚き火の前で思い思いに座っている。

少女達の中に一人オッサンがいると学生を引率している教師になった気分だ。

年齢的にもパーティーリーダーとしての立場も似たようなものだし、年齢に対してちょっと考え深げになってしまう。

サクヤとマイカが焚き火の小枝を拾っているときに、狼の群れに襲われたそうだが、無事に帰ってきた。マイカの話しに寄ると三十分ぐらいのごく普通の群れらしいが、簡単に振り返り討ちしてくる君達に、俺は何時になったら足手まといにならずに済むのだろうか？

アリスアインの出した荷物に残っていた保存用食料は、今日と明日の昼までの分はあったが、明日の晩から足りない。四人から十二人に増えたし、買い足しもせずつに宿屋を出たから、今日の分が足りただけでもラッキーと思わなくてはならないだろう。

明日からは狩りも視野に入れて、水も考えなくてはならない。

マイカとアリスアインは、俺に肩を預けて船を漕ぎ出している。今日の朝は早かったからな。

さて、気分もまったりしてきた事だし、眠くなる前に気を引き締めて次の作業に移らなくては。

「みんな注目してくれえ」

パンパンと手を叩いて注目を集めることに成功する。マイカとアリスアインには悪いが一度起きてもらった。

一発で話し声も無くなるのは凄く気分がいい。現代日本の馬鹿学生どもでは絶対に真似できない行動だ。(自分も馬鹿学生の一入だったことは棚に上げておく。)

「この中で戦いの経験がある人、もしくは戦い方が分かる人。手を上げてくれ。」

サクヤ、マイカ、アリスアイン以外から六人が手を上げた。意外と戦える人数が多い。

「槍が扱える人。」

赤毛の少女が手を上げた。
やはり軍隊経験者なのだろうか？

他にはいないみたいだし、彼女にがんばってもらおう。

「はい、みんなを守ってね。」

俺は自分の持っていた槍を差し出すとサクヤに指示を出した。

「サクヤ。山の中での野宿経験がある人たちと明日の登山ルートの作成と不審番のローテーション組んで。俺はこれから武器を造るからローテの一番最初にしといて。」

「わかったわ。」

適材適所。

というより仕事を割り振らなきゃ疲れ切ってしまう。それに時間も惜しい。

俺は火のついた棒を持って、大きな岩に向かうと材質を確認した。暗くて解りにくいのが、河原にあるような材質で、目が詰まっていたツルツルな質感がする。

近くの石を持って岩に叩き付けて見る。

割れる様子も無いことから、ある程度粘り気もあるのだろう。一応、満足をしておく。

この山を越えるくらい持てばいい物に、これ以上を望んでもしょうがない。

作品のイメージを創る。

女性にも扱えるもの。

ナイフ、槍、ショートソード、細剣

石の強度に耐えられるもの。三日間持てば良し。

ナイフ、ショートソード

肉厚、刃は鋭角30度から90度

「そついえば石の圧縮って出来るのだろうか？」

俺は手に持った石を力で圧縮するイメージを与える。

石は思いど通りに小石になる。

が、圧縮された所為で熱が籠って熱い！

俺は慌てて小石を捨てると、圧縮できることを踏まえて、普通の剣の三倍ほどの大きさの剣を普通の大きさの剣にまで圧縮して作って見ることにした。

まず、吸収の能力で大まかに切り出し、形を整える。

普通の大きさにまで圧縮して熱が逃げるまで待つ。

全工程が終わってから愕然とした。

重すぎる。

ロングソードなみの大きさの剣は普通より三倍の重さである。

女性には絶対に持てない。

勇者補正の俺でさえ剣に振られてしまう。

このまま、この剣を使い続けるのであれば、剣に振られないように筋肉と体重移動を覚えるのだが、たかが即興で作った石の剣にそこまで思い入れは無い。

残念だが捨てるしかなかった。

気が付いたら、剣一本のために、かなりの時間を費やしてしまっていた。

時間が無いのに泣きたい気分だ。

とりあえず気分転換。

腐った気分で何かを作っても良い物は出来ない。

深呼吸して身体を解すと焚き火のあるところに向かった。

「あれ？まだ起きていたのか？」

ローテーションの一番最初のサクヤが、まだ起きていた。もう二番目のはずだ。

炎を見つめていた姿は未来に対する不安に怯えているようだ。

俺の言葉に笑ってくれたが何処となく硬い。

サクヤは何も言わずに白湯を入れてくれた。

「ん、ありがとう。」

悩み事があるかも知れないけど、今は忘れて家についてからにしないさ。

ここで出来ることは体力を回復させて山を越えること。

明日は俺の変わりに頑張って貰うんだから寝ておきなさい。」

女心も分らず、説教を言ってしまった。

まだ不安そうにしていたので、サクヤを抱き寄せて、大丈夫だよと囁いてから離れた。

前の世界にいたときは死んでも出来なかったことなんだけどなあ。

この世界に来てから変わったのか。

女性と経験したから変わったのか。

武器作りの作業に戻った俺は、大急ぎで人数分の鉋に近い剣を作ることにする。

作り方は簡単。

まず、適度な大きさに切り出した石材を用意します。

刃先を三角形に圧縮し、握り手の部分を吸収で削りだします。このとき両手でも持てるようにしましょう。

最後に軽量化のために背の部分を削って出来上がりです。

仕上げは各自持ったときの重さによって吸収で先端を削るだけ。

刀身が歪んでようが、バランスが悪かろうがあるだけましという

もの。

六本作り上げたときは、既に東の空が明るくなり始めていた。
俺は不審番している人に剣を預けると朝ご飯まで寝かせて貰う事
にした。貰う事にした。

第11話 温泉郷

結論から言うと武器を作っても意味は無かった。

サクヤが設定した登山方法はムカデ様を再度使用したものの、ムカデ様の前には脆い崖や滑りやすい足場など意味が無い。あつという間にアララギ領側の山間の村まで着いてしまった。逆に武器が邪魔になってしまったくらいだ。

折角作つたのに……

しかし、よくムカデ様を二度も乗る気になつたものだ。女性だつたら普通、忌避するものであるが、それだけ自分の領地が心配だつたのだろうか？

みんなの指揮をして、従わないものには縛つてでも無理やり乗っける。

最初の時に人形のようになっていて恐怖を感じなかつたのに腹を立てていたのか、容赦が無い。鬼である。

時々女性が強いと思わされることがあるが、この怖い情景を見せられると女性不信になりそうだ。

結婚したら絶対、尻に敷かれそう。

山間のあちこちに白い煙が立ち上り、家がポツポツと建っている。白い煙は家とは違う場所から出て、焚き火では無さそうなので温泉なのだろう。

この村はサクヤの御祖父さんが湯治のために造つた村で、晩年はこの村で過ごした場所らしい。

アララギ公爵の直轄地として、それなりに警備体制も万全で、今でも毎年の修行帰りに寄つてるそうだ。

また、この村は御祖父さんを偲ばせる地として、公爵家の親衛隊を育てる地として御祖父さんと共に戦った仲間達が守っている。

当然、老人ばかりの村になってしまっているが……

まあ、かつての勇者が入った温泉地として売り出せば人も来るんだろつが、公爵家専用の隠し湯にそんなものを求めてはいけない。現状維持が一番好ましいのだろう。

日が傾きかけた頃に村に辿り着いた俺達は、その足で村長の元に行き、王城が落城したこと、脱出するときの王都の様子、これからのことに付いてを話し合った。（もちろん研究所のことは伏せておく。）

まだ情報が少ないということでサクヤとマイカはこの村で匿い、アララギ公爵の屋敷には二人がこの村に居ることを伝えるが、このことは秘密にすることを約束させる。

アララギ領がどうなっているか知りたいが、ここから屋敷まで三日かかるこのことなので少なくとも一週間は情報待ちになるだろう。兎にも角にもアララギ家の公爵令嬢が村に来たんだから歓迎しなくてはいかん。ということで、村長は大張り切りで村上げての歓迎の準備を始めた。

人数が多いことは、「枯れた村に華がいっぱい咲いて楽しくなるわい。」とのこと。

俺達は夜からの祭りが始まる間に公爵家の別荘で旅の汗を流し、一息つくことになった。

別荘の風呂は露天風呂で、残念（幸運）ながら一つしかなく男女で分かれていない。

「お義兄様。一緒に入りましょ？」

マイカが風呂に誘ってきた。可愛い女の子に、こんなこと言われ

るなんて嬉しくて狂喜乱舞したい。

が、非つじょおに残念であるが、周囲の目も気にしてくれ。ほら、エルフの少女に汚物を見るような目で見られてるんだけど！

「いや、時間が勿体無いからサツサと入って来なさい。」

「時間の節約になるし、いいじゃない。」

俺のスルーにサクヤが追尾を掛けて、アリスアインが俺の袖をつまんで上目遣いに懇願してくる。

三対一で追い詰めるなど卑怯な！

俺のチキンハートは周囲から来る絶対零度の視線に耐えられんだ！

「やることあるから後で入るよ。」

「エーッ。じゃあ、お義兄様が先に入ってください。」

うっ。そうきたか。

ならば雰囲気から逃げるために先に入らせてもらうか。

俺は烏の行水並みの素早さで身体を洗う。

何もこの時点でゆっくり入る必要は無いのだ。後から幾らでも入れるのだから。

風呂から出て着替えているタイミングで、サクヤ達が脱衣所に入ってきた。

予想どおり彼女達は風呂に乱入するつもりだったらしい。

ふっ。勝った。

くつろぎの間に一人取り残された俺は、空しい勝利の余韻に浸りながら、彼女らが湯浴みを終えるまでに此れからのことについて考える。

いきなり十二人も押し掛けて、村に食料はあるのか？

村の防備体制は大丈夫なのか？

情報を待つまで俺の修行するとして、連れて来た娘たちの身を守る術も覚えさせた方が良いのか？

奴隷になっていた少女達に思考が至ったところで、彼女達の名前を聞いていなかったことを思い出した。

「ということで、今更ながら自己紹介をします。」

俺の一言に、本当に今更と、白けた空気が流れたが、スルーした。俺のスルースキルは意外と高い。ワザとスルーして空気の読めない男と言われるくらいだ。この程度の雰囲気には怯む俺では無い。

「俺の名前はスズキ・マサキ。こちらではマサキ・スズキになるのかな。」

実験動物として召喚されてきた。以上！」

「私はサクヤ・スワミニ・アララギです。マサキの妻よ。」

えっ、ちよっ、おm

「はあい。マイカ・スワミニ・アララギです。お義兄様の愛人です。」

「…アリスアインです。マサキ様の奴隷です。」

サクヤの言葉を訂正しようとしたら、立て続けに言われてしまった。なにこの意気の合ったコンビネーション。

過ぎた時間は戻らず、常識人からの冷たい視線だけが突き刺さる。

俺って遊ばれやすいのかなあ……

「……次は其方から順番に自己紹介して。」

俺は泣く泣く司会進行を努めた。

「私の名はルーカサス・メディアン。マルア聖王国の元騎士です。」

緩んだ気を取り直して、俺が槍を貸した赤毛の少女が始めに名乗った。

名乗り方が固いのは性格か騎士としての訓練の所為か。

青紫の髪の子が丁寧に頭を下げる。

「リリディアです。よろしくお願ひします。」

「イグジナート帝国第二皇女、エリエンス・アドベ・イグジナートです。侯爵に裏切られてスンジリ商国に売られ、ツアルテュース王国に買われてしまいました。」

白銀髪の少女がサラツと国際問題になりそうなことを言っていたがスルーしとこう。

次、猫耳少女。

「ミニシアだにゃ。」

「わらわは、ノルシユル・キリシユー・ジ・ミサラス・アルスナード。白鬼はくき、この時代で言う邪神じゃな。その危険性を伝えるために旅の案内を頼んだのじゃが、騙だまされてしもうた。」

白金髪のエルフ耳の少女もスルーだ。なにやら俺をにらんでいるが、スルーを強行する。

「ミシャーラよ。見ての通りエルフよ。」

「あつあの、エシャーラです。ミシャーラの妹でハーフエルフです。」

緑髪のエルフ耳の少女が突っ慥はげ貪おぼに答え、隣の尖り耳の少女が慌てて答えた。

ちなみに姉はサクヤ、マイカ、アリスアインと仲良くしている俺をみると汚物を見るような視線をくれます。

「……ギ……リリア……」

最後にやせ細った少女がか細く答える。

「自己紹介が終わったね。」

じゃあ今後の予定だけど。この集団から出るのは掛けられていた首輪の魔法を解析するまで待つて欲しい。

一応大丈夫だと思っけど万が一という可能性がある。

それと、手紙は書いても構わない。だけど、この場所のことは書かないで欲しい。

あと、出すときに見せてもらうけど了承して欲しい。」

隣にいるサクヤに首輪の解析と手紙の用意をお願いする。

マイカとサクヤを呼び寄せて、王都の地下に迷い込んだら偶然彼女達がいた。と、口裏を合わせをしておくのを忘れない。

自己紹介の前に考えついたことを思い出した。

「あっそうだ。皆のこれからの予定を考えなくちゃいけないな。」

「予定ですか？」

赤毛の元騎士が生真面目に問い直してくる。

「そう。」

この国の王城が落ちただろう？だから情勢を見て、最低でも一週間、最高で一年以上この村で暮らすことになるだろうね。

此れからの生活の指針として自分の出来ること、自分が目指すものの目標を決めて置いた方がいい。

とりあえず俺のやることは戦い方を学ぶこと。魔法を習うこと。二点で、サクヤとマイカ、アリスアインに手伝って貰う。

君達もこれを機会に誰かから学ぶのも良いかもしれない。」

本当は自分から動くのやだけど、奴隷を解放したことで闇の方々に狙われる可能性だってあるし、戦争に巻き込まれる可能性だってある。ある程度自分の身を守る手段を持ってないと怖くてしょうがない。

希望としてはここの温泉でヌクヌクと一生を過ごしたいのだが、そうは問屋が卸さないのが人生というもの。覚悟のいらぬ人生の選択肢はいっぱいあったほうが良い。

話が途切れたところでこの村に住むオバサンが、歓迎の用意が出来たことを告げるために顔を出した。

「ご夕食の用意が出来ました。」

「じゃあ、明日までに各自考えとくことで宿題にしよう。」

出来るだけ希望に沿ったことが出来るように交渉するけど、明日から働くことに追われる毎日になるかもしれないからな。」

働かざるもの食うべからずという大嫌いな諺があるくらいだし。

第12話 修行1

修行を始めてからの俺の一日は長い。

早朝、体力づくりのためのジョギング。

朝食後、アリスアインとサクヤの魔術、魔法講座。

昼食後、サクヤとマイカによる剣術講座。

夕食後、自主トレーニング。

以上が、この村にいる時のスケジュールで、元の世界の生活に比べると恐ろしく健康的だ。

日の出と共に柔軟体操をして、身体の凝りを解す。三十五歳の身体は程よく固まっている、ストレッチをする度に身体が悲鳴を上げる。身体が十分に温まったら、体力作りの為の全力疾走^{ジョギング}。持久力を付けておかないと女性よりも先に根を上げかねない。

この世界の人間は元の世界の人間よりも体力があるから、男の尊厳を保つために重要だ。

決してエッチのためだけじゃない。

コースは峰から峰に走る特務隊を育成するためのルートで、簡単なアスレチックコースになっている。彼らは完全武装の全力疾走でここを走るのだそうだ。

元の世界の俺だったら絶対に半分も行かずに死んでるのだが、流石、勇者補正。楽々とクリアしていく。……そのうち完全武装で走るかもしれない。

何周かすると味気無くなるジョギングも、一緒にやる人がいれば彩^{いろどり}が鮮やかになる。

この村に来た時に自分で組んでもらった予定で一緒に修行をやる人が出てきた。

修行仲間は青紫髪のリリディアと痩せ細ったギリリアの二人で、理由を問いかけたところ。

「私の村は山賊に襲われてしまって、そのとき両親と幼い弟を亡くしてしまっただんです。」

あのと私に少しでも力があれば弟を守れたのかなと思ひまして……」

「……力…欲しい……」

二人ともそれぞれの理由があつて力を欲しているのだろう。

俺には二人の過去を共有することは出来ないし、平和ボケした異世界人がこの世界のことを分かったように慰めるのは失礼になる。というか、そんな甲斐性は無い。

俺が出来るのは精々、二人が道を誤まる時に諭して上げるくらいだろう。

魔法講座は意外と繁盛している。

ジョギングで一緒の二人に三人を足して、計六人の生徒が授業を受ける。

増えるのはエルフ長耳ノルシュル、元騎士ルーカサス、猫耳ミアアで理由を聞くと、

「わらわはこの時代の魔法に興味があつての。」

「自分に足りないものを補助するため、対抗するために必要を感じました。」

「タダで魔法が習えるからにや。」

三者三様の答えが返ってきた。
どうやら、魔法を教える場所が少なく、簡単に教えてくれないらしい。

まあ、一般人に魔法を教えることの危険性とか、専門家のための既得権益の保護だとか色々あるのだろう。

魔術、魔法の講師はサクヤとアリスアインによって行われる。最初はアリスアインだけであったのだが、教える人が多くなったのでサクヤが助っ人で教えることになった。

まず、村に有った反応石で全員の魔力と属性を見る。
俺には反応石を壊してしまうため触らせてくれなかった。反応石はそれなりに高価なものらしい。

次に魔術と魔法の違いについての説明。

「魔術は想像することで使えるけど、魔力量によって力の大小が違うし、その人の属性で使える魔術が決まってしまうわ。」

魔法は属性で変化してしまった魔力を純粋な魔力に変えて、精神の手で魔力を操りながら魔法回路を作り上げるの。」

「…魔術の方が想像で出来るから便利に思われがちですが、同じ魔術を使い続けると体内に魔法回路が生成されてしまい、魔法を使おうとしても純粋魔力が体内の魔法回路に流れて、体内魔法回路の魔術しか使用できなくなります。」

一度、体内魔法回路が作られてしまうと、長い時間、魔術を使わない生活をしない限り、二度と魔法を使用することは出来ません。」

「どの位の期間使用できなくなるんだ？」

「…個人差、魔術の使用頻度に差がありますが、一年以上は使用できません。」

一年間のペナルティーは中々に厳しい。

それでも戦士系の人が無意識に使っていて一生使えない状態になっていたたり、戦争で生き残るために使用して魔法が使えなくなったりするそうだ。

後者はともかく前者は子供の頃からの教育の知識不足であろう。発動時間短縮の為に、ワザと魔術しか使えないようにしている場合もあるから、なんとも言えないが。

当然ながら魔術を使用できなければ魔法を使うことは難しい。そこで魔術を習ってから魔法を習うことになる。

それぞれの属性が分かっているから想像はしやすい。

魔力が一番多いのはノルシュル、属性は星。次にギリリア、属性は闇。リリディアは雷と氷。ルーカサスは風。ミアは木。俺は不明。

全員魔力量は多い。多分実験に使用する犠牲者モルモットは魔力が多い方が良いのだろう。

後で聞いた話によると美少女が多い理由は、美少女だとやる気テンションが上がる、研究者らしき人間が言葉を漏らしていたそうだ。

次に魔術の練習だが、全然出来ないのが俺とノルシュル、逆にギリリアは直ぐに出来て、リリディアも何回かするとコツを覚えたようだ。ルーカスとミアはしばらくウンウン唸っていたが暫らくすると使えるようになっていた。

魔術が使えない俺達をほっといて、横で魔法訓練を始めていたわけだが、その様子を横目で見ていたノルシュルが突然魔法を使った。

彼女の話しによると魔術は新しき理で、魔法は古き理なのだそう
だ。そして古き理だと俺にも魔法が使えるかもしれない。断定でき
ないのは、俺が特殊すぎるためだ。

今までの勇者達は個人差が有るものの問題なく魔法を使っていた
らしい。

俺の問題が邪神によるものだといいことで、其れを良く知るノル
シュルが教えることになった。

サクヤとアリスアインが文句を言いたそうだが、こればかりは
経験と知識が無いと仕方が無い。

早速、ノルシュル講師のもと魔法講座をマンツーマンで行うこと
になった。

「最初にわらわの出生を簡単に説明しておこうかの。
わらわは古代エルフ族の生き残りで、星読みの巫女をしておった。
だからある程度魔法に付いての造詣もある。

お主に教えるのは古き理の魔法。
古き理では、魔法で使用する精神の手は白鬼で、邪神も白鬼であ
る。すなわち、魔法は白鬼を利用して赤獣にある黒羅を黄呪にした
ものである。

だが、魔術は新しき理のもの。赤獣から直接、黄呪に至る。つま
り人から現象を起こすものである。」

「白鬼？赤獣？黒羅？黄呪？」

「白鬼とは、神、存在の塊と呼ばれるもの。

赤獣とは、動物、植物など肉体あるもの。

黒羅とは、魔力と呼ばれる奇跡のもと。

黄呪とは、法則によって形付けられたもの。

蒼霊とは、精霊と呼ばれる形無き意思。
古き理は白鬼、赤獣、黒羅、黄呪、蒼霊、白鬼と循環しておった。
だが、世界神と名乗るものによって白鬼、黒羅、蒼霊、赤獣、黄呪、白鬼の新しき理へと変わってしもうた。
魔術はそのときに出来た新しき黄呪。」

後半が分からないことだが、とりあえず邪神は白鬼で存在の塊と覚えておこう。

なんか世界神とか出てきたけど今は関係ないのでスルー。

それにしてもこのひと、古き理とか新しき理とか言うけど、相当な年齢なのだろうか？

「そういえば、お主、この前、山で石を圧していたな。ちょっとやっつて見せる。」

ジロツと睨まれて、心を読まれたかと思った。

慌てて思い出す。山で剣を作った時の圧縮加工だろうか？

手ごろな石を拾って圧縮する。

「其れが白鬼だ。」

普通は精神の手で石を握りつぶすことは出来ないが、邪神ならできると。

それは白鬼の密度の違いによるもので、普通なら考えられないほどの密度があるから邪神といわれる。

……新しき理だと魔族となるがな。」

ちよつ、いま、サラツと重要なことを言われなかったか？

「心配するな。お主も私も古き理の白鬼、邪神である。……受肉したな。」

お主など奴らが万倍の力を持ってしても、決して敵うこと無い力を持っておるわ。」

スルーしたいことだらけなのですが、とりあえずノルシユルの力はどれぐらいで？

「わらわは、お主と違う方法で邪神となつたし、出来そこないだからな。精々が魔族の十倍といったところよ。」

フンツと不満そうなノルシユルさん。普通の邪神は百倍だと説明してくれた。

スルーだらけで恐縮ですが、とりあえず俺は受肉した邪神で魔族とは違うと覚えておこう。

うん、研究所を潰しといて良かった。俺みたいな奴がゾロゾロ出てきたら目も当てられない。

あれ？邪神は存在力の塊だよな、魔族の万倍以上なら周囲に影響与えまくりじゃないのか？

「力が凄いあることは分かったけど、周囲への影響ってどうなってるんだ？」

「うむ。お主の力は別空間からお主の肉体を門として現出しているように見てとれた。

おそらくは亜空間内に力を溜めて必要な分だけ取り出しておるのじゃろつ。

規格外すぎるから、こちらの常識が当てはまらん。」

ついでに吸収について聞いて見たら、そんな力知らん。と、素っ気無く言われた。

力が小出し出来るになっっているのは、肉体が耐えられないための

防衛本能か、召喚時の扉がまだ小さく残っていて力が出きっていないのか、考えても現状では答えが出そうに無い。

吸収については深く考えるか、悩むのをやめるか考えどころだ。

「……だから、わらわは邪神の危険性を訴えるために穏やかな住処を出て旅を決意したと言うのに下界の連中と来たら……」

いかん、考え事をしていたらノルシユル様が愚痴り始めた。何とかして話題を変えないと……。

「あのお魔法の使い方なんです……」

「あん？おお、魔法の講義であつたな。とりあえず白鬼はくきの力だけで魔法回路を描け。

それで事足りる。」

俺の下手の卑屈さが功を奏したのか。とりあえずの軌道修正がなされた。

でも、純粹魔力はどうしたんですか？

「お主の場合は白鬼はくきと黒羅くろらが混じり合つた状態。つまり、魔力と重ねあつている様に見える。出来るだけ薄く描けば良いだろう。」

えーと。発火魔法だから火をイメージして。

簡単な魔法回路を教えてもらつて精神の手で描こうとすると、頭を思いっきり打たれた。

「愚か者！薄く描けと申したろうが！この地を消し炭にするつもりか！」

ちよつと忘れていただけじゃないか。

俺がブチブチ言いながらも精神の手で魔法回路を描こうとするが、そのたびに打たれた。

ノルシュル曰く、もっと薄く描け、もっと薄く描け、だそうだ。

涙目になりながらも、これ以上ないぐらい薄く描くとやっとな魔法を発動できた。

猛火

家一軒分の炎が立ち上がる。

ノルシュルが直ぐに氷結の魔法で炎を消し去る。

「よいか？お主は気がついておらんが莫大な力を秘めておる。

決して白鬼はくきに力を込めようと思うな？

力を込めて魔法回路を描けば、発火魔法であろうとも、この山を滅し、背後の王都は灰燼と化し、大陸全土が焦土化するであろうよ。

お主の目標はその小石はくきぐらいの大きさになるまで白鬼を薄くすることだな。」

ノルシュルが指したのは拳大の石。

これ以上の薄さにしろと……

こうして卵を薄皮（ゆで卵の時に殻の内側にある皮）に爪を立てて持ち運ぶような魔法の修行が始まった。

第13話 修行2

午前の魔法講座が終わり、午後の剣術修行が始まる。

剣術修行は比較的まともなものであった。

竹刀を使用した稽古と技の伝授、真剣での技の素振り千本が日課になる。

村の剣術指南役に手伝って貰ったが、剣の才能は一般兵士並み。

と言われて、少し凹んで体力アップに方向を傾けたりした。(リリディアとギリリアは鍛えれば騎士に成れると言われたから余計に。)

俺とリリディア、ギリリアが修行をしている間。

お姫様のエリエンスは物珍しそうに畑仕事を手伝っていたし、エルフの姉妹も村の手伝いをしていた。

他の皆も魔法講座が終わったら村の手伝いに行っている。

村長は手伝わなくても良いと言ってくれるが、手伝ったほうが気がまぎれることもある。

第一、権力のあるひと以外は恐縮してしまつて、ご飯が喉に通らないだろう。

正直、手伝っているところを見てホツとした。誰か一人ぐらい手伝わらない人がいると思っていたから。(猫耳ミニアがサボっていることもあったが)

気になったのはエルフの姉、ミシャーラがこちらをチラチラと覗き込んでいた位だろうか？視線が合うと直ぐにどこかに行ってしまう。その後を妹のハーフエルフのエシャーラが慌てて追いかけていくのが印象に残った。

修行を一緒にやりたいのであるのか？一緒にやりたくてもプライドが邪魔して言い出せなかったりして。

夜は自分の吸収能力についての考察を深めようと努力はしている。だが、考えても解らず、勇者の一人に一つだけの能力ではないかと推測を立てるくらいだ。

其れよりも困ったことは、日中の修行で疲れ果て、気絶するようになり眠ってしまったているのだが、サクヤ、マイカ、アリスアインの三人が夜這いに来ても気づかないことだ。

朝起きたら柔らかい肉布団と女の匂いでどこの天国かと思う。

一度この事でミシャールに不潔と言われたが、俺が気づかず勿体無い事をしていることを力説すると、思いっきり引かれてしまった。このとき俺は血の涙を流していたのだと思う。

毎日、筋肉痛で苦しむ日課の中で、温泉は格別の一時ひとときである。だが、そんな至福を打ち壊す事態が起きた。

なんと、脱衣所の扉の前に入浴札がついて男子禁制になってしまったのだ。

これでは好きなときに入れず、温泉の魅力が半減されてしまう。サクヤとマイカ、アリスアインが風呂に乱入したり、ノルシユルとエリエンスが乱入されても気にしないで堂々としていたとしても、その他の少女達は普通の女の子。

結局、六人の女性に訴えられた俺は、民主主義数の暴力に勝てるはずも無く、全面敗訴に回って、負け犬として部屋の隅で簀巻きにされて、女性陣が全員出るまで待つしかなかった。

そりゃ、お風呂の中でバッテリー会う、お楽しみイベントを連発させた俺が悪いが、この仕打ちは無いと思う。

数日後、首輪に関して重大な事が解かったので広間に皆を集める。

「これから検証を確認してから説明したいと思う。」

「ミシャーラ手伝ってくれないか？」

「何で私が手伝わないとはいけないのよ。」

「俺の言うことを一番聞きそつに無いから。」

「当たり前じゃない。」

「ミシャーラ。猫になれ。」

「ミャーオ。」

俺が突然命令を下した瞬間に愛らしく鳴く猫が誕生した。
四つん這いになり一声鳴いたかと思えば、仰向けになって大股開きで毛づくろいするその姿は、まさに猫そのものである。

「お、お姉ちゃん？」

エシャーラが驚いた声を上げる。他の皆も何が起こったのか理解不能の顔をしている。

このまま見ていたいが、何か言われる前に次の命令を下す。
流星に一回命令しただけじゃ二人で仕組んでいると思われるだろう。

「立って元に戻れ。」

ミシャーラは俺の声に反応して立ち上がり、周囲の雰囲気驚いてキョロキョロしている。

「ミシャーラ。服を脱げ。」

今度はストリップを命じる。

戸惑い無く服を脱ぐその姿に、周りにいる皆は声も出ない状況だ。

「ストップ。」

最後の一枚を脱ごうとしている所を止めた。パンツに手を掛けて止まっている姿は、彼女だけ時間が停止したようだ。

危なかった。これ以上脱がすと変態扱いされてしまう。

「元にもどれ。」

俺の言葉にミシャーラは下着に手を掛けるのをやめて、周囲の反応にまたキョロキョロしだす。自分が半裸になっていることに気がついていない。と言うよりも、半裸であることが当たり前で周囲の反応に戸惑っているのが正解か。

「ミシャーラ。俺の言うことを聞けないはずだよな？」

「当たり前じゃない。」

打てば響くという言葉どおり、明確に返答が返ってくる。

「なんで服を脱いでいるんだい。」

「あなたが命令したからじゃない。」

何を当たり前のことを。と、まっ平らの胸を張る。

俺が命令して其れを実行したことに疑問を持っていない。矛盾に気がつかない。

精神操作としては最高でも、本人にしては最悪である。

「ミシヤーラ。服を着ていいぞ。」

服を着終えるまで深呼吸して心を落ち着ける。

こうなった原因が俺である以上、俺が説明しなくてはいけない。

公爵直轄の隠れ里であるこの村にも魔導師と呼ばれる人がいる。

俺はサクヤの薦めで、元宮廷魔導師長である爺さんに首輪の鑑定を行ってもらうことにした。

鑑定結果は、禁忌指定された魔法具『隷従の首輪』。

『隷従の首輪』の効果は、首輪の鍵に魔法が使われている。そして、首輪にある主の握り手と呼ばれる場所を握った人間の言うことを聞くという物。

本来、主の握り手は精神を破壊しかねないので、鎖につなが末端を持つことで効果を弱めるらしい。首輪を架せられた少女達全員の魔力が高かったため、魔力抵抗により廃人にならずに済んだのだらう。

鍵を使用せず、主の握り手（首輪を壊したときに持った部品）を持ちながら首輪を壊したため、装着者の主として永続の命令服従を強いられることになる。

また、おかしな魔力（俺の精神の手と交じり合った魔力）の影響で、魔力の持ち主に惹かれ、魔力の持ち主の命令を受けないと精神が衰弱する可能性がある。

そして、解呪方法は無い。

俺が吸収能力を使用して首輪を壊したのは、扉を閉めて鍵を掛け

た状態で取っ手を壊したようなもので、扉を壊せば精神を破壊することに等しく、解決方法にならない。

せめて、おかしな魔力さえ無ければ何とかなかったかもしれないが、おかしな魔力が邪魔して解呪は出来ないと断言されてしまった。

唯一の方法は、俺がおかしな魔力の持ち主魔法を覚えて解呪を試みるしかなく、それでも成功する可能性はかなり低い。

以上が、途中から被験者のギリリアを診断して得られた結論である。

御通夜のような、どよんとした雰囲気の中、無慈悲な言葉を放つ。

「俺が死ねば命令される危険は無いけど、精神が衰弱して死ぬことになる。」

そして、先程の検証結果から、本人は命令されたことに気づけず、そのことを当然のこととして受け止めている。

知らなかったほうが本人の幸せだっただろう。

だけど、俺は真実を話すことにした。

それは、命令してもされなくても、自分自身であるという自覚を
して貰いたかったからだ。

真実を話しても、自覚しても、結果は変わらないかもしれない。

今話したのは罪の重さに耐え切れないからだ。

俺の我侭でこのことを話した。

俺がこれからできることは、解呪の研究をすることと、君達を人間として扱うことだけだ。この二つは約束する。

知らなかったこととはいえ、こんなことになってしまい。許して欲しい。」

俺は深々と頭を下げる。

罵倒されるかと思っただが、誰も、何も言わなかった。

沈黙が重い。

気持ちの整理が付いていないのであろう。口を開いては何かを思
い出して口を閉じる。

「今日はもう遅い。自室に戻って気持ちの整理が付いてから俺に会
いに来てくれ。」

俺は空気の重さに耐え切れなくなって彼女達を追い出した。

話したことに後悔は、しない。

決意は誓いになる。

「正樹様。どんなことになるうとも付いて行きます。」

サクヤが俺の目を見つめる。マイカ、アリスアインも擦り寄って
くる。

俺を慰めてくれるのだろう。

彼女達の責任もとらなくてはいけない。

やることは沢山で、怠け者の生活を出来ないかもしれない。

でも、進むしかない。

第14話 修行3

気分が乗ろうが乗らなかつても修行はやらなくてはならない。素っ気無くされて避けられようが俺の罪だから仕方ないのだ。彼女等に伝えないほうが良かったのか？

答えは否であり、イエスである。

いつかは知ってしまうはずで、そのときに溜め込んだ感情を周囲にぶつける可能性がある。誰しも自分の人生が偽者かもしれないと知った時は平静ではいられない。

だが、彼女達の幸せを考えると、知らないほうが良いものであったことも確かである。

最悪、今回のことで自殺する人も出てくる可能性も少なからずあるのだ。

俺には女心が分からない。だからエゴを貫き通すだけだ。

早朝の運動が終わった後、リリディアに連れ出された。

「あなたは何故、首輪のことを私達に隠さず話したのですか？

何も話さずに私達を人形として扱おうと思わなかったのですか？」

「君は動物を養殖するときに、どうすれば効率的に育てられるか知っているか？

畜舎を造り、一生その場で餌を与え続けるんだ。

彼等は日の光を浴びずに出荷される。

ただ物として一生涯を終える。

俺のいた世界は皆、同じように勉強して、同じように仕事して、同じように結婚して生涯を終える。そりゃみんなと違う人生を送る人は居たさ。でも大半は似た人生を送っている。

だから、俺はその人の個性を大事にしたい。

例え道の決まった人生を送らなきゃならなくても、せめて泣いて笑える人生にしてやりたい。

それが理由だ。」

俺の言葉に深く頷く、理解して貰えて何よりだ。
暫らく沈黙が降りる。

「あなたは解呪の研究をするといいましたね。
その解呪が有用かどうかには最初に実験される人が必要なはずで
す。

どうか私にその役目を与えてください。」

彼女は唯の村人のはずだ。だけど聡い。聡過ぎる。

研究には犠牲が付き物で、身分が低く身内の無い彼女が適任者の
一人であることを識っている。

親兄弟を無くして自暴自棄になっていることもあるけど、普通は
進んでそんなこといえない。

何か含むところでもあるのかもしれない。だが、其れでも良い。
そのときまで自分自身を肯定してくれて生きてくれるなら。

「研究の道は長い。」

その間に俺を狙う敵も居るだろう。

だから俺を守ってください。」

俺だけでは決して成功しないだろう。協力者が必要だ。

俺の真剣な眼差しに、はい。と、か細く答える。

顔が真っ赤になっているけど、俺が何をした？

俺とリリディアの間で変な空気が流れる。

こんな時は話題転換に限る。

「ギリリアはどうする?」

「……今までと…変わり…無い……」

近くにいたギリリアに尋ねて見ると素っ気無い回答が戻ってきた。彼女は彼女で人形のような人生を送ってきたのだろう。

其れを思うと悲しくなるが、此れからの人生を受け止めているのなら問題ない。

俺のできることをするだけである。

朝の筋トレが終わったらリリディアとギリリアの後に風呂に入る。女性陣の中で汗臭い状態していると不潔だと言われ、避けられてしまう。

特に今日は彼女達の想いを受け止めなくてはいけないので、なるべく不快な思いをさせたくない。

それにしても温泉は好い。一日に二度、三度と風呂に入る事が出来るのも温泉の醍醐味である。何より水道代と燃料代が掛からないのが良い。

朝食に出ると既に誰もいなかった。

避けられている様でちょっと悲しい。

俺が朝食を食い終わるのを見計らって、赤髪の元騎士ルーカサスが神妙な顔してやってきた。

「失礼します。」

「正樹殿。いや、主殿。」

主殿にお願いがあります。主殿のご寵愛は私一人になさることを平にお願い申し立て奉ります。」

土下座して願いを立てる様に俺は言葉を見出せなかった。

俺の沈黙を怒りだと勘違いしたのか、更なる言葉を重ねる。

「主殿のお怒りは御尤もで御座いますので、せめて嫌がる娘達は御手付きに為さらぬ様、御忠心いたします。

我が身はどの様な辱めも受けますので、この言葉をお考えあそばす様、お願い申し上げます。」

立ち上がると礼をして立ち去ってしまった。

言葉を掛ける暇も無い。まるで突然のダウンバーストのようだ。

彼女は騎士らしい自己犠牲の精神で、自分自身を肉体的に捧げて他者を助けるために勇気を振り絞ったのだろうが、俺の意見を聞かないのは如何なモノなんだろう？

結局、俺は彼女の中でエロスの大王として君臨し続けなければいけないのだ。

彼女は どうして そんな妄想に取り付かれたのだろうか？

納得のいかない顔で魔術講座に出るとノルシュルが先に来ていた。変わりなく佇むその姿に無性に嬉しくなった。

「魔法を教えてもらえないかと思った。」

「阿呆が。お主は既に神の身。人を意のままに操るくらいでガタガタ抜かすな。」

軽く頭を叩かれたが不思議と痛くなかった。

昼食後、お姫様のエリエンスが畑に行く途中で話す機会があった。エリエンスはどうやら畑仕事が入ったらしい。まあ、少し弄る位なら楽しいだろう。それで職を立てるとひどく辛い。

「貴方のなさる様になさればよろしいでしょう？
わたくし達に拒否権は無いのですから。」

冷たい冷たすぎる。

氷の刃に凍えそうだ。

通りがかったミニシアにも聞いて見た。

「なにも気づかないなら、どうでもいいにゃあ。

あつても痛いことだけは、して欲しくないにゃあ。」

自分の身に降りかかる事なのに素っ気無さ過ぎやしないか？

最後はエルフ姉妹か。ハーフェルフの妹ならともかく、純エルフの姉にはひどく罵倒される予感がする。

修行しながら彼女達を探したのだが見つからず、夕食の時間になつてしまった。

いいもん。まだ時間があるから。

「今日の夕食は皆で楽しんで会話を弾ませる為に鍋にしたわ。」

サクヤの掛け声で夕食が始まった。

夕食が鍋なのは良い。皆でワイワイ愉しんで俺が作ってしまった
暗い雰囲気無くすために企画したのだからサクヤには頭が下がる
想いだ。

だがしかし、この仕打ちは無いと思う。

手足を後ろに縛られて猿轡を咬まされて、転がされている状態。いつたい俺が何をした。

「この味付けは美味しいですね。」

「この国の勇者が伝えた大豆から作られた醤油という調味料と、隠し味に村長の家に隠してあった特上の吟米酒を加えてみました！」

エリエンスの驚きにマイカが得意げに自慢している。村長が泣いてそうだ。

酒の入っていた瓶は隅に転がっているアレであろうか？一升瓶が空になっている。

俺の予想が正しければ、あの鍋に入っている酒の量は隠し味のレベルでは無い。酒鍋になっているはずだ。

みんな無事か？

見渡せば全員の顔に赤みが差している。揮発したアルコールで酔ったのだろう。

なんだろう皆凄くイイ笑顔だ。

めったに笑いそうに無いギリリアやアリスアインまで笑っている。

確かにこの企画は成功したのだろう。

だが、この後の理不尽の嵐が目に見えようだ。

俺は此れから起きる惨状から目を背ける為に、壁際ですきっ腹を抱えながら丸まって不貞寝することに決めた。

誰も好んでトラの尾を踏む行為を仕度は無い。

現に今はガールズトークで華を咲かせて、女の聖域井戸端会議と化している。男の俺が入る余地など一厘の隙も無い。

出来れば平穩無事でこの場を乗り切り切りたい。神様は嫌だけど乗り切るためだったら祈ったって良い。

お願いだから何事もありませんように。

俺の願いも空しく、その瞬間ゆがが起こってしまった。

「では、メインイベントを始めるわ。」

サクヤの言葉と同時に俺は皆の輪の中に放り出された。

俺は抗議の声を上げるが酔っ払いに道理は通じない。というか猿轡を咬まされている時点でムームーしか声が出せない。

「ええい。五月蠅いわね。」

俺は仰向けにされると、顔面にサクヤのヒップアタックを喰らった。

遠慮の無い一撃に一瞬意識が遠くなる。

尻圧で息が出来ない。

俺が必死で気道を確保していると嫌な言葉が聞こえてきた。

「では御開帳〜」

えっ御開帳って何？何で下に穿いているのを剥ぐの？

嫌！お嫁に行けない！

俺が抗議しても今の状態では抵抗できるはずも無く、完全に晒し者になってしまった。

「これが男の人なのですか？」

「ふふん。これをこうするとね？……」

全員が俺を中心に覗き込んでくる。興味の無さそうなギリリアまで覗き込んでいる。

パーティ効果恐るべし。

「じゃ、誰が一番にする？」

えっ？何するの？俺を虐めて終わりじゃないの？

「わ、わたしがします。」

「エシヤール？！」

「だってお姉ちゃん。何時かやられちゃうなら自分の意思でやりた
いじゃない。」

キミ、大人しかったのはフリだったの？その言葉、肉食系女子の
言葉！

「そうじゃな、こんな機会二度と来んかもしれん。」

ノルシュル！そこで肯かないで！

「マイカ。気持ち良くしてあげて。アリスアイン。口でしてあげて。」

「はい。」「…はい。」

倫理は？女の子の夢は？ねえ、恥じらいをもっと持とうよ！

「私、男の人に抱かれたこと無いのですが……」

「ここはよく見て勉強するのが好いかと。」

「そうですね。勉強させていただきましょう。」

「……順番…待つ……」

リリディア！ルーカサス！エリエンス！ギリリア！見てないで止めて！

誰かが俺にまたがる気配がする。

ちよだめ。犯される〜！

第14話 修行3（後書き）

なんで俺、こんなに人数を増やしたんだろう？

第15話 一週間

村を訪れてから一週間がたった。

あの乱交事件以来、少女達の態度も軟化しはじめている。（俺の威厳が減った。）

吸収能力の考察もやめ、変わりに魔法具の製作を習い始めた。

剣の腕が無い以上、出来そうなことは手あたり次第習っている。

公爵家の屋敷に出していた使いが帰ってきた。

メインの話はお城の魔族。

彼等は全員魔王並みの強さを持っていたらしい。

非戦闘員（侍女など）には手を出さなかったようだ。怪我人は逃げるときに転んで怪我した程度。

戦闘要員（騎士、兵士）であつても手加減され治療されている。

確実に王と貴族、官僚を狙い。しかも不正をしていない者は逃がす念のいれよう。

不正の証拠もバツチリで本人は打ち首、王も責任を取って自害というシナリオ。

殺した貴族の領地の下に魔族の代官を派遣して、領地が急速に回復しているらしい。

魔族側の目的は共和国にして、魔族も住める国にしたいそうだ。

行なつたのが魔族じゃなければ完璧なクーデター。

残った貴族の力関係を見ると貴族主体の共和国は妥当。

挙兵したがるのは王族だけで貴族には易が無い。

魔族がこれほど統率が取れているなら、むしろ歯向かう方がリスクが高すぎる。

暫らくは魔王との腹の探りあいをしたほうが懸命と貴族は考えるだろう。

王国としてのプライドと長い年月の魔族の恨みをどうにかすれば

の話したが。

俺達はこのままこの村で待機。

現在、屋敷には難を逃れたお姫様がいて、拳兵の圧力を掛けているぞうだ。

金を出したくない、人的被害を最小限にしたい公爵はのりくらりとかわしているが、周辺の貴族からも続々兵が集まる始末。

どうやら一戦交えないといけない状態。下手に勇者の家系だと貧乏くじを引かされる見本である。

サクヤとマイカは屋敷にいて欲しいけど、戦に巻き込まれる可能性があるから怪我の療養のためと嘘を言って、この村に縛り付けとく。

この村の戦力はサクヤとマイカの護衛として残し、戦後の戦力として温存。

俺は、居るとサクヤの夫で心労の元になるし、勇者だから王族に利用されるのが目に見えているので居ない事にする。

頼まれても勇者として活動するつもりは毛頭無いが、君子危うきは近寄らず。

イグジナート帝国の第二皇女であるエリエンス姫は、厄介ごと過ぎるので見なかったことにするらしい。

結局俺達は一ヶ月以上の滞在が決定してしまった。

公爵家から金と食料が送られてくるから安心だけど、その代わりに世話係が一人ついてきた。

新しく村に来たのは、リリイという名前のメイドである。どこかで聞いた名前だが、思い出せない。

彼女はこの村に生まれてサクヤとマイカに仕えるためだけに訓練を重ねたプロフェッショナルである。

当然のことながら今回もサクヤとマイカの補佐をするために遣って来た。

サクヤとマイカの信頼が厚く、俺と研究所から助けられた少女達の関係を教えてもらい、直ぐに関係の修復のため少女達の相談に乗っているらしい。

有り難いのだが、俺のいないところで集まって密談されると気持ち悪い。

まあ、女同士で無いと話せないこともあるし、年上の女性に意見を聞くのも精神を安定するのに好いだらう。

俺はこの時、リリーの名前を思い出せなかったことを深く後悔し、彼女に相談させた自分を悔やんだ。

一ヶ月以上の滞在が決まり、訓練も剣より魔法主体になってきた。才能の無い剣よりも魔法を鍛えたほうが良いということで魔法回路を習っている。

だけど、どうしても魔法回路を物に刻んでも魔法具にならない。精神の手を限りなく薄くして、綺麗に描いても失敗してしまう。物に魔法回路を刻むと生命が宿る。

石に種火を刻めば火炎鼠が生まれる。

壺に水滴を刻むと水亀になる。

枝に魔力付与を刻めば黄金樹の芽が出る。

メルヘンだけど、実際に道具として使えなければ意味のない物。ノルシュル先生曰く、精神の手（白鬼）と魔力（黒羅）が交わっているのが原因で、その間にある命（赤獣）が物品に魔法回路を刻印したとき込められることで生命を永続的に宿したそつだ。

こうなると魔法回路を使用して魔法具を作るとは諦めるしかない。

俺が他の人よりも有利なこと。其れは吸収の能力を使用できると精神の手に魔力が交じり合っていること。

吸収能力は手のひらに触れてないと周囲を巻き込むので危ない。というか自分の身体から離れる（伸ばすことの出来る）気配が無い。

遠距離攻撃が出来ないということは、戦闘に使用するのに対しても格闘能力が必要で、戦闘センス皆無の俺が使いこなせるとは思えない。

唯一使用できるのは敵に囲まれたときに吸収能力を開放して、周囲を殲滅するぐらいだろう。

一方精神の手は、薄くするのに時間が掛かる。他人に直接力を与えることが出来ない。（その人が俺に依存してしまうため。）

魔法回路を使って魔法具を作ることは出来ない。ただし、ビーストテイマーのように生み出した生命をけしかけることは可能かもしれない。（全然趣味ではないが。）

精神の手を自分自身の加護に使用してみるのはどうだろうか？精神の手で作った石の剣。アレも魔剣になるのだろうか？……相談が必要だな。

サクヤ達は何やら忙しそうだったので、石の剣を『隷従の首輪』の鑑定をして貰った爺さんに見せることにした。

結果は魔剣である。しかし、素人が急場しのぎで作ったのでバランスが悪く、とても剣として使用できないとのこと。まあ、そんなに期待していなかったが、ハッキリ言われると凹む。

だが、逆にいえば既製品に精神の手で加工を加えれば魔法の剣になる事が判明した。

できる事が見つかると嬉しくなる。

持っているナイフに精神の手を使って刃先だけを加工してみる。

刃先が鋭くなった気がする。

石に刃を当て押してみる。

石がバターのように切れた。

自重では石どころか藁も切れなかったので、意思を持って切るこ
とが出来らしい。

まるで物語に聞く刀鍛冶の試し切りのようだ。

かの刀鍛冶は藁を川の上流から流し、刀の試し切りをするらしい。刀を突き刺し、手に持った状態で切れれば名刀。切れなければ駄剣。

刀から手を離れた状態で切れても駄剣なんだそうだ。

そんな名刀のような効果を得られるなんて嬉しく思う。

今度はルーカサスに渡した槍を加工してみよう。

変な感じに変えるとバランスが悪くなってしまつから、全体的に少し小さくするつもりで。

刃先を鋭く、柄の部分をしなやかにする感じで精神の手を這わせる。

うん。上手くいった。

最近、精神の手の扱いが上手くなった感じがする。

槍を元に戻してルーカサスに断りを入れておくべく彼女を探すとにする。

俺が気分よく歩いていると、メイドのリリイが少女達に講義を行っている集会に出くわした。

「……この事から、男は自分より弱いものにおねだりされることが弱いのです。」

気になって聞き耳を立ててみる。

「相手が気分よくなるために、エッチをするときも相手の性癖に合わせて自分も楽しむようにしましょう。」

えっどうして話がそっちに行く？

「相手の方が受けならこちらが命令するだけで良いのですが、攻め

の場合は私達が受けにならなければなりません。

このとき相手の性癖に合わせられなければ自分が辛いだけです。辛い顔しておねだりされてみても相手は興ざめして言うことを聞いてくれません。

なので自分自身も楽しむ心が必要なのです。」

ちよっ何教えてるの？

「私達は演劇の役者ではありませんから演技力が足りません。

それでは相手が見破ってしまふ可能性があります。

そこで自己催眠で成り切る方法です。

お芝居などで物語のヒロインに感情移入しますね？

あれと同じです。

相手の性癖に耐えられるような人物に成り切ってみて下さい。」

夜伽の心得でも教えてるのか？

「こちらの演技によって相手の心を掴めばこちらのものです。後は絡めとるように相手を動かすだけ。」

なんてこと教えるんだ！男を手玉にとる方法なんて教えるんじゃない！

悪女になって被害を受けるのは俺なんだぞ！

……思い出した！

リリースってマイカに性教育したぶっ飛んでるメイド！

なんて奴に彼女達を任せたんだ。

まさに後悔先に立たず。

教え込んだ知識は元に戻せない。

どうする俺。

どうやって逃げる？

逃げる場所が無い。

逃げられない。

……逃げられないなら返り討ちにすべし！

幸い彼女らはこちらに気づいていない。つまり情報に先じている。畏と知っていて踏み込む馬鹿もいないが。

あえてここは踏み込み。包容力で話を捻じ曲げる！

そう、あの聞き分けの無い駄々っ子を諭させる伝説の保母さん方
法をとり、大人の狡猾さと冷静さを魅せるのだ！

全ては俺の平穩の為に！

フラグだろうとプラグだろうと押し折ってくれる！

……この決意から俺と少女達の戦いが始まる。

食事の補佐で両脇からあゝんをしてくる。

風呂に入ると背中を流しに来る。

眠っていると添い寝をしてくる。

この程度なら普段サクヤ達がしてくると変化が無い。俺は余裕
で対処できるはずであった。

だがしかし！何を血迷ったのか元騎士ルーカサスが変なことを言
い始めたのだ！

「私は主殿専用の肉奴隷です。どうか、ご自由にお使いください。」

自室に入ろうと扉を開けたら、部屋の真ん中で全裸になって正座
していた。

真顔でのたまう彼女に俺は二の句を告げない。

この前、俺に一方的に宣言した後から何があった？
メイドのリリィの教育せんのうを受けてから、どう脳内化学反応を起こしたのか。

彼女の頭の中のピンク色成分が心配になって来た。

俺は彼女の中で、ど変態のクソ虫野郎になっていて、彼女は可愛
そうな生贄にでもなっているのだろう。

付き合いきれなくて見なかったことにして放置してきたが、今後
どう変化しているか怖くて想像できない。

心労で心が折れそうだ。

というか、こうなったのは全部、リリィのせいだ！！

絶対復讐してやる！

第16話 山賊

災厄は突然やってくるもの。

そのとき俺はサクヤ、マイカ、アリスアインと一緒に寝ていた。この頃になると三人が俺の部屋に夜這いに来るのを諦めた。(慣れ
って怖い。)

突然、玄関の扉が破られる音に叩き起こされる。

この別荘はサクヤとマイカの御祖父さんの趣味で、日本家屋のよ
うな立派な平屋敷なので感慨深げな趣がある。寝起きたと自分がど
こかの旅館にいると錯覚するぐらいだ。

ナイフを持って部屋から出ると玄関の手前、廊下を挟んだ左右の
部屋から悲鳴が聞こえてくる。

俺達は奥の部屋で寝ていたから玄関から一番遠い。

俺は三人娘に自分達の部屋にある武器を取るように指示して、俺
は先行することにした。

サクヤが武器を取りにいかず付いてきたので聞いてみると、徒手
空拳で相手を倒す術すくを知っているとのこと。

左の部屋からは男の悲鳴が聞こえてきた。

どうやら左の部屋の彼女達はお圧しているようだ。

俺は右側の部屋に奇襲を掛けることにした。

開かれた部屋に入ると手前に青紫の髪の少女がうつ伏せに倒れて
いる。段々血だまりができているところを見ると傷が深そうだ。

真正面の壁で男が俺に背中を向け、その足元に小柄の少女が膝を

ついている。

部屋の奥ではエルフ姉妹が二人の男に抵抗していた。

「サクヤ。二人の援護。俺は時間を稼ぐ。」

サクヤに奥で争っている男達を掃討させる。

直ぐに倒せ無くても三対二でこちらの有利になるし、エルフ姉妹と均衡しているのだ、時間を掛ければ倒せると踏む。

サクヤは俺の意図を知って直ぐに奥の戦場に向かう。

俺の声を聞いた手前にいる男が振り返ると、壁に寄りかかっている少女の首から上が無いことに気づいた。

男は灰色の髪の毛の付いた丸いモノを左手に持っている。

その丸いモノは見覚えのある顔がついているが、見覚えの無い、赤い目に金色の瞳がこちらを見ている。

彼女は普通の白に茶瞳だったはず、なんで？

そんな場合じゃないはずなのに場違いな疑問が浮かび上がる。

「半魔族ハーフデモンを見るのは初めてか？

「こいつらは頭を取らないと死なねえからな。」

俺が手に持ったものを凝視しているのに気づいたのだろう。男は頭を捨てると下卑た笑みを浮かべながら剣を振りかぶってきた。

「安心しな。同じ所に送ってやるぜ。」

男の声に我に返った俺は、反射的に精神の手で守ろうとした。

いつも以上に密度の濃い、物質化するぐらいの精神の手に、男は驚いた顔をして飛び退った。

「化け物か。」

俺はその言葉に答えることなく、精神の手で自分の身体を動かすことに集中する。

身体が想像どおりに動く。

俺が側面からナイフで仕掛けると簡単に弾かれた。

「動きはいいが技術がねえな。」

俺の精神の手で頭が冷えたらしい男は、俺の動きを冷静に分析した。

そんなことは分かっている。

技術が無いのは仕方ない。諦めている。

だから精神の手を使う。

速く。

もっと速く。

風よりも光よりも速く。

身体が壊れてもいい。

相手を殺せるなら。

精神の手を身体の内側で練り上げ、直線的に跳ぶ。

男は虚をつかれたのか、時間が停止したように固まったまま動かない。

俺はそのまま相手の首筋にナイフを当てると一気に振りぬいた。

俺の魔法付加もどきで強化されたナイフは、主の思い道理に首を切り裂く。

首の半分を引き裂かれた男は、血の噴水を上げると不思議そうな顔をして倒れた。

自分が倒れたことに理解が出来なかったのだろう。死に顔も驚いた顔をしたままであった。

サクヤを見ると、最後の一人の下腹部に足を蹴り上げて倒していた。

アレいたそう。男だったら絶対に喰らいたく無い。

嫌な物から顔を背けて現実逃避するために、部屋の入り口で倒れている少女の様子を見る。

少女は予想どおり、リリディアで、袈裟懸けに切られてはいるがまだ息があった。

だが、直ぐにでも死にそうだ。

少し迷ったが治癒の魔法を使うことにした。

サクヤを見るとハーフエルフ妹のエシャーラの傷が深いのか治癒魔法を使っているようだし、直ぐに使えるのは俺しかない。

治癒の魔法回路は習っている。

問題は治癒される人に魔法回路を描き込む必要があること。

つまり、物品に魔法回路を刻み魔法具を作るのと一緒である。

俺が作った魔法具のように化け物になる可能性が大きい。

だが、もう既に虫の息であるリリディアを見捨てる気になれず、治癒の魔法を使うことにした。

生きていて欲しい。

その一心で治癒魔法を刻み続ける。

頭が一杯一杯で精神の手を薄くするなんてこと忘れていた。

治癒魔法の効果でリリディアの傷が塞がっていくのを確認した時、リリディアが息をしていないのを知る。

まずい。

諦めるのはまだ早い。

俺はリリディアの気道を確保し、心臓マッサージと人工呼吸を行う。
う。

時間が長く感じる。

もうだめかと心が折れるのを我慢して人工呼吸を行うとリリディアが息を吹き返した。

だが、おかしい。リリディアの金色の瞳が爬虫類のように縦長になっている。

警戒しながら声を掛けてみる。

「リリディア？大丈夫？」

「ああ、申し訳ありませんぬ主様。我にかような優しい言葉を掛けていただくなど嬉しい限りで御座います。」

様子がおかしい。おかしすぎる。

リリディアはこんな口調じゃないし、しつとりと艶つやを感じさせる笑いをしない。

「リリディアなのかい？」

「リリディアとしての記憶も人格もありますので、リリディアと呼んでください。」

?????

別の人格が宿った？俺の魔法の影響？

「主様の魔法により古き血脈の記憶が解かれ、新しき命を頂きました。」

意識の混在がありますね、主様に変質させて頂いたこの身は主様のもの。

どうか犬の様に命令し、お扱ってください。」

正座に座りなおして三つ指付いて頭を下げる。

犬のようにって、ペットにしるってこと？

どんなアブノーマルプレイ？

とりあえずスルーしとこう。

スルーだ。スルーだ。スルーだ。スルー。スルー。スルー。

煩惱退散。沈着冷静。

……よしっスルー。別のことを聞こう。

「古い記憶って昔の記憶を持つてるのか？」

「いいえ。古き記憶は魂の記憶。昔のことを覚えている訳ではありません。ただそう言う存在であったことを思い出したにすぎませぬ。」

つまり、昔のことによってリリディアの人格が流された訳ではないのか。

じゃあ、この口調は俺の魔法の影響？

意識の混在と言ってたし、リリディアの意識と俺の魔法が作り上げた意識が混ざり合っている状態なのだろう。だとするとちよつと不味いかも。

意識が二つあることを自覚している状態になっている。

下手すると意識が分かれて二重人格になる可能性がある。
優しい声で、あやす様に諭してあげる。

「君の中に意識の混在があるといったね？
其れは意識が二つあるということ。其れはとても危険なことなんだ。」

だから、どちらも自分なのだと認めなさい。
どちらも自分と受け止めて一つにしなさい。」

まずはどちらの意識も認めて上げること。
でないとなんか人格を二つに分けてしまうことになる。
後は時間を掛けるしかない。

結果、人格が変わってしまっても変わらずに付き合うことが大事だ。

リリディアは大丈夫そうなので周囲を見回すと、ギリリア以外の少女達が集まっていた。

「寝ていたところを襲撃されたので、みんな薄い夜衣を纏って村で貰った武器を持っているだけだ。」

肌蹴た素肌が色っぽくて、目のやり場に困る。

「とりあえず着替えて村の様子を見よう。」

俺の言葉で各自の仕度を整え始める。

ギリリアには悪いけど安全が確保されるまでそのままにさせてもらおう。

装備を整えて村に向かうと全て終わっていた。

村に現れた族は総勢三十人ぐらい。

最初に浸透攻撃を喰らったが、そこは公爵家直轄の特殊部隊育成村。

村の住人の殆どが元特殊部隊や特殊部隊の教官ばかり。
直ぐに立て直して逆に血祭りに上げていた。

捕虜を尋問したところ彼等は傭兵で、今度の戦に参加する行きが
けの駄賃として村を襲撃したらしい。

この村の存在を知った理由は、荷車を押して脇道に入る姿にメイ
ド服の女がいたので、貴族の別荘でもあるのだと推理して後をつけ
たそうだ。

ほんつと、あのメイドは疫病神だ！

第17話 戻るべき日常

人はあっけなく死ぬ。

それはこちらの世界であるつと向こうの世界であるつと同じ理ことわりらしい。

ギリリアの埋葬を済ませた後も毎日が続いていく。

生きている人間は死んだ人間の分まで生きなくてはならない。そんな馬鹿なことを言うつもり無いが、少なくとも引きずって生きていくのは罪である。

死んだ人間を思い出すのは時々であればいい。でないと、同じ生きている人間に迷惑が掛かるから。

俺は朝のジョギングに出かけると、リリディアとエルフ姉妹のミシャーラ、エシャーラが付いて来た。

リリディアはギリリアと仲の良く、義姉として接していたはずだ。よく彼女にギリリアが笑いかけていたのを覚えている。

俺達の中で一番辛いはずだが、黙々とトレーニングをこなす。

「リリディア？辛いようだったら少し休めよ？」

「有り難う御座います主様。ですが、もう二度と誰かを失いたくないのです。」

今回のことで責任を持っているのだろう。自分をもっと強ければと思っっているに違いない。

辛いときに身体を動かして忘れることは間違っではないので、彼女のやりたいようにさせておく。身体が壊れそうなら強制的に休ませるよう見張ってればよい。

其れよりも意外だったのがエルフ姉妹が朝のトレーニングに付き

合い始めたことだ。

「悪い？体が鈍っていたから動かしているだけよ。」

ミシャーラの強気も切れがない。やはり、同じ部屋で寝ていたギリリアが殺された事が堪えたのだろう。付き合い合わせた妹のエシヤーラが眠そうだ。

「エシヤーラ。ちゃんと身体を解しておけよ？」

俺の言葉にハーフェルフの妹は生返事で答える。
相当な低気圧なのだろう。立ちながら頭をコクリコクリしている。
俺は苦笑し、ミシャーラは苦虫を噛み潰した。

屋敷の中は昨日一日で綺麗に片付けられた。
掃除をしているときに俺の吸収能力の有効利用が見つかる。
なんと。吸収の対象を選択できるのだ。

つまり、板に付いた血の染みを血だけ選択して綺麗にする事ができる。

これによって凄惨な殺人場所の痕跡を無くして、精神的な負担を減らすことが出来た。

吸収能力の使用する幅が広がったのが、今回の事件で唯一得られたものだろう。

掃除夫としての生計の道が切り開けた！
勇者する掃除夫。
将来設計の一つに考えておこう。

朝食が終わり、精神の手を使って自分自身に加護することについて考える。

— 昨日の戦闘では巧くいった感じがする。

精神の手で自分の身体を動かす。
思いどおりに動き、身体を浮かすことも可能。
精神の手を身体の中に止め、高める。

世界が止まる。

世界が俺のものだと錯覚するほどの高揚感を感じる。

木を自分の想像した形にしようとして手を当てると簡単に変化した。

俺が精神の手を解除して時の流れた空間に戻ると、ノルシュルが怖い顔で俺を睨み付けてきた。

「お主、何をした？」

「精神の手を体内に止めたんだけど？」

目の前の木が、祈りを捧げているギリリアを取り込んでいる形に変化している。

彫刻でもありえない異質な光景を見ながら言う。

「二度とするな。」

それは世界を変質させる危険な代物だ。

お主の身体も唯では済むまい。

人でありたければ二度と使わぬことだ。」

ノルシュルの鋭い眼光は俺の意識に楔を打ち付けた。
確かに今はまだ人でありたい。

でも、人で無くなることを決意すれば使つたらうなあ……

ノルシュルに怒られてから精神の手を使用して何かをする方法に変更。

自分の身体を動かすのは慣れるしかないので、朝のジョギングを体を鍛えるのと精神の手で体を動かすので二倍にすることで決定した。

後は精神の手で作った品物についての研究。

精神の手で作ったものは魔力が籠る。

つまり力技で魔法の品物を作っているわけだ。

ならば力技で魔法回路のように方向性を付けることは出来ないだろうか？

研究テーマは決まった。後は実験あるのみ。

岩場で実験していた俺の耳に、女のすすり泣く声が聞こえてきた。

俺は岩陰から音のしないようにそっと覗き見るとエリエンス姫が泣いていた。

見なかったことにしようかと思ったが、支えて上げるのも大人の役目かと自分を納得させた。

エリエンスの近くに座り、明後日の方向を見ながら泣き終わるのを待つ。

少女マンガみたいに抱き寄せながら「大丈夫かい？」なんて甘く囁くと女の子としては嬉しいのだろうが、俺には絶対に真似できないししたくも無い。

まあ、時間つぶしに彼女の泣いている理由を考えてみる。

やはりギリリアのことであろうか？

だけど、彼女はギリリアと親しくしていなかったはず。それにギリリアの遺体を葬るときにもそんな素振りをしなかった。

今まで我慢していたのが臨界を向かえたのか？

聞いてみないと解らん。

暫らく悩んでるとエリエンスの嗚咽が終わりその場を去ろうとしたので引き止めた。

「何処にいくんだい？」

「貴方には関係ないでしょう？」

俺の声に反応して立ち止まるが、再び足を進み始めた。

俺、一応、主なんだよなあ。

荒っぽいけど、これを逃したら俺が座っていた意味が無いし。

「止まれ。」

俺のそばに座れ。」

俺が命令するとエリエンスが横に座った。

「話せ。」

「命令しないはずでは？」

話せと言ったら悪態ついてきた。まあ、話すことには違いない。

俺はジッとエリエンスの瞳を覗き込む。

アイスブルーの美しい瞳が泣きはらした顔でもよく映えている。

エリエンスは諦めたようにポツリポツリと話し始めた。

「傭兵くずれから帝国の話聞いてきました。」

あの傭兵くずれ達まだ死んで無かったのか。てっきり村人達に殺

されているものと思っていた。

「帝国では、わたくしは殺されていることになっているのです。」

「わたくしが殺されたのはスンジリ商国の所為だと。

……戦争をしかけたそうです。」

「最初の戦いで、第四騎士団が、わたくしの親友達が壊滅したと……」

また泣き始めてしまった。

「わたくしの所為で。」「わたくしの所為で。」と泣きじゃくるエリエンスを懷に抱き、子供をあやす様に背中を優しく叩いてあげる。

暫らくして泣きやむと俺の顔を見ながら言った。

「わたくしは貴方がたの元から去らねばなりません。」

帝国はわたくしが生きていることを隠そうとしようでしょう。

暗殺者が差し向けられることになるはず。

皆と一緒に居ては迷惑が掛かります。だから……」

お別れです。か細い言葉は別れたくない切なさに満ちていた。

「嫌だね。」

我俣になろう。

柄じゃないけど、こんな時ぐらいは我俣になろう。

彼女の優しさは無慈悲な世界を敵に回すために。

「キミの今の立場を言っでいらん？」

「わ、わたくしはこの村に養ってもらっていて、貴方のあやつり人形で……奴隷です。」

「そう。だからキミに決定権は無い。

そして、俺はキミの主まぬなんだよ。」

再度、瞳を覗き込む。

泣きはらした目が、縋るように拒絶するように揺れ動く。

耐え切れなかったのか、ぷいっとそっぽを向かれる。

迷惑を掛けたくないという決意が揺れ動いているのが分かる。

彼女が死地に向かうのを見過すことは出来ない。

ここは悪いけど命令させてもらっつ。

「二度と馬鹿なことは考えるな。」

誰にも渡したくないことを表現するようにつきつく抱きしめる。

命令が効いているのか、大人しくしている。

なんだか甘い空気が流れていく。歯が痒い。

「わたくしを縛り付けてください。貴方を感じられるぐらい強く。」

俺の胸の中のくぐもった声が、震えているのは気のせいではあるまい。

「縛って上げるよ。今日のことを忘れないように。」

あれっ？なんか違う意味に取られるような？

なんか変なフラグ立てた？

エリエンスが体の力を抜いて俺に身を預けてきた。

暫らくするとスウスウと寝息が聞こえてくる。

彼女を起こさないために、力のかかる体勢から動くことが出来なかった。

明日、筋肉痛だな。

第18話 宴

村に来てから二ヶ月が経つ。

傭兵くずれの山賊が村を襲った以外は実に平和なものだ。

精神の手の研究をしながら体を鍛える毎日、正直、このままこの村で骨を埋めてもいいかなと思っっている。

気になることは二週間ほど前から、少女達が俺を避けるようになってきたことだ。

以前ほど皆と一緒に食べることが少なくなったのと、他の小屋で集まって秘密の作業をしているようで会える機会が減っている。

小屋の中で何をやっているのか気になって、それとなく聞いてみるのだが、はぐらかされてしまう。

かといって女性陣の集会に割り込む勇氣は無いし、彼女達の行動を制限するつもりも無いのだが、娘に避けられる父親の気分で寂しく感じる。

いじけるように研究に没頭したのは内緒だ。

そんな平穏な日々が今日で終わる。

明日から公爵家の屋敷に出発するため、久しぶりにみんなで食事をすることになった。

朝から村人総出で祭りのようにはしゃいでいたから、明日は早いこともあって夕食は俺達だけで取る事になったのだ。

「では、宴を始めましょう。」

「ちょっと待て。」

サクヤの音頭に俺は突っ込みを入れる。

俺の左右にサクヤとマイカ。俺は上座に座らされている。

ここまでは良い。いつものことだ。

だが、俺とサクヤとマイカしかないのは、どういうことなのだろうか？

残りの人たちは？

「わかっております。食事をお持ちいたしましょう。」

いや、それもあるけど他の人は？

サクヤがパンパンと手と鳴らすとメイド姿のエルフ姉妹、ミシヤーラ、エシャーラと猫耳ミニアが食事を持ってきた。

訓練された動きで物言わず夕食を置いて行く三人を見ながら呟いた。

「何でメイド服？」

「メイドのリリイがね。お義兄様に仕えるので一番違和感無いのが、メイドになることなんだから教えてくれたんですよ？」

だから、服を私達で作って作法も教育してもらったんだ。

初めて服を作るの手伝ったけど中々上手く出来なくてね。リリイには上手だと言われたけど、やっぱりお姉さまみたいに上手くできなくて何回か失敗しちゃったんだ。でね。結局お姉さまがほとんど作ってしまったんだけど、そのかいあってみんな素敵だよね？」

「ああ、よく似合っている。」

俺の呟きを聞いたマイカが、メイド服を作るのを手伝ったことを自慢げに説明している。

俺はそれに生返事兼贅美を送った。

正直言つてネコミミメイドとエルフメイドは反則だと思う。
メイドスキーでは無いはずなのに彼女たちのロングスカートのメ
イド姿に萌えてしまう。

ミニアの意外にある胸、ミシャーラの細い体躯、エシャーラの控
えめな雰囲気。鼻血が出そうです。

ひと仕切り堪能したあと、我に帰って考えた。

俺に仕えさせるためにメイドにしたのは良いだろう。彼女達が納
得できればそれに文句を言うことはない。ここ最近の行動も、服を
作って作法を習っているなら納得できる。

だがしかし！それなら何故、他の人たちが居ない？

頭の中で警鐘が鳴っている。

特にあのメイドのリイが関わっている事に恐怖を覚える。

でも、まずはメイド服を作つてまで俺に仕える事に納得してくれ
た三人にお礼を述べなくてわ。

「三人ともメイドになる事を了承してくれてありがとう。

これからもよろしく。」

「もつたいないお言葉、有り難う御座います。」

三人の中でミシャーラが代表で返礼すると其れにあわせて残りの
二人も礼を返した。

教育は良いけどやり過ぎじゃないか？言葉遣いが変わっているん
だが……

まあ、後で直せばいいか。

「他の人たちはどうしたんだい？」

「気になりますか？まだ宴の最初ですが呼んで参りましょう。」

本当は宴の半ばまで伏せておくつもりでした。とサクヤは悪戯がばれた時の様な笑みを浮かべる。

ミニアが呼んできたのはアリスアインとノルシユルの二人だけが、その二人が問題であった。

二人とも胸の桜色が透けて見える白い衣装に身を包み、俺の前に来ると膝まづいてきたのだ。

白い衣装と生来持つ儂さ、一つの動作ごとの美しさに畏怖を感じる。

「我が名、ノルシユル・キリシユー・ジ・ミサラス・アルスナードにおいて申し上げます。

マサキ様の忠実なる僕しもへにして従属神となり、偉大なる加護を賜る事をお許しくだされ。」

「…偉大なるマサキ様に申し上げます。

私、アリスアインが我が身、我が心を捧げ。

御身の巫女となる事を許したまへ。」

神社の祭祀を見るような神秘的で神々しい祝詞に気を飲まれてしまった。

……え〜と。だれかせつめいおねがい。

……結局、俺が喋るまで誰も喋らなかった。

「説明して。」

「うむ。一月ほど前にわらわがお主の力の強さを教えたのじゃが、この子が自分が足手まといじゃないか悩み初めてな。そんなに心配なら巫女になり眷族として置いてもらえば良いと進めたのじゃ。」

「で、ノルシュルは？」

「わらわは従属神となったほうが面白そうだと思った……イッイイタイタイ……」

最後まで言わずノルシュルの背後に回ると、こめかみを両拳で挟んでグリグリしてあげた。

アリスアインがその様子を横で見ているような目で俺に訴えてくる。

俺は溜息を一つ吐くと安心させるために笑みを返した。

「俺がこの世界に来た瞬間からキミは俺の巫女だったよ。」

俺の言葉に安心してホッと一息ついた。

「サクヤとマイカは？」

彼女達の様子に心配になってきた。

変なこと言わないだろうな。

「私は正樹様の妻ですよ？」

「お義兄様の愛人です。」

マイカの発言はともかく、予想された答えで安心した。

予想斜め上の答えを出されたら、止めようが無い。心配事はこの後に控える三人だけにして欲しい。

エリエンス姫、元騎士ルーカサス、リリディア。

エリエンスはあの号泣から人が変わったように甘えんぼになった。隙があると引っ付いて縄で縛って欲しいと強請ってくるのだ。

ルーカサスは自分の事を便器として扱って欲しいとかいい始めるし、リリディアはイヌとして忠実であろうとする。

ある意味、一番ぶっ飛んでる三人である。

彼女達を思い出すだけで胃が痛い。

ただ確認しなくてはならない悲しさ。

……このまま無視して宴を進めていいかな？

「では、エリエンス様達もお呼びいたしましょう。」

無視して進めたかったのにサクヤが其れを許さなかった。

俺は死刑執行を待つ罪人の気分で彼女達が現れるのを待つ。

予想どおりと言うか、予想したくなかった予想斜め上の姿がそこにあった。

黒皮の腿まであるブーツを履いて、二の腕まである黒皮の手甲、黒皮の首輪を付けている。というか、それしか身に付けていない。

正直、美しいと思った。

十代の若々しい白い肌に彼女達自身が持つ素晴らしい肉体。サクヤに劣るが、それでもメリハリのある丸みを帯びた肉体は異性を魅了する。

桃源郷の肉体美がそこにあった。

「わたくし、エリエンス・アドベ・イグジナートは、御主人様専用の縄人形となり、モノとして御仕えする事を誓います。」

「私、ルーカサス・メディアンは、主殿専用の肉便器となり、主殿のモノとして御仕えいたします。」

「我、リリディアは、主様専用のイヌとなり、主様のモノとして御仕えいたしますので御好きなときに使用してください。」

衝撃的な誓いに納得している自分がいた。

最近の彼女達の行動を見ればこういう展開はあつたはずだ。だが、こんな誓わせて彼女達の行動を制限するような行為は採らなかつたし、採らせなかつた。

今回の宴の裏には誰かがいる。

誰だか解っているが確認しなければなるまい。

「今回の宴を企画したのは誰だい？」

「リリイですが？」

やはりあいつか！こんな首輪やブーツ、手甲なんて小道具を準備しやがって！

どうせアリスアインとノルシュルの着ている衣装もあいつの仕業に違いない！

余計な事を吹き込んで陰で笑っている姿を想像すると腸煮えくり返る思いだ。

悔しいけど陰で笑っているあいつを、今から絞め殺しに行っても逃げられるだろうから今は宴を進めるのが重要だ。

皆、美しく食べてちやいたぐらいだけど、なんとか自制する。

俺は後ろに置いた布包みを解いた。

「全員そろつたようだから渡しておくものがある。」

俺の力で作った護符だ。アミジュレット

これは物理防御、魔法防御を高める働きがある。どうかみんなに貰って欲しい。」

板に色の付いた石を埋め込んである首飾りを全員に掛けてあげた。首飾りの石は一つ一つ違い。三つの石の両脇は掛けた本人の瞳の色、真ん中は髪の毛の色と同じにしてある。

護符の効果としては物理、魔法防御の他に全員の居場所が分かるとか、各種攻撃魔法の魔法回路を組み込んでいて描かなくても放るとか、その他色々と詰め込まれている。首飾りのそれ自体が俺の力の受信装置兼魔道書と言っていていいほどだ。

だが、ここでは教えない。

いつか「こんなこともあるのか」と言ってみたいからだ。

「この村で悲しい事が起こったけど、これ以上みんなを傷つけたくない為に作った。」

あまり良い出来ではないけど、肌身離さず身に付けてほしい。」

女性陣は贈り物を貰って感激して狂喜乱舞しているけど、俺は首飾りの隠し機能を秘密にしている事に冷や汗を掻いていた。

喜びすぎる……………実験装置とバレたら殺されるな。

第19話 アララギ公爵邸

アララギ公爵邸にやってきた。

村を出発する時にアリスやインやエリエンスが宴で着ていた服（透けてる服とブーツに首輪）で旅に出ようとしたときは、止めてくれと泣いて頼み込んだ事もあったが、何事もなく辿り着けたのは俺の日ごろの行いのおかげだと思う。

公爵邸は村の和風別荘とは違い、外国産のヨーロッパのお城（ねずみ国の灰かぶり城に似ている）である。

何でも昔は対魔族用の砦になっていたのを、お祖父さんが領地を貰ったときに改築したらしい。

外観はお婆さんの趣味で乙女なところが多々あるが、基本的には魔族に睨みを効かせ味方に安心感を与える質実剛健の無骨な造り。

幾重にも防壁と堀が張り巡らされた姿は、王都の王城よりも立派だ。

荷物と少女達をリリィに任せて、サクヤとマイカと一緒に当主に会うために本邸に足を運んだ。

気分が乗らないが、此れから厄介になるのだから此方から挨拶するのが筋というもの。

会食前の非公式の挨拶だから身内以外の同行は控えとくべきであろう。

「やっと来たわね！とつとと魔王を倒して頂戴！」

本邸にはいる玄関で金髪の少女が俺に命令してきた。脇には青い

髪的女性騎士がいる。

金髪の少女はマイカと同一年ぐらいだろうか。豪華なドレスを着て、ずいぶんと威勢がいい。

女性騎士は二十歳は超えているだろう大人の色気がムンムンする。

二人共、水準以上の美しさだ。

どこかで見えたことがあるが、俺は無視して屋敷内に歩を進める。

「なに無視してんのよ！あたしの命令が聞けないの！」

キンキン五月蠅いので相手をして上げる事にした。隣の騎士が剣を抜こうとしているし。

「お嬢ちゃん誰？」

俺の答えが予想外だったのか、絶句して固まった。

仕方ないので脇を通り抜けて屋敷に入ろうとしたが。

「不敬な！」

青髪の女性騎士が剣を抜いて脅してきたので立ち止まらざるを得なかった。

不敬と言われても本当に覚えて無いんだけど……？

でも、目の前の騎士は見た事があるような？

「わたくしの名はアルテウス・カラスト・ツアルテュース！この国の王女ですわ！」

あつ復活した。もっと固まってくれればいいのに。いっそ気絶してくれ。

「あつそうなんだ。偉いんだねえ。」

生暖かい目で見て上げる。あつ、しまった飴玉が無いや。

どうせ勇者召喚してやったんだから手伝えとか、魔王に特攻しろとか言い出すんだろう？何処まで傲慢なんだろう王侯貴族は？

俺は無理やり連れて来られて実験動物にされたのに、助ける義理があると思っっているのか？第一、こいつの父親は嫌いだ。

俺達が来る前に戦で死んでくれれば良いものを。

「なによ、その態度！召喚して上げたんだから命令を聞きなさいよ！」

言われると分かっけていても力チンと来るものはないな。

落ち着け。落ち着け。相手はガキだ。

「君が勘違いしていることが幾つかある。

一つ、俺は誘拐されて実験動物にされたワケで、この国に恨みがあるなら兎も角、助ける義理は無い。

二つ、王は国民の暮らしを良くするために存在する。キミが女王になっても国民のためになるように思えない。そして、そんな人物を手助けしようとも思わない。

三つ、この国に仕えることになっていたとしても、王が死んで王城が落ちた以上キミの言う通りにする道理はない。」

「うるさいわよ！あんたは黙って命令聞けばいいのよ！」

お姫様の駄々っ子に反応して女騎士が剣を喉元に突きつけてきた。命令を聞かなければ武力に訴える。平和主義者の俺には嫌な脅し

だ。

俺は気付かれないように精神の手で喉を防御すると剣に向かって歩き出した。

当然、剣は俺に刺さらず持ち手に反力を与え、剣に加わる力とその異様さに女騎士が後退る。あとじさ

「殺す気が無いなら剣を抜くなよ。品性が疑われる。」

剣に突かれても向かってくる異様さに飲まれたのか静かになった。

「自分の道をよく考えろよ?」

俺はお姫様を一睨みしてから屋敷の中に入った。

出来れば王家のしがらみから解放されたほうが彼女のためにも良いだろうけど無理だろうな。

アララギ姉妹もお姫様に会釈してから俺の後に続く。

当主に会う前にケチが付いた。

玄関の扉を開けると執事とメイドがズラツと並んで挨拶してきたのは驚いた。

こんな事、漫画の世界だけかと思っていたし、あまりの人数の多さに気後れしてしまった。

サクヤとマイカが平然と歩を進めていくのを見たときは、住んでる世界の格を見せつけられた気分だ。

執務室に向かう一歩一歩に重圧を受ける。

アララギ姉妹をお手つきにしたのだ。その父親にはなるべく会いたくないのが本音である。

姉妹を先頭にして執務室の中に入ると、年齢の金髪の男が出迎えてくれた。

「ただいま戻りました。お父様。」

「ただいま！お父様。」

「おお、良く無事で帰ってきたね。お父さんは嬉しいよ。」

サクヤとマイカの挨拶にナイスミドルはハグして答える。
父親の目が俺に向けられたのを見計らって挨拶した。

「こんにちは。マサキ・スズキです。お会いできて光栄です。」

「ようこそ、マサキくん。私がアララギ家当主のデルハン・スワミン・アララギだ。」

にこやかに差し出された手を握ると思いつきり手を潰されてしまった。

イツテエ〜。

顔は笑顔なのにコメカミの青い血管が怖い。よく見ると俺よりも少し上ぐらいの歳だ。

あ〜そっか〜。当主が俺と同年の可能性があるのか。

自分と近い年齢の娘の夫にお義父さんは言われたくないよなあ。

「はっはっはっは。サクヤの未来の婚約者候補に会えて嬉しいよ。サクヤとマイカもあまり心配させないでおくれ。王城が落ちたとき心臓が止まるかと思ったよ。でも、生きていてよかった。」

ちよっと悪い虫が付いてしまったみたいだけど、スグニタタキツ

「ブシテアゲルカラネ？」

怖い、怖い、目が笑ってないよ。このオッサン。

「お父様？約束は守ってくださいますよね？」

「悪い虫なんていませんよ？お義兄様という素晴らしい方は居ますけど。」

サクヤは前半の微妙な言い回しに気がついたらしい。マイカは気がつかなかつたようだけど、後半の言葉に黒いオーラを出している。姉妹の圧力に不利を悟ったのか話を俺に持つてくる。

「サクヤとマイカのことは後でジックリと話そうではないか。」

「出来ればご遠慮願います。」

俺はにこやかに辞退した。

内心は逃げたい気持ちバリバリ。笑顔が引き攣っているのが自分でもわかる。

誰が好き好んで虎穴に入るものか。

緊張感のある無言の圧力がぶつかっていたが、サクヤが助け舟を出してきた。

「マサキ様のことは全て私が引き受けますわ。」

「お義兄様をイジメると、お父様のこと嫌いになりますよ？」

サクヤの圧力に乗ったマイカの援護射撃にお義父さんもタジタジになる。

大勢が悪くなった当主が話題を変えてきた。

「アルテウス姫が玄関でお会いしたそうだな？」

当主の顔が真剣になったので、俺も居住まいを正した。

「勇者をやれというなら出来ませんよ？それは世界神に禁止されているので。」

訝しげに問い詰めてきたので言葉を進める。

「俺がこの世界に来る前に白い空間で『何もするな』と脅されまして、状況から世界神じゃないかと。」

存在は許されているようですが、歴史の表舞台に出るような行為はご遠慮願います。」

興味深そうに聞いているアララギ姉妹にも釘を刺すように言い切った。

今まで言うか言うまいか迷っていたが、この機会に彼女たちにも教えという振りかかる火の粉を払う役を引き受けてもらおう。どこかのバカが俺を利用しに来ると面倒だ。

「嘘を言っているのでは無いのかね？」

「嘘であって欲しいですね。」

残念ながら本当のことで、俺の首を賭けますよ？」

「いや、済まない。古今無当の話だから疑ってしまった。」

わたしからなんとかお姫様の機嫌を取っておくことにしよう。

ささやかな宴を用意しておいた楽しんでくれたまえ。」

俺達は執務室を追い出されると充てがわれた部屋に向かった。が、
当主が取り成してくれるとはいえ、宴でお姫様の顔を見るのは憂鬱
で気が滅入る。

……胃が痛い時の食事って消化に悪そうだなあ……。

第20話 女学園計画

「マサキくん。キミには女子学園の理事長代理をして貰いたい。」

サクヤとマイカのことでは何か言われるのかと恐る恐る執務室の中に入った俺は、顔に無数の痣を作ったアララギ公爵にお願いされてしまった。

「帝国のマルダーク魔法学園、聖王国のカクサラ神聖学院、そして我が国のミセルダーク学究都市のように、我が領地でも特色のある教育機関を造ろうとおもって女子学園設立を計画したのだが、妻にバレてしまったな。」

どうやら私が生徒にイヤラシイ事をするのだと思われたらしい。覗きや校則をエッチなものにしようと考えてはいないと説明したのだが、信じてくれずこのままだと離婚の危機になりかねん。

そこでだ。キミに理事長代理として働いてもらい、裏で一緒に甘い汁を啜らせて貰おうということなのだよ。」

そんなニコやかに言われても。奥様にボコボコにされた顔が怖いです。

悪事の片棒を担がれそうなことは兎も角、公爵の言っていることはマトモである。

正直、戦いに駆り出されるなら自信のない教職につくのは悪くはない。……胃に穴が開くかもしれないけど。

働くもの食うべからず。とか言って、変な仕事を押し付けられるより遥かにましに思えた。

「質問がありますがいいですか？」

「何だね？」

「何故、代理なのですか？」

「キミと世界神のことを聞いて、メインに立たせるのではなく補佐の仕事をやらせれば良いと気づいてな。表をサクヤにしてもらい、裏で頑張っただよ。」

「無論、キミの世界の知識を使った相談役のような立場も計画している。」

「つまり、コンサルティング業もやれと。でも妥当な判断か……。」

「女子学園の計画はどの程度進んでいるのですか？」

「残念ながら候補地として、さる貴族の別荘を使うことと資金源の確保しか出来ていないのだよ。」

「先の戦いで計画が止まってしまった。だからそれ以外をお願いしたい。」

「はあ。ではサクヤと相談して計画を立てておきます。」

「うむ。頼んだぞ。」

「私たちは既に運命共同体なのだ。くれぐれも悟られぬようにな？」

「何時から仲間になった？」

「俺は奥様が怖いので、悪いけど裏切らせて貰うよ？」

「執務室から出て本宅から別宅に向かう途中で、エルフのミシヤールとハーフェルフのエシヤール姉妹を見かけた。どうやら買出しに向かう途中らしく、メイド姿で裏門に向かっている。」

そういえばこの世界の教育システムはどうなっているのだろうか？
俺の知り合いの中で一番普通の生活を知っていきそうな二人に話を
聞かため、彼女たちを追いかけた。

「買い物しながらで良いから相談に乗ってくれるか？もちろん荷物持ちも手伝うよ？」

「アンタが主人なんだから私たちが嫌なんて言えるわけ無いでしょ
！」

相変わらずのミシャーラのツンデレっぷり。背後でエシャーラが
苦笑しているぞ？

「で？何を聞きたいのよ？」

「この世界の教育に関してなんだが、どんな教育しているのか聞
きたい。」

「そうね。エルフは親が教えているわ。」

人間達の場合は貴族は隣国の学園か私塾、平民は大抵は教会で才
能があつたら学園かな？農村部だと村長や神官が教えているところ
もあるけど……

大抵は勉強よりも仕事になるわね。」

「文字の読み書きはどのくらいできるんだろう？」

「さあ？大抵の人は出来ると思うわよ？」

何でも昔の勇者が、教育の重要性を王様に七日七晩説明したとい
う逸話があるくらいだし。

「国も文字の読み書きは重視しているみたいね。」

意外と識字率が高いらしい。だけど労働関係の事情からその他の教育は低そうだ。

「あの？なぜ教育の話？」

エシャーラが普段は聞かれなような真面目な話に興味を湧いたらしい。

「サクヤのお父さんに新しく造る学園を押し付けられてね。この世界の教育事情はどうなんだろうと気になって。」

「押し付けられて、じゃなわよ！」

あなたは私たちを養う必要があるんだからジャンジャン仕事しなさいー！」

ミシャーラの発破が耳に痛い。同時に俺の奥底に眠る何かが反発を起す。

仕事と聞くとニートの血が騒ぐ……。

仕事……なんて嫌な響きだ……。

墮落だ。墮落するのだ。と心が怨嗟を上げてくる。

仕事なんてしなくて良いじゃないか。彼女たちに養って貰えば。

……ヒモ。なんて素敵な言葉なのだろう。

人生は素晴らしい！！のんびんだらりと生活するのだ！！

俺の暗黒面のフォースの影響を受けたのか。ミシャーラが気味悪そうに離れて、エシャーラが心配して声をかけてきた。

「あの？大丈夫ですか？」

大丈夫じゃない。

現在、この世界に来てから真面目に働いたリバウンドが発生中だ。
ああ、俺は堕ちていくのだ。

やる気も死ぬ気も失った。後はドロドロと溶けていくのみ。

「しっかりしなさいよね！」

ミシャーラが堪え切れずに蹴ってきたが、もはや堕ちた俺には通
用しない。

大丈夫。大丈夫。

これからはゆるく生きていくからねえ？
とりあえずシゴトをしますかああ。

俺の復活を気味悪くしたのか。二人共離れて様子を見ている。
失礼な奴らだなあ。俺はこんなに気分爽快なのに。

「買い物はなんだい？」

出来れば教会によって教科書を見たいんだけど。」

一瞬の間の後、逆ギレされてしまった。

「うるさい！なんだっていいでしょう！」

アンタは黙って荷物を運んでいればいいのよ！！」

二人共顔を赤くしてるし。

なんだろう？女性が顔を赤くして逆ギレするもの？

羞恥するもの？

性に関するもの？

ああ、ツキノモノか。納得した。

俺は空気の読める男。それ以上の詮索はしない。

「とりあえず、一番楽なルートを確認しようか？」

荷物を持ちながら教会に行くのも失礼だということで先に教会に行くことになった。

下町の細い路地を抜けようとしたとき妹のエシャーラが突然立ち止まる。

青い顔で固まっているエシャーラを心配してミシャーラが声を掛けた。

「どうしたの？」

反応がない妹の視線の先を見たミシャーラは、視線の先にいる人物を見て怒りに顔を歪めた。

般若のお面と同じ面つらになったミシャーラは、こちらに気がついて近寄ってくる男にさらに顔を歪めて鬼瓦のように成っている。

エシャーラは対照的に青い顔をさらに青くして、表情のない白い仮面のように立ちすくんでいた。

「やあ、久しぶりだね。エシャーラ。

ミシャーラも元気そうだ。」

軽薄そうな男がエシャーラの前に立つと挨拶してきた。男の俺は目に入っていない様だ。

エシャーラは怖がって姉の後ろに隠れて、ミシャーラが庇うよう

に前に出てくる。

「アンタよくも顔を出せたわね。」

底冷えするようなミシャーラの声。それを前にしてこの男はヘラヘラと笑っている。

俺の一番嫌いなタイプだ。

学校の先生の車を壊して先生に怒られても、自分は悪くないと人事のように反省していないアホな野郎の匂いがプンプンする。殴り倒して生ゴミにしたいけど、ここで喧嘩はマズいな。

「お前」「この子たち俺のものなんだ。手出ししないでくれる?」

男が何かいうのを遮って俺は姉妹を抱き抱えた。

「何言ってるのよ!」

「お前は俺のもの。違う?」

俺が確認するように脅すとエシャーラは文句を言わなくなった。

「ということだから、消えてくれる?」

俺がにこやかに促すと男は舌打ちして立ち去った。

沈黙が支配する中、表通りの騒がしさから逃げるように教会に続く道に入り込んだ。

「彼との関係は?」

俺が問いただすとミシャーラが言いにくそうに口を開いた。

「私たちが冒険者になって初めての時の仲間で、エシャーラの好きな人だったの。」

でも、あいつはエシャーラを無理矢理押し倒そうとして、抵抗すると私たちに薬を盛って奴隷商人に売ったのよ。

それだけじゃないわ。

後からエシャーラに聞いた話だと、あいつは誘拐団の一人でエシヤールはその現場を見てたんですって。

好きになつた弱みで警備隊に通報できなくて逆に売られるなんて馬鹿なんだから……」

姉の優しい声にエシヤールはゴメンなさいとか細く答えた。

妹思いの良い姉だが、彼女の発言には幾つか重要なことが混じっている。

一つは彼がまだ誘拐団の一員かもしれないこと。彼女たちが冒険の舞台とした場所から遠くはなれているが、誘拐団の一員とバテてこちらに逃げてきたのなら筋が通る。

二つめは彼女たちを口封じに動くかもしれないこと。自分の過去を知る者が現れたのだ。彼は何とかして彼女たちの口を封じる手段を考えるだろう。

俺に出来ることはとりあえず公爵側から警備隊に通報するぐらいか。

面倒臭いことに巻き込まれることを感じながら教会に向かった。

第20話 女学園計画（後書き）

公爵の考えでは主人公を現場の指揮官にしても忙しい今の状況では現場が混乱するだけなので、名誉ある仕事で現場に被害がないものとして女学園計画は渡りに船だったりします。

主人公は未来の婚約者候補として花を持たせなければならぬ存在であり、仕事で目の回るほど忙しい時に配属される新人ぐらい厄介な存在です。

第21話 教会

教会に着くとシスターさんが迎えてくれた。

「こんにちは。アララギ公爵のものですが。」

俺が公爵家の名前を出すと顔が少しこわばって緊張したみたいだけど、丁寧に應對してくれた。後ろにいるメイド姿のエルフ姉妹を見て安心半分不審半分の顔をしている。

「今度、公爵領で学園を造る話があるのですが、教会で子供たちに教えていると聞きまして様子をお伺いに来ました。」

別に隠すものでもないのでストレートに聞いてみる。

「聞きたいのは、教会でどの程度まで教えているのか。とか、他の学園に推薦する基準とかですね。できれば教えている様子も見せていただければ嬉しいのですが。」

「そうですね。もうすぐ授業が終わりますから、今のうちに授業を見てもらって、講師をしているミシユラ様とはその後でお話するのがよろしいのではないのでしょうか？」

俺の不躰な申し出にシスターさんが少し考えた後、先生役の人に話を変わると言うことで了承してくれた。

「はい。そちらでお願いします。」

俺はシスターの勧めに従って、教室のある方向に足を進めた。

移動するときにエルフ姉妹の方を振り返ったのだが、彼女たちは俺が礼儀正しく応対しているのに口を開けて驚いていた。まったく失礼な奴らだ。

教室で子供たちが授業を受ける風景はどこに行っても変わらない。そこがコンクリートに囲まれていようと屋根のない青空であろうとも、そして、異世界であろうともだ。

普段は騒がしくて五月蠅いぐらい元気のよい子供たちが、真剣な表情で先生の話に耳を傾けて文字を写している。

それは平和であることの証拠でもある。

俺達はそんな彼らを愛おしげに眺めた後、説明してくれる先生を待つため談話室に通された。

暫らくすると先程授業をしていた壮年の男性が現れた。

「お待たせいたしました。当教会で講師をしているミシユラ・リバーシスです。」

「こんにちは。アララギ公爵にお世話になっているマサキ・スズキと申します。」

男性が対面に座るのを待ってから話を進めた。

「この度、公爵領で学園を造る計画があるのですが、一般の教会でどの程度まで教えていて、他の学園に推薦する基準をどうしているのか調査に参りました。」

「それはご苦労様です。」

当教会で教えていることだと、文字の読み書きと簡単な歴史、魔術と魔法に付いて、算術の足し算、引き算ぐらいですか。

ミセルダークへの推薦は特別優秀なものを推していますね。ですが……」

最後の方で言いにくそうにしたのを引き取った。

「やはり、お金の問題がありますか。」

「そうですね。ミセルダークの方でも奨学金を用意してもらっているのですが、学究都市に行くにも多額なお金がかかりますし……、公爵家の方にも負担して頂いてるのですが、家庭の事情で推薦を取りやめるものも多くあります。」

聞けば聞くほど王国全体の学術レベルが低いことが良く分かる。学究都市があっても一部の恩恵では国が発展しない。

この国に他国が攻め込まないのは長年の魔族との戦いで軍が精強であつたからであろう。

「学園を計画中とのことですが、どのような学園になさるつもりなのでしょう？」

「公爵様は女性専用の学園を計画しております。」

「女性専用ですか？」

「はい。これからの時代、女性も社会進出するべきだと考えられ、その手始めに女性専用の学園を計画しています。」

俺の言葉に男性は感心しているが、実際は思いつきり不純な動機である。

ここは未来のお義父様のためにも株を上げておくとしよう。

今更、本当の計画が一部の特権階級の変態性的欲求を満足させるためだとは言えない。

まっ裏切らせて貰うけどな。……女性たちには勝てんよ。

学園設立時に教師を募集することを示唆して教会を後にした。

それにしても、算術のレベルが低い。掛け算、割り算を教えていないとは思わなかった。

魔術と魔法に付いてはこの世界独特の問題だから仕方ないにしても、もう少し勉強させることは出来ないのかと思う。

案外、貴族あたりが自分より頭が良くなることを恐れて、教育改革の足を引っ張ったのかもしれないな。

「御主人様。」

貴族といえは公爵家として今回の難局をどう乗り切るのだろうか。あのお姫様と門閥貴族は王国が負けることを納得しないだろう。

下手すると王国の人間全員が居なくなるまで戦えと言いかねない。

（本人は後方で喚いているだけ。）

「御主人様。」

うるさいな。現実逃避しているんだからほっといてくれ。

目の前でファッションショーをしているエリエンス改めエリーが短いスカートを翻している。

変装するために美しい銀髪を青色に染め上げた彼女は、温泉村の最後の宴で着ていた黒い首輪と肘まである黒い手甲、腿まである黒いブーツを履いて青いキャミワンピース（キャミソールタイプのワンピース）を着ていた。

キャミワンピースは股下数？の超ミニスカで、ブーツとスカート部の

間の絶対領域が眩しいが、スカートを翻したときに見えた素肌に何処の娼婦かと良識を疑う。

後ろには色違いの同じ服を着たりリディアとルーカサスが俺の褒め言葉を今か今かと待ちわびている。

どうやら今の格好を俺に仕える時の制服にするようだ。

エリーたちは屋敷で最新の服を勧めに来た商人から手に入れ、俺に褒めてもらうために街中まで出てきたらしい。そのまま、屋敷に居てくれればいいものを女の勘と嗅覚で俺の位置を把握したようだ。

ケタモノ
三人の中で一番ストッパーになりそうなルーカサスに、責めるような視線を送っても悶えるだけで話にならない。

犬や猫が獲物を自慢するようで嬉しいことではあるが、自重して欲しい。

ここは下町通りで人の往来は少ないが、彼女たちの扇情的な姿は人目に付く。

フロロ
援護してくれそうな人はいない。

エルフ姉妹はエリーたちが来た途端に逃げ去ってしまった。

買い物之急がなくてはいけない。と言っていたが、嘘が丸分かりである。

街中でこの格好の痴女達と一緒にいるのは恥ずかしいらしい。

どうか仲間に見られたくないのかも知れない。

俺を生贄にしゃがった。

…… ああ、周囲の視線が痛い。

男たちの鼻の伸びきった顔。町娘が顔を顰めて足速あしはやに去り、ちっちゃな子どもが指さして親が嗜める。

三人の容姿は美しく。着ているものは退廃的で扇情的だ。

傍目からどう見てもイケナイ趣味の御主人様と奴隷に見えるだろう。しかも、ここは昼の街中、表通りほどではなくても下町通りは

それなりに人通りがある。周りの人が俺の評価をどう受けるか予想だに難くない。

俺は諦めて彼女達を手早く動かすために感想を言う。

「似合っているよ。でも下着は履いてほしいな。」

俺の苦情に、分かってないな。という顔をしないで欲しい。俺は変態ではないのだ。

下着は線が出てしまうとと言われても常識を持って欲しい。

「では、この服に似合う下着を探すため一緒に下着屋に参りましょう。」

にこやかな顔で暴言を吐かないで貰いたい。俺は女性と一緒に下着選び出来るほど心臓が太くないのだ。

腕を左右から組まれて強制的に連行される中で、どんな下着が好みか煩かったので一言、白。と言っておいた。

男性が一般的に女性に求めるさいの多い色だ。

実際、男性が女性に望む下着の色は白が多いが、女性の勝負下着に選ぶ色が赤、黒、紫が統計的に多い。これは男性が女性に清纯で乱れるところが見たいと思うのに対し、女性は気分を燃え上がらせるために扇情的に見える色を好むためだ。

このことから男女の感覚の違いもとい、一般人と変態の違いを分らせるために色で諭したのだが、不満げな顔をしているこの娘たちには伝わっていないのだろう。

色の話が終わると形や模様の趣味、異世界の下着について聞き出し始めた。

俺は変態じゃないので女性の下着の種類に詳しいはずがない。そ

もそも、街中でする話じゃないではないか。

周りの視線を気にして俺のテンションがダダ下がりである。

彼女たちの躰をどうするべきか考える。

俺がこんこんと常識を説明しても、全てメイドのリリイにぶち壊されるような気がするの俺の気のせいだろうか？

負の思考に陥っていた時に、遠くから彼女がやってきたのは救いの女神だと思った。

例え、その顔が青ざめて息を切らせながら走ってきてても、この三人から開放してくれる彼女を俺には天使に思えたのだ。

「大変にゃあ！アリスが攫われたにゃ！」

猫耳メイドのミニアのお告げは天上から奈落に突き落とすものであった。

第22話 誘拐

猫耳メイドのミニアの神託を受け、急いでアララギ公爵別邸に帰ってきた。

別邸についた俺は残っていたノルシュルに説明を求めた。

どうやらアリスアインを無理矢理攫っていったのは王女様らしい。事態は既にメイドがサクヤと公爵に報告しに行ったそうだ。

俺は攫ったのが王女だと聞いて少し安堵した。

王女ならば余程のことがない限り殺しはしないだろうと考えたからだ。

だが、アリスアインを直ぐに救出する用意はしておかなくてはならない。

まさかこんなに早く、首飾りの迷子探し機能が役立つ日が来るとは思わなかった。

首飾りの反応を見るとキチンと反応していることが分かる。

俺は少女たちに戦闘の準備をさせると公爵の元に向かった。

公爵も王女の行動に驚いているらしく、人を使って王女に確認しようとしているのだが、肝心の王女様が雲隠れしてしまったらしい。

今回の騒動には公爵が関わっていないことが分かった。だが、誰かしら関わっているとみるのがベストだろう。

アララギ公爵の本家は関わっていなくても分家はどうかだろう？もしかしたら他の貴族かもしれない。どちらにしる王族を立てないことには代わりないから面倒なことだ。

公爵家としてはお姫様の処遇をどうするつもりなんだろう？確認する必要があるな。

「公爵。公爵家としては今後どうなさるおつもりですか？」

「ふむ？……むう、今後の予定としては、国を立ち上げ公国を名乗ることを目指している……のだが上手く行ってないな。」

国王が崩御なされた後に魔王の使者が来てな。魔王の挑戦逼屈しのきでどちらが国を反映させるか賭けをすることになった。

私としては国民として益の出る方を選択した訳だ。

前の王都奪還やぶせ作戦もあちらと話を合わせて進行を早め、世間に言い訳が立つくらいの損害ですませたりもした。

だが、未だ獅子身中の虫を飼っている状態なので芳しくない状態だ。」

随分と危ない橋を渡っているな。他の貴族や国民に知れたら総スカンを食らうぞ？

「私としては打てる手がない状況だな。」

出来れば王都の向こうの門閥貴族共にくれてやりたい。私の領地で死なれると魔族のせいするしかないから困ったことになる。高いもんばつか食べるな。我俣言うな。が、本音というところか。」

貴族として王家をないがしろに出来ないから、頭の痛い存在だけど切っても切れない存在というところか。まるで金魚のフンだな。

このままグダグダとおっさんの顔を見ているも仕方がない。とりあえず思いついたことで押し通すか。

「誘拐した者達の中に、止事無きお方が含まれても逮捕はせねばなりませんよね？」

「事実なら犯罪だからな。」

俺の考えに遺憾ながらという神妙な顔をして答える。

よし、大義名分いじわけは手に入れた。

サクヤがいないので聞いてみると、俺の元へ向かった。と言うから入れ違いになったようだ。

俺は執務室を出て別館に向かいサクヤ達を待っておくことにした。

別館に戻り襲撃の準備をしていると鎧姿のサクヤとマイカがきた。どうやら他の少女たちが戦闘準備をしているのを見て、慌てて自分の部屋に戻って準備してきたらしい。

マイカが心配そうな顔で俺に質問してきた。

「お義兄様？アリスアインの居場所は分かったのでしょうか？」

よくぞ言ってくれた。こんな時こそ言いたかった言葉があるのだよ。

「ふっふっふっふっふ。」

こんな事もあるっかと！

こんな事もあるっかと！

こんな事もあるっかと！……！！

君たち上げた首飾りには居場所がわかる魔法が掛けられているのだよ！」

……。

……反応が薄い。

もしかして、スベった？

チラリと見てみると呆れて物が言えないという雰囲気。
徐々に不穏な空気が少女たちから流れてくるのが解る。
き、気にせず流そう。

「じゃ、じゃあ準備が整ったところで出発するといたしますか。」

「正樹様。他にもカクシテイルコトハアルノデスカ？」

さ、サクヤさん？にこやかなのにコワイヨ？

他の皆様も落ち着いてください。

俺の味方しそうなのは無し。

だけど負けない！

このために頑張って開発したのだから俺の夢を崩させてたまるか
！！

「もちろんだとも！」

満面の笑みで胸を張って答えた。

……地雷を踏み抜いた手応えあり！

「後でOHANASHIがあります。」

「HAHAHAHAHA。アリスアインを迎え終わったらねえ。」

俺は爽やかな笑顔で逃げ出した。

未来は振り返らない！だって怖いから！

アリスアインが囚われていると思われる屋敷の前にやってきた。

少女たちが後ろで待機している。

先程ので呆れて付いてこなかったらどうしよかとドキドキしていたが、まだ見捨てられていないようですごくく安心した。

みんな真剣な表情で俺の顔を見て指示を待ってる。

「ミニア、ミシャーラ、エシャーラ。」

裏に回って逃げ出す者がいないか見張つといて。」

身の軽い猫耳ミニア、冒険者をやったこともあるエルフのミシャーラとハーフエルフのエシャーラ姉妹。彼女達なら不測の事態にも対処が出来るだろう。

「縄蛇^{なわへび}、起きろ。」

俺は持つてきた30m程の細いロープに声を掛けた。

ロープは生きているかのように先端を鎌首もたげる。

これは特務隊を育成していた温泉村から譲り受けた、細くて頑丈なロープに使役の魔法回路を刻んだ魔法生物である。つまり、俺が魔法回路を刻んで魔法の品物を作ろうとすると魔法生物になつてしまう性質を利用したものだ。

「今、この屋敷の中にいる人間を捕縛しろ。」

俺の命令を聞くやいなや纏まっていた身を解きほぐして、蛇のように蛇行しながら屋敷の隙間に消えていった。

その様子を見守つた後、俺は精神の手を薄く、そして霧状になるように屋敷に伸ばす。

霧状になつた精神の手は素粒子レベルで屋敷に同化して、俺の手元に作られた屋敷の模型図と同期する。

この能力にまだ名前は無い。未完成であるし、うまい名前が思いつかないからだ。

だが、能力としては素晴らしいものがあると思う。

まず、素粒子レベルで精神の手に侵された品物を俺の手元にある端末に表示する。

手元に作られた端末内の品物と実際の品物は同期するから、端末内の品物を変化させれば実際の品物も変化する。

実際の品物を端末内の品物で観察することも可能で、倍率は任意で制限がないし透かしてみることにも可能。

未完成なのは、計算機が無いので品物加工時に計算された加工が出来ないこと。

移動、複写機能は作ったがレイヤーや便利と思われる機能ができていない。

生物と魔法の品物へは精神の手が及ばないので表示されないことである。

まだまだ、使いやすいとは言えないため、仮名として『(ベータ)』としているだけ。

今後、色々使い勝手が良さそうなので後々に完成させたい。

屋敷内部の様子を確認すると広間に九人ほど集まり、厨房に一人、廊下を移動しているのが一人、奥の部屋に三人、二階には誰もいない。

どうやら夜中だからなのか自分達の立場が解っていないのか、見張りが立っていない様である。

人数をサクヤたちに伝えると俺は広間の床の結合レベルを砂状にして、一秒も立たないうちに元に戻す。

即席トラップはキッチンと発動したようで、屋敷の方で悲鳴が上がった。

俺達は混乱に乗じて屋敷に突入した。

第23話 お仕置き

屋敷内に入ると広間があり、広間にいる全員の体が腰まで床に埋まっている。

……アリスアインも埋まっているけどよしとしよう。

広間にいる人の内訳はアリスアインにお姫様、青髪の女騎士に中年貴族、魔導師ルツクのメガネ女性と兵士四人だ。

みんな抜けだそうと必死になっただけとお姫様と貴族の罵詈雑言が五月蠅い！

奥から三人の兵士がやって来たのでリリディアとルーカサス、エリーに奥に行かせて対処する。

奥の三人兵士が剣を構えて牽制を行っていると、突然、後ろから縄に襲いかかられていた。

どうやら縄蛇が到着したらしい。

全部が終わる前に出番があったことにホッとす。このまま出番なしだと出し損だ。

奥の三人兵士は縄蛇と変態三人組に任せてアリスアインを救出することにした。

『』を使って彼女の周り5cmを砂状にして引っ張り上げる。

「大丈夫か？」

「…はい。ありがとうございます。ご主人様。」

俺が頭をナデナデしてあげると俺の腹に顔を埋めてしまった。

「あなたがアリスアインのご主人様？
召喚実験で喚び出されたって本当？」

近くにいたメガネの女魔導師が声をかけてきた。
腰まで床に埋まって苦しそのだが、俺はメガネフェチではないの
で助けようとも思わん。

「そうだけど？あんたは？」

「あたしはミスリユイ。邪神の研究者よ。
召喚術を嚙ってるからって連れてこられたの。
お願いだから助けてくれない。」

「気が向いたらね。」

ミスリユイの懇願を袖に振り、アリスアインを離してお姫様のも
とに向かう。

後ろでギヤアギヤア言ってるが知ったことが。

「さて、俺は言ったよな？自分の道はよく考えろと。」

「なによ！アンタじゃなく作り物に命令したんだから文句無いでし
よ！」

俺が優しく諭しているのに、お姫様がギャンギャン噛み付いてき
た。

床にハマっている姿は間抜けだが、悪びれもしない姿はムカツイ
てくると同時に呆れてくる。

「チョツと二階でOHANASHIしようか？」

「ちよつと！何するのよ！」

「貴様！姫様に何をする！」

アリスアインと同じように床から助け出してお姫様を抱えると、本人と隣の女騎士から抗議の声が上がった。

お姫様が暴れるが、主人公補正された力の前にはビクともしない。

「お姫様にお仕置きしてあげるだけだ。

それともここですか？他の男共に姫様の可愛いお尻を見せることになるけど。」

「きつさま〜」

女騎士は怒髪天を突いて、お姫様は絶句して動かなくなった。

ちよつどいい。暴れないうちに二階に行こう。

俺はサクヤに目配せして後を任せると二階に向かった。

二回の手近な部屋に入るとお姫様を離した。

お姫様は急いで部屋の隅に駆けていく。

お、お、嫌われたものだね。まあ好かれないとも思わんが。

「とりあえず、謝る事はしないのかい？」

「誰があんたなんか謝んなきゃならないのよ！」

とりあえず反省なし、と。

「じゃあ謝るまでO・SHI・O・KIしなくちゃいけないな。」

俺はすばやくお姫様を捕まえると脇に抱えてスカートをまくり、パンツを下ろした。

「謝るなら今のうちだぞ？」

「謝るもんですか！」

俺は白いお尻を一撫でしてから手を打ち付けた。

パンツと小気味よい音が部屋に響く。

「謝る気になったかい？」

無言の答えが返ってきた。

仕方がない。謝るまで続けるか。

次第にお姫様の息が荒くなって、叩く度に身体をビクつかせても謝る気配がなかった。

お姫様の腿に垂れているのは汗だと思いたい。

まさか叩かれて感じる趣味の人じゃないよな？

いい加減飽きて離してやると身体を崩して床に倒れこんだ。

顔は真っ赤にして虚ろな目で表情に女を感じさせる艶を出している。

「謝りなさい。」

「……お……お願い……もっと……して……」

「謝るんだ。」

「……もっと……もっと……して……」

どう見てもあつちに飛んでしまっただ分戻ってきそうに無い。
何でこう俺の周りには変態が多いのか。

嘆いていても始まらない。

正直、彼女の意識がない時点で俺の負けである。だが、ここで終えては色々とまずい。

俺は禁じ手を使うしかなかった。

精神の手で彼女を包み込む。

俺が始めに付与魔術の一種だと勘違いして、サクヤとマイカ、ア
リスアインの精神をおかしくさせて俺に依存させた方法である。

『』のときに人と魔法道具には精神の手が及ばないと説明したが、あくまで周囲に影響を与えないレベルで精神の手を薄く使用した
場合である。

最初にサクヤ達に使用した付与魔術もどきの方法は原液に浸した
状態で、『』は数万倍にも希釈して汚染している状態だ。

原液に浸した状態のほうが効き目が強いように思われるが、原液
を拭いた後は侵された部分の治療と本人のもつ魔力抵抗で元の状態
に戻ることが可能だ。しかしながら、汚染したほうだと魔力抵抗も
侵されるので元の状態に戻るの是非常に難しい。

『』での精神の手の濃度が上がれば普通の人間の魔力抵抗や魔
法道具に残留する魔力など薄まってしまい、魔法道具なら生命が宿

り、人間なら眷属になってしまっだろう。

今回お姫様に使用したのは付与魔術もどきである。

『 を使うか悩んだのだが眷属になってしまっっては元に戻せないし、いきなり俺をご主人様と呼ぶようではあまりにも不審だ。』

今回は俺に好意を持ったことにして言うことを聞かせることにする。

恋は盲目という言葉もあることだし、何とかなるだろう。

俺を見つめていつまでも惚けているので声を掛けて正気に戻すことにした。

「おい。聞こえているか？」

頬をペシペシと叩くとウツトリした表情で身をクネられてしまった。

……かなり重症のようだ。

「聞こえていたら返事をしてくれ。」

俺の言葉は届いているようで「応肯いて、」「はい。」「という小さい返答も貰えた。

返事は出来るようだ。

……俺の言葉が脳内に留まっているかどうかは知らないが、聞きとどめてくれることを期待しよう。

「君は父親を殺されてお城から追い出された。だから復讐したい。これで合ってるね？」

優しくゆつくりと言葉を並べるとお姫様は肯いた。

「だけど、君が声を張り上げて行動すると迷惑に感じる人がいるんだ。

俺も迷惑に感じている。」

諭してあげるとお姫様は悲しそうに顔を歪める。

「だから、せめて俺に相談してから行動してほしい。それだったら出来るよね？」

子供をあやす様にささやいた言葉にお姫様は肯いた。

「じゃあパンツを穿いて下に降りようか。」

脹脛まで降りてしまった下着を直すように言うと、慌ててパンツを穿きなおす。

どうやら俺の言葉はキチンと聞こえていたようだ。安心してホッとする。

俺は惚けたまま見ているお姫様を連れて一階に下りた。

「姫様！」

青髪の女騎士が床に生えたまま叫んでる。

……すっかり忘れてた。彼らを助けなきゃいけないんだっけ。

面倒くさいな。

一階でお姫様に罰を与えたことですからすっかり終わった気になって
いた俺は、げんなりとして床に生えている連中を見渡した。

第23話 お仕置き(後書き)

2010/11/8 修正 プロローグから第22話まで

加筆 第5話宿屋 第7話告白 エロ成分を追加

文書一部変更 第17話戻るべき日常

第24話 説教（前書き）

遅れて申し訳ありません。1ヶ月ぶりの更新です。

第24話 説教

……わたくし、縛られてしまいました。

アリスアインを救出し、関係者をふん縛ってアララギ公爵に押し付けた後、借り宿の別邸で休もうと足を踏み入れた。待っていたのはサクヤ達による縄の拘束。

ちよつ俺、そんな趣味無いんだけど！

なんか俺の扱い酷くなってるない？！

状況についていけず、部屋に通されてビクビクしながら突っ立っていたら、リリディアに「お座りください。」と声を掛けられた。

さすがリリディア、気が利くと思いい、迷わず腰を掛けるとなんか生暖かい感触。

なんと、座ったものは四つん這いで全裸になったルーカサス。驚いて飛びのこうとしても後ろから元姫のエリーが抱きついて強制的に座らされてしまった。

逃げ出そうとしても両脇にミシャーラとノルシュルがガッチリ固めて離してくれない。

……せめてもう少し胸があれば腕が包まれて気持ち良いものを、なぜ絶壁コンビ？

代わりにエリーの生乳が後頭部に当たって気持ち良かったけど、ルーカサスが苦しそうに呻いたから哀想（気味悪い）なので空気椅子の負担を軽くしてやる。

エシャーラとアリスアインが足元にやってきて俺の脚を掴んできた。

チヨツとエシャーラさん？アリスアインさん？足元で何してますか？

……マッサージですか。

空気椅子をしているところに足のマッサージは地獄なんですけど。

俺の周りを囲っているルーカサス以外の女性陣が怒張の空気を流していく。

マッサージを受けながらも緊迫した雰囲気を感じて気を引き締めるが中々本題に入ってこない。

あゝきついでそろそろ始めてもらえませんか？

俺の紳士な眼差しに目の前の黒髪サクヤの夜叉が重い口を開いた。

「さあ、OHANASHIしましょうか？」

えゝと、何をお話すれば良いんでしょうか？

首飾りの機能のことかな？

あれは『対物』 『対魔法』 『耐熱』 『耐冷』 『耐雷』 『耐圧』 の
防御魔法回路と、クリムゾン・フレターナル・コフィン 『紅炎』 『絶対凍結』 『物質分解』 『隕石落とし』
の攻撃魔法回路、 『盾』 『身体強化』 『加速』 『浮遊』 『飛翔』 『
水中呼吸』 『治癒』 『幻影』 『位置発信』 『位置受信』 『固定化』
の魔法回路を込めてあり、俺の精神の手が通り抜ける門を付けてあ
る代物だ。

魔法回路は『』で刻んだものを製作途中で回路の一部の精神の
手を抜き、完成後、精神の手を抜ききったもので、魔法生物にはな
らないで他人の魔力で魔法が発動を確認した。

色々便利機能がついているが、今回みたいに何も知らなければ裏

面の紋様が異様に細かいただの首飾りである。

他にはサクヤ達三人娘の付与魔術もどきの効果が、とっくに解けていることだろうか？

俺達がまだ温泉の村に居た時、失敗した魔法具を処分するために俺の魔力を抜き取ることを覚えた。

調子に乗った俺は出力を上げて村中の俺の魔力を吸い取り。結果、今まで作った魔法具をガラクタに変えるという犠牲を払って、彼女達の呪いは解かれた。

サクヤ達は精神の手で侵された状態だったので、魔力を吸い取った後は本人の気の持ちよう次第で回復する。

ハッキリいって魅了にかかっている状態は精神を弄る行為なので禁忌指定だし、本人の気の変わりようで治せるぐらいなので俺もあえて手を出そうとは思わない。(それでもタバコをやめるぐらいの決意は必要である。)

病原菌が取り除かれて本人の体力次第というところだ。

リリディア達七人は残念ながら解けなかった。

『隷従の首輪』の魔力が邪魔して俺の魔力が吸い取れなかったのである。

コーヒーにミルクを入れたように混ぜり合って、もはや別のものになってしまい反応すらしなかったのには絶望感が襲った。

『隷従の首輪』の残骸を解析しても魔力の質は判らず、また同じ対比で混ぜないと反応しなさそうだったので考えついた末に『』
『』ができた。

『』ならば素粒子レベルで精神の手だけを抜き取れるので、後は『隷従の首輪』本来の魔力をどうにかすれば大丈夫なはずである。手としては魔力消去の場所または魔法を使用しながら『』を使

用する。

問題点は魔力消去が強すぎると、『』が消えてしまつし、『』が強すぎると対象が汚染されてしまつ。

普通の物体には『』を抜いた後も影響が無いので、アリスアインの連れてかれた屋敷は『』を抜いてあるが、人の精神は汚染されたが最後、精神の手と相手の精神が混ざり合つて二度と戻せないと考えたほうがいい。

実験するにしてもリスクが大きすぎて二の足を踏んでいる状態である。

……ちなみにサクヤ達に今まで言わなかった理由は、云う機会を逸しただけで、そのままズルズルと云えない日々が続いたのである。

「ナニヲオハナシスレバイイノデシヨウカ。」

俺が恐る恐る尋ねると周囲の憤怒が増した。

「とぼけても無駄よ。アルテウス姫と二階で何があつたの?!」

あゝそつちですか。

話して無実を訴えるのは簡単だけど、高貴な人がお尻ペンペンされてイッてしまったなんて醜聞だろう。お姫様の名誉のために誤魔化しておくのが良いのかもしれないけど……周りの圧力に俺の心が砕けそうです。

こんな圧力の中で黙つてられるのは超天然かDMぐらいだろう。俺には耐えられそうにない。

「二階でお仕置きして自分の立場を解つて貰いました。」

少しぼかして言い訳してみました。

「嘘。」

女性は感情的な生き物だから解ってもらえるとは思っていないかったけど、一言で否定されると悲しい。

ここは戦術の基本どつりに目の前の般若達のリーダーを落とす！サクヤに甘い声で囁く。

「俺が信じられないのかい？」

見つめ合つて誠意を見せる。

俺の予想どつりにサクヤの目に揺らぎが現われた。

俺の心は歓喜に包まれた。彼女を制すればこの危機から脱するこ
とが出来るかもしれないからだ。

だが甘かった。

これが寝物語の睦事なら旨くいくかもしれないけど、残念ながら
縄に縛られて空気椅子をさせられている状態、周囲の憎悪の圧力が
増すだけだった。

「お義兄様？ごまかそうとしても無駄ですよ？」

しまった。普段温厚なマイカまで怒つてらっしゃる。

えっ？何でズボンに手を掛けるの？

うおっやめてっ！脱がさないで！

空気椅子状態が仇となつて簡単にパンツごと脱がされてしまいま
した。

余りの衝撃に腰を落としてしまい、生尻が下で椅子になっている
ルーカサスあたって歓喜の叫びを上げていたが虚脱状態の俺の耳に
は届かなかった。

……もうお嬢さんにいけない！

……

……

……しばらくお待ちください。

……

……

「では、本当にアルテウス姫と関係を持たなかったのね？」

俺は全裸で泣きながら肯いた。

心が折れて何回真実を口にしようかと思ったか、命令して止めて貰おうかと思ったことも数知れない。

だが俺は勝ち取った。

何度搾り取られようとも生き残ったのだ。

「じゃあ敵に回る可能性があるわね。対策を練る必要があるわ。」

「それは無いんじゃないかな？お尻ペンペンしてイッてる時に精神の手で依存させるようにしたから。」

……あつ、まずい！

なんで？いままで我慢できたのに？思ったことを言ったの？

俺は疑問を見つけるため部屋をすばやく見回した。

ミニアが薬瓶をもってニヤニヤ笑っている。

クスリ？

思っていることを言わせる？

自白剤？

いつの間にそんなものを！いやここはこの状況を何とかするのが先だ。

「ソウデスカ。デハアンシンデスネ。」

「とりあえず相手の出方を待つとしようか。さて風呂に行ってくるよ。」

ここは流す。全力で流す。サクヤ達の後ろに再び黒いオーラが見えても関わりの無いようにしなければならぬ。じゃないと死ぬ。

俺は急いで服をかき集めると風呂場に直行した。

その後、なぜか追ってが掛からず平穩に食事と睡眠が出来た。

女は何考えているかわかんね〜よ〜

翌日の昼過ぎ、再びアララギ公爵に呼び出された。

「今回の事件はゲルンフが唆して勇者召喚をするつもりだったようだ。現在裏を取るために尋問中だ。」

ゲルンフとはアリスアインを誘拐した屋敷にいた貴族らしい男で、アララギ家の分家の次男坊で英雄志願願望の強い男だそうだ。彼に

は幾人かの貴族や商人のお友達がいて彼らとの繋がりも調べるそう
だ。

彼ら貴族の問題は公爵に任せて俺は深く突っ込まなかった。

貴族の絡まりあつたしがらみなど精神衛生上良くないものだし、
時間と頭を使うものは好きではない。避けられるものは避けるべき
である。

「お姫様があれから大人しいそうだが何かしたのかね？」

「あゝ、キチンと分かってくれるまで叱りました。

今まできちんと叱る人が居なかった為に精神的ダメージが大きく
て虚脱状態になっているのでしよう。」

「二階で二人きりになったと聞いたが？」

「まさか、みんなのいる前でお姫様を叱る訳にいかないでしょう？
俺はそこまで世間知らずじゃありません。」

お尻ペンペンした後の様子だと、喜びそつで罰になりそうに無い
しね。

「魔法やクスリを使って心を縛ったり、手を付けたわけではあるま
いな？」

「使つてませんよ？それに俺は現状に満足してます。」

公爵の眉がピクリと動いたが、これはサクヤと肉体関係にあるこ
とを脳裏に過ぎらせたからであろう。

精神の手は厳密には魔法では無いので嘘はついてない。

問題は発情してサクヤ達の様に迫ってきた場合だが、お姫様には悪いけど婚前交渉を迫られてもお断りするしかない。

これ以上増えられたら絞られすぎて腹上死する自信がある。

「何かあったらお姫様本人から言ってくるでしょう。それまで静観していてもいいんじゃないですか？」

「ふむ、……見張りを付けるだけにしておくか。

誘拐事件のほうはこちらで処理しておくから女学園計画のほうを頼んだよ。」

最後にニコニコと計画について仕事しろと釘を刺されてから執務室を追い出された。

計画を進めるにはサクヤの力がある。

昨日の今日でサクヤが協力してくれるかどうか。

自然と深いため息が漏れる。

サクヤのご機嫌取りは何がいいのかなあ？

第24話 説教（後書き）

上級魔法を魔力の足りないものが使用すると魔法は発動せずに精神が衰弱して倒れてしまい、下手すると死んでしまいます。
首輪に使われている攻撃魔法回路は完全にネタ魔法です。

第25話 事務仕事

学園設立のために作られた臨時執務室は紙で埋まっている。

多くは教育関係への布告文書と商人や貴族達への挨拶文なのだが、新しい教育機関の設立とその認知されてスムーズに移行させるとなると量がすごいことになってくる。

通常は大人数を使うか徹夜の廃人になっての作業になるのだが、俺の『』による複製作業のおかげで、大部分が宛名書きの作業だけですんでいるのは幸運なことだ。

便利この上ない『』だが、どこから聞き及んだのか、公爵が進めている建国の書類の複製の仕事まで回ってくる始末で、そのうち一家に一台の機械として飼われることになるかもしれない。

この部屋にいる人数は俺の他に四人。

責任者のサクヤに礼儀を知る元皇女のエリー、凄く有能であったらしい元騎士のルーカサス、雑務として気が回るリリディアである。なんか部屋のHENTAI率が上がっているような気がするが気のせいにしておこう。

マイカは家庭教師に子牛のごとく連れて行かれお勉強中、アリスアインとノルシュルは二人で屋敷のあった場所について図書館で調べものをしている。ミアとミシャーラ、エシャーラは町のうわさを聞きに行っている。

そういえばこの前出会った誘拐団の男が再びエシャーラに近寄つたらしいが、一緒にいたミアの活躍で誘拐団ごと検挙。数ある罪状の中にアリスアインの誘拐も擦り付けられたらしい。そのため謹慎の解かれたアルテウス王女と青髪の女騎士が遊秋波を送ってきたびに来ていたのだ

が、この忙しい中かまってられないので、年齢がマイカと同じことを理由にマイカと一緒に勉学に励んで貰うことにした。

元の世界ではパソコンが計算機があれば楽な計算書類も、こちらの世界では苦行の一つで、プリンになりそうな脳みそと腱鞘炎になりそうな腕をサクヤ達は必死で動かしている。

速く、正確に、間違えないように真剣な表情で手を動かしている様子は、まるで戦場の交戦中の雰囲気似ている。

部屋の空気がピリピリし過ぎて普通のものなら手伝わなければいけないという強迫観念に囚われてしまうであろう。しかしながら俺のスキルは彼女達の怨念を受け流し、リラックスしながら仕事を暇つぶしにこなしている。

空気読めない置き物とか怨まれそうだが、若者を鍛え上げるためには自分から仕事をしてはいけないのだ。(仕事をするのが面度くさい。)

まあ、さすがに罪悪感があるので、『』を使って出来上がった書類の文字を統一清書化、必要な枚数にコピーするという雑用業務をのんびりと引き受け、たまに書き損じの要らなくなった書類のインクを『』で落として、書類のリサイクルをしていたりする。

リサイクル作業は要らない業務に見えるが余分な紙を買わないので紙の節約になったり、部屋に散らばる紙くずを無くして部屋を綺麗にしたりする実は結構重要な作業だったりする。

だらだらと仕事をこなしながらミア達がいくつか気になる情報を拾ってきたので整理しておく。

一つは王都の様子で、魔族と人間の軋轢はあるものの王都に残った善良な騎士達の活躍で比較的安全らしい。魔族が規則正しすぎて何考えてるか解らなくて怖いような話を聞くという。

二つめはツアルテユース王国全体のことです。王都の向こう側で門閥貴族達が団結しているらしいということと、辺境の方では群雄割拠の戦乱になりそうな気配があるらしい。

三つめは王都近くの山にある聖剣の話だ。

魔族が王城を襲撃した頃に現れたその剣は、石で出来ていて重くて誰も持てないらしく、剣を抜くと魔王を倒せるらしい。

……そういえば王都を脱出したときに作った失敗作の剣はどうなつたのだろうか？

四つめは学園にする予定の貴族の別荘に不審な点があるということものである。

貴族が別荘を作ったときはサクヤ達のお爺さんが召喚される前のことで、その当時魔族が激化している戦場の地に何で軍閥で無い貴族があんなところに別荘を作ったのか謎であつたらしい。

気になる話なため、ミア達には貴族の別荘についての詳しい情報とアリスアイン達には図書館でその場所についての記述が無いか引き続き調べて貰うことにする。

図書館のほうは情報を残しているとも思えないけれども念のため。

つい先日、学園理念とその講義内容について会議を行った。

前者は学園の基本方針として後者はこれから雇う教師を決める重要なものだ。

「これから学園についての概要を説明する。」

食堂を利用した会議室に俺の声が響く。

既に各自の手元には原文を『』でコピーした紙が配られている。息継ぎ兼確認のため見渡すとマイカが手を挙げた。

「何で王女様までいるのですか？」

マイカの言葉にアルテウス王女とその横にいる付き人の青髪の騎士に目を向けた。

そう、この場にはいつものメンバープラス公爵付の文官とメイドのリリー、そしてなぜか押しかけてこちらを熱い眼差しで見つめる王女様＋1名が俺のすぐそばを陣取っている。

彼女が頬を染めてウツトリとこちらを眺めている様子から、この場に学園の概要についての説明を聞きに来たわけではないことがわかる。

「見学だそうだ。」

俺は一言で切り捨てた。

変なことを言って会議が長くなるわけにはいかない。

「では、学園の概要だが、

強く、賢く、美しくを理念とし、

講義内容は単位制で基本以外は学識、兵術、貴学のいずれかを極めれば卒業できる。

学識は学者として、兵術は戦士として、貴学は女官としての授業を受けてもらう。

自信のある授業は月初めの日にテストを受けて合格すれば単位が

貰え、その授業が空いた時間は別な授業を受けられる。

したがって、学識と兵術、兵術と貴学、貴学と学識を極めれば、それぞれ武官、騎士、文官として認定される。

全部極めれば姫という称号を貰えるようにする。

その他にも特別授業を用意しており、特殊なことも教えられるようにする。」

王口親父

公爵達への対策として水泳も基本授業に盛り込んである。

各自が講義内容を確認をすると疑問の声が上がった。

「家庭と園芸が基礎課程に入っているのですが？」

「貴族のお嬢様達に農民の大切さを知るためであり、実際に体験をして貰うための授業だ。」

私の世界にこんなことを云った人がいるとされる。

「パンが無ければ、お菓子を食えばいいじゃん。」と、「」

「そのどこがいけないんですの？」

俺の言葉に王女様はその言葉のどこがいけないのか聞いてきた。首を傾げて俺の言いたいことが解っていない人がちらほらいる。思わず溜息が出る。

俺の言い方が悪かったのだろうか？

「パンの原料は小麦で、菓子の原料も大抵は小麦が使われている。

小麦が無いのに菓子をどうやって作るんだい？

小麦が無いぐらい食料が不足している状況で、その他の食べ物があるという想像力の無さをカバーするためにも下々の生活を体験し

て知識を身に付けて貰う。」

俺の強弁に全員が肯いたのを尻目に次の質問を受け付けた。

後で聞くと貴族の女性の中には材料について何も知らないという方が大勢いるそうだから、彼女達の空想話を総合するとパンが川で捕れることになりそうで怖い。

この後の質問大会で教師の数をどうするのかとか、特殊科目の講師の給料をどうするだとか、認定の証はどうするだとか、細かいことをゴチャゴチャと突っ込まれたが、それをみんなで考えて詰めていく。とお願ひしておいた。

何かと遊びに来る王女様をうっちゃって仕事を公爵の予想よりもハイペースでこなしていく。

学園となる元貴族の別荘の下見の日が近づくにつれてサクヤとマイカの機嫌が悪くなっていく。

理由は簡単、今回、彼女達だけが下見に付いて行けないからだ。

サクヤは責任者としての事務仕事があり、マイカはサボっていた授業を受けるためだ。

サクヤとマイカには悪いが、王女様をあやす為の人身御供となつて貰おう。

第25話 事務仕事（後書き）

ここまで名前の出てこなかった王女様付の青髪の女性騎士。
彼女にはティアスルム・クレイハートという立派な名前が、アリス
アインと同時期の初期の頃からあります。
彼女が名前で呼ばれる日が来るのでしょうか？

第26話 改装前

女学園に改装する屋敷の村まで二日間の日程。

旅ですれ違った人達はさぞかし奇妙な表情を浮かべていたであろう。

まず、馬車の業者と後ろで見張っているのが女性で男がいる様子が見られないこと、そして段差が無い場所なのに妙にギシギシと揺れていることだ。

公爵家から出た後、一時間もしないうちに俺は襲われた。

原因はサクヤがいないことによるストッパーがいないこと。

彼女達の頂点に位置していたサクヤが今回いなくなったのをいいことに普段抑えられていた欲望が暴走したのだ。

業者と見張り役を残して遮音魔法を掛けて欲望のままに腰を振る。もはや俺の意思など関係が無い。ただケダモノたちの性欲を解消するためだけの二日間であった。

俺が村にたどり着いたとき、これで仕事に逃げられると涙したものだ。

村は極一般的な貧困の村で閉鎖的であった。

村人は俺達が到着すると、家に隠れてしまい息を潜めてこちらを観察してくる。

村長は値踏みようにこちらを窺ってきた。

前の貴族の影響がある村なのだろう。よそ者に異様に排他的だ。前の屋敷の主は村人を統率して周囲への警備兵代わりしていたらしい。

彼らの主人が居なくなつて戸惑いもあるし、昔からの習慣をすぐ

に変えられることは出来ないだろうから、彼らの意識を変えるには長い時間が必要だ。

俺達は村人達の配慮配慮を考えて村長の家に泊まるのではなく屋敷に泊まることにした。

「うっわあゝ幽霊屋敷というより遺跡だな、こりゃ」

屋敷にたどり着いたときの第一声がこれである。

この地方特有の砦型小さなお城の屋敷は見るものに威圧感を与える。

屋敷の周囲を飾っていた木々は屋敷を隠す森と化していて、屋敷を見つけるのに手間取った。

最初に建てられてから一度も改築した様子の無い屋敷は、もはや古代の遺跡であった。

一通り外観を観察し終えた俺達は手分けして作業に移ることにした。

屋敷の清掃・修理・改築を後回しにして探索から入ることにする。

内部探索班に、盗賊としての経験があるミニアと考古学に興味心身のノルシュル、幽霊が怖いのに意地っ張りな元騎士ルーカサス。

外部探索班に勝気エルフのミシャーラと意外としっかり者の妹のハーフエルフのエシャーラ。

ベースキャンプ班にこの中で料理が一番美味くて気が利くりリディアと下働きが気に入っている元皇女のエリー、亜空間倉庫の準備があるアリスアイン。

探索オペレーターに俺。

役割が決まったので各自が動き出す。

屋敷探索班は一名を除いて意気揚々と準備をして屋敷に向かう。その後ろをルーカサスが絶望感に囚われて、幽鬼のように付き添っている。

……意地っ張りにならなきゃ助けてやるのに。

「ミニア、一寸待って」
ちよつと

俺の停止の声に、ルンルン気分で屋敷に足を向けた猫耳少女がキョトンとして振り返った。

突然呼び止められて不機嫌な顔を向ける彼女をスルーして『』を立ち上げる。

「屋敷の図面を描くから一寸待ってる」

荷物の中から紙とインクを取り出して屋敷の間取りを写し取っていく。

屋敷の詳細図が有ると無いとでは効率が違う。

ミニアの眉間に皺が寄る。

「魔法が掛かってそうな怪しい場所は此処と此処だな。それと、罨がある場所は此処と此処もか。此処は隠し部屋かな？」

俺が屋敷の注意点を書いていくうちにミニアの表情が崩れて絶望に染まっていく。

「後は鍵と罨を外してOK」と

描き終わって顔を上げると今にも泣き出しそうなミニアの顔があ

った。

……凶面があつてそんなに嬉しいのだろうか？

「どつしたんだい？」

「……何でも無いにや」

凶面を渡すとトボトボと先程とは対照的な足取りで屋敷に向かった。

キヤアアア、イヤアアアという屋敷の外まで響くルーカサスの怯えた声^{泣き}をBGMにしながら、『で屋敷とその周辺を覆っている。』

今頃、ミニアがネズミを甚振るようにルーカサスを料理していることだろう。そしてそれを後ろから指差して笑い転げているノルシユル。……その現場が目に見えかぶようだ。

『の結果で気づいたのだが、屋敷の位置が少しおかしい。まるで屋敷裏手にある四方を断崖絶壁に囲まれた森を守るようにして建っているのだ。』

少し気になったので、『の深度を深くして土の奥深くまで広げていく。』

判つたのは建造物が埋まっていることだけだ。

多分この屋敷を作った貴族が発見して隠蔽し続けたものである。しかし戦争が終わっても人が住み着かなかつたのは、今の子供達には伝わらなかつたものかもしれない。

近いうちに探索することに決めて屋敷の修理箇所を点検する。
ついでに風呂とプールの候補地を探しておくことにする。前者は
女性として汗を流す場所が欲しいだろうし、後者は授業として必要
なものだ。

……決して変態親父のために覗きのベストスポットを考えているわ
けでは無い。

探索班が帰ってきて夕食をかねて報告会おしやへしをはじめた。

外も中も魔物との戦闘があったことの報告。

屋敷の外は毒芋虫と肉食蠅、屋敷の中は血吸い蝙蝠にビッグコッ
クローチ、巨大蜘蛛が待ち受けていたらしい。

気持ち悪くて死にそうだったと文句を云われた。

……そういえば『』を使つての遠隔戦闘を想定していなかったこ
とに気がついた。今回の探索には間に合わないけど要研究だろう。

今日の探査で屋敷内の全て回れなかったので明日は屋敷内を重点
的に回ることにする。

拠点を本格的に作って地下にある建造物を早めに調べるためだ。

女の子連中がキャツキャツ姦しくしながら布で壁を作つてお湯で
身体を拭いている。

若さと男一人という虚しさに襲われながら、一人コツコツと『』
を起動して屋敷の修理と清掃をしていく。

屋敷の壁という壁を真っ白にして、床に落ちている埃を一箇所に
集める。

壁が崩れていたり、床が抜けているところを補修して、ヒビが入

っているところを補強する。

「真つ暗闇の中、屋敷は輪郭しか見えないが、昼間であれば物体が独りでに動いて屋敷が補修されていく素晴らしい光景が見られたことであろう。」

「昼間あれだけ怖がっていたルーカサスに見せられないのが残念だ。見せていればさぞかし期待どおりのリアクションをとってくれるに違いない。」

「俺がその光景を思い浮かべてニヤけているとミシャーラが寄ってきた。」

「何を笑っているのよ、気持ち悪い。」

「気持ち悪いの一言がグサツときた。」

「昼間のルーカサスが面白くてね。思い出し笑いをしていた。」

「あゝアレね。裏まで響いて魔物呼び寄せてくれたわ。」

「先程の報告会では云つのも悪いから黙っていたのだという。」

「布の壁の向こうから嬌声が響いてきた。」

「どうせ洗い合っているうちに愛撫のし合いにもつれ込んだのだろ
う。」

「何時ものことなのでほおって置く。」

「止めに入ると巻き込まれるし。」

「ミシャーラも同じ意見なのか青い顔して動こうとしない。」

「……そういえばエッチなことはいつも弄られる側だったな。それを
思い出してるのかな？」

「明日からまた姦しい声が響くな。」

俺の現実逃避の言葉にミシャーラのジト目を受けながら、頭の中では朝明けた時に綺麗になった屋敷を見てどう反応するか楽しみに考えていた。

次の日、全員で屋敷の中に入る。

綺麗になった屋敷を見て歓声が上がった。

俺としても頑張ったので嬉しい限りだ。

しかし、突然綺麗になった住居に混乱して現れた魔物を倒した時に後悔することになった。

魔物を倒したときに体液の染みや死骸で折角綺麗にしたのに汚れてしまったのだ！

魔物を殲滅してから綺麗にすれば良かった。

俺は泣く泣く『』を使って綺麗にし直したのは言うまでも無い。

第26話 遺跡（前書き）

今回はノルシュルの説明講座です。

第26話 遺跡

隠し部屋には遺跡の地図と遺跡内で拾った品物が置いてあった。放置して状況と書置きからすると遺跡内にあった品物を解析して一儲けしようとしていたらしい。

ノルシュルが懐かしそうに品物を見ていたが、訊ねるとはぐらかされてしまった。

次の日、遺跡内部に突入した。

入り口は土砂と木の根で解りにくかったが、『』での地図で比較的簡単に探し当てた。

『』が無ければ一日中探し回っていただろう。

遺跡内の空気中に『』を放つ。

空気を通して天井や壁、床にベータを付着して、罾が作動しないようにする。

イメージとしては遺跡の通路を覆うゼリーの中を進む感じだ。

ミニアが諦めたように溜息をついていたが何かあったのだろうか？

「こちらじゃ」

ノルシュルが壁の模様から何か読み取ったのか先頭を切って進んでいく。

その先は壁だったけどノルシュルの指示で破壊すると通路が現れた。

どうやら防火壁だったらしい。

その後もノルシュルの案内で通路を進んで行く。

途中で罾を作動させてしまったが、『』を流入させて作動不良にさせる。

どうやら扉が開いてガーディアンが出てくる仕組みであったらしいが、扉が少ししか開かず、扉が硬くて出られなくて中で右往左往していた。

「いい加減教えて欲しいんだが？」

「……そうじゃの。お主にも関係することだからな。」

中々教えてもらえなくて微妙な空気が漂っていたので、教えて貰えることにホツとした。

「この惑星にはわらわ達の文明が栄えていた。

アレが来たのは本当に突然だ。

最初は友好的に接しようとしていたのだが、アレが自分達の世界の理を改変させていると解ると殺すことに決まった。

まあ文明を壊されて今まで住んでいた場所を追い出されようとしたのだから当然だな。

次第に争いが激化していった。

相手は理を変えて力を増していくのに、周辺地域を慮った此方の抵抗は決定打に掛けるものばかりであったからな。

相手が力を増すと強い兵器が使われる。そして、中途半端に傷つけたまま相手が強くなる。

まるでイタチゴッコであった。

わらわ達は何とか対抗するための兵器を作り出そうと躍起になった。

やがて、研究は二つの兵器に集約していく。

一つは兵器を身にまとう外装《修羅》。

もう一つは白鬼に知性を与える《邪神》。

それでもアレには勝てなんだ。

そして、わらわ達は一か八かの賭けに出ることになった。

当時の最高位の星読みの巫女を依り代にして《修羅》と《邪神》を合わせることだ。

実験は失敗した。

邪神の百分の一にも満たない力しか発揮できなかったのだ。

進退窮まったわらわ達は最後の手段として禁忌の爆弾を使用することに決めた。

自爆覚悟で住民全員に耐性遺伝子を打ち込み、大陸を吹き飛ばすほどの被害を出したがアレを滅ぼすには至らなかった。

戦いに敗れ去ったわらわ達はアレに飲み込まれて今の世界の理を恭順し、世界に生きる一種族のエルフとして生きることになった。」

「そんな話聞いたことも無いわよ？」

純エルフのミシャーラが今までの話に眉をひそめる。

「当然じゃ、お前達の祖先は蒼霊を崇める自然回帰派であったから。当時のことは忘れたい記憶であるし、アレに敵対していたわらわ達を嘲っておった。」

わらわ達は耐性遺伝子の影響で肌を黒くしてダークエルフとなっていたから、別の人種として争いになった。

片や世界に対抗しなかった臆病者として、

片や世界に対抗して敗れ去った野蛮人として、

それがエルフとダークエルフの最初の争いよ。

憎しみ過ぎて、今ではもうどうでも良い理由だから現在には伝えられていないがな。」

「あなたはハイエルフなの？」

「ダークエルフ側のハイエルフであると言えるじゃろうな。」

ミシャーラがノルシユルに疑わしそくに視線を向けているが俺にはどうでも良い話だった。それよりもこの遺跡の目的が気になる。

本題のこの遺跡に付いて質問しようとするエリーによって先に質問されてしまった。

「魔王とは何ですか？」

「魔王の定義に寄るな。」

最初に魔王と呼ばれた者は《修羅》を盗んだ愚か蛮族の人族であった。

世界神によって歪まされた黄呪の塊であったこともあり、召喚された人間であったときもある。

最近の魔王は召喚された人間と歪まされた黄呪の塊を合成した者達が多い。」

世界の核心の一端に触れているような気がしたが、そんなことはどうでも良い話だ。

「それよりもこの遺跡について知りたいんだけど？」

「んあ、ああ、この遺跡、いや、この施設は《修羅》を研究する施設だったようじゃな。」

案内板に《修羅》を示す紋様が刻まれておった。」

入り口付近で壁の模様を見ていたのは案内図が描かれていたらしい。全然読めなかった。

また暫くノルシュルを先頭に進んで行くと奇妙な部屋にたどり着いた。

部屋の片側にはドラム缶を二周り大きくして長くしたものに扉がついている。”ポット”

もう片側には細長い机の上にボタンやら透明な板やらがある。”
コンソール”

アニメのよくある未来的な対人用実験室である。

「これは？」

今までの流れで行くと《修羅》に使われる実験装置なのだろう。

だが、《修羅》が鎧のようなものだとするところな”ポット”みたいな装置は必要ないのではないかと思う。

変身用の装置では無い限り……

「ちょっとまって。そこらの物に触れずに休んでてくれまいか？」

そう云うとノルシュルは”コンソール”を弄りだした。

”コンソール”が光りだして、ノルシュルが「集力装置は無事か。

」とか、「システムのバリエーションが古い！」とか言っていたが、小一時間してやっと目的の物にあり付けたのかフムフムと唸っている。

「何か分かったのかい？」

二時間経過して井戸端会議にも流石に飽きてきたので声を掛けてみる。
暇つぶし

「うむ、この施設は粒子装着型《修羅》の集力装置の小型化と持続時間の増加を研究していたらしいな。」

「粒子装着型？」

「ああ、目に見えないほどの細かい粒の《邪神》を皮膚に貼り付けて鎧にするという発想から生まれた《修羅》じゃ。」

軽量、高出力で理論上は素晴らしいのだが、集力装置の小型化が

出来なくて破棄された研究じゃよ。」

「集力装置ってどのくらい大きいの？」

「この施設地下に施設の倍ぐらいの大きさの集力装置があり、それで半径500メートルの範囲内で《修羅》固定化が出来る。

逆に言えば装置の周り以外では《修羅》を維持できず霧散してしまっただけよ。」

え〜と、つまり拠点防衛用には使えるけど攻勢には出れない代物か。

「でも使いようによっては利用できるんじゃないか？」

「その時の敵は強大で、高出力下での戦闘は集力装置の防壁が耐え切れずに一撃で破損される恐れがあった。」

高価な爆弾にしかない訳ね。

「それに専用の付加武器も維持するのに高価になりやすく、使用者にも精神的ダメージがくることから嫌がられておった。」

ノルシュルは遠い目をして過去を振り返っているようだ。

「嫌がられていたって？」

「……見れば分かる。」

誰かそのカプセルに裸になって入ってくれ。」

なんの疑問を持たず、ルーカサスがすぐに鎧と服を脱いでカプセル

ルに入っていく。

……羞恥心ぐらい持ってくれ。というか、それでいいのかルーカサス。

ルーカサスがカプセルに入るとノルシュルはさっさと起動させてしまった。

「古いから壊れてないか？」

「大丈夫じゃ、チェックは済んでおるし、研究用の低出力タイプだから攻撃用の武装も無い。」

「裸で入る理由は？」

「……身体を覆う《邪神》が人体以外を異物として判断して、数分も立たずに身に付けているものをボロボロにしてしまっくんじゃ。」

ボロボロにするという言葉に引っ掛ったが、喋っている間に終了したようだ。

扉から出てきたルーカサスに驚かされる。

そして何故使用者に嫌われたか分かった。

彼女の姿は頭の先から足のつま先まで、アニメの宇宙服や戦闘服のようなスーツ全身タイツをボディペイントで描かれた姿であったからだ。

そりゃ、露出狂じゃないんだからこの姿で戦えと言われても嫌がるよ。

第28話 ある日の会話

修羅研究所

遺跡探索から一ヶ月の時間が流れた。

俺達はある程度（村人を使つての屋敷の大改装、裏の森を一部グランド化、大浴場の設置、宿舍の建設、覗き防止兼脱走防止用の壁、村の農地の地質の改良化など）の仕事を終えてアララギ公爵邸に定期連絡のため帰つて来た。

サクヤとマイカによる熱烈な出迎えハゲの後、変わったことが無かつたか聞いてみた。

サクヤはニコニコしながら「何もありませんよ?」と言ってくれたが、マイカはあからさまに視線をはずしている。……何かあるらしい。

とりあえず世間話として公爵領の外の話を聞いていく。

王都は魔国への転移門が出来て、商魂たくましい商人達が魔国との交易を始めたらしい。

治安は警戒が強くてピリピリしているが、平常の状態を保っているようだ。

王都の反対側の門閥貴族達は王族の遠縁の子供を御輿にして、ツアルテユース正統王国を起こしたそうだ。

此方側に王女とサクヤの祖母が王族だったアララギ公爵という血筋が揃っているのに正統を名乗るとはいい度胸である。

ちなみに王妃は故郷のイグジナート帝国に避難済みで、門閥貴族達の誘いには乗らないらしい。

ミセルダーク学究都市は周辺の町を取り込んで都市国家を宣言したらしい。

元々あの辺は自治地区に近かったから当然といえば当然かもしれない。

イグジナート帝国とスンジリ商国はあいも変わらず泥沼な戦争状態。

マルア聖王国は内乱の兆しがあるそうだ。

何でも宰相が保護したツアルテュース王国研究所所長によって勇者召喚を行ったらしいが、出てきたのが十歳にも満たない女の子二人で、それを非難した聖女を宰相側が排除する行動に出たらしい。怒った聖女側（民衆）が決起して反乱を起こしそうな気配があるそう。

こうして周囲の国の情報を拾ってみると、世界が動乱の只中になることが分かる。

「学園についての問題が二点ほど起きたわ。」

サクヤが涼やかな面持ちで話題を変えてきた。

問題が出たならしかめっ面ぐらいして欲しい。

それとも嫌な報告でも顔に出さないことが貴族と平民の差なのだろうか？考えさせられる。

「問題？運営に問題が起きたのかい？」

「いえ、運営資金に問題は全然ないの。むしろ余るぐらい。開校までの時間もあるわ。」

なら何の問題があるのか？疑問に思いながらも先を促した。

「問題は学園に来る生徒についてなのよ。」

一つめは、一応礼儀として魔国にも生徒の募集をしたんだけども、返答があつて是非ということで魔族の子供が留学することになったの。」

魔族とこの土地の人達は長年戦争をやってきたのに、態々火種を送り付けてくるとは頭が痛くなる。

確かに新しい国として再出発しようとしたときに友好の兆しを与えることは有効的なことかもしれないけれど、今まで戦争して来た人間が留学するには急すぎて反発のリスクが高すぎる。

上のほうは何をやっているのかと言いたくなる。

「二つめは、聖王国から召喚された勇者達が来ることになったのよ。」

なんでも召喚された勇者達に同情した聖王国側の良識ある大人達が、腐りきった自国で利用されるよりも、同じ勇者の血筋がいる土地で、伸び伸びと生活して貰いたいと願ったそうだ。

ハッキリ言つてこの件に関してはどうしようもない。

後々の火種になりそうだが、子供達には関係ないし、勇者の通つた学園として良い宣伝材料となるからだ。

確かに二つとも問題であるが、俺達にはどうしようもない問題である。俺達に出来ることは、彼女達が気持ち良く学園生活を送って卒業させるために奮闘するぐらいである。

「アララギ公国を建国するに関して重要な行事があるわ。」

サクヤが今までの雰囲気を一転させて、厳粛な雰囲気場で場を改め

た。

言い表せないプレッシャーに、俺の背筋も自然と伸びる。

「それは王女を正妻にして、王女と私と結婚するのよ。」

チヨット待った。サクヤはともかく何で王女と？第一、一度に二人の嫁つて世間的にも大丈夫なのか？

「あら、反対はできないわよ。」

いまさら王女が正統王国に行くのは避けなければならぬし、何より王女自身があなたのこと好きになっちゃったみたいで、此処を離れたくないというのよ。

それにお腹の子の為にもお父さんが必要だし。」

「お腹の子？」

「そうよ。」

「誰の？」

「私とあ・な・た・の。」

えっ？俺の子？あゝ俺の子かあ

理解したときはズーンと思いつけられたような錯覚を受けた。

でもまあ、あれだけヤツてれば妊娠もするかと思いなあ。

「あれ？でも何でマイカ達は妊娠していないんだ？」

「ああ、それならあの子達は眷属になったので子供を生せないわよ

「？」

どうやら温泉の村でノルシュルを中心に眷属の処理をしたらしく、結果として今までの奴隷と同じ状態であるらしい。

つ・ま・りだ。

俺が一生懸命研究していた奴隷開放の方法が全て無駄になっていったのだ！！！！

俺は呆然とした心地で灰に成って逝った。

外伝 弟

白いシーツに金色の細い糸が流れを作るように広がっている。

先程まで肌をかさねていた少女は美しく、聖王国一と謳われていた。

聖王国の聖女といわれる彼女も、俺にとっては醜い肉塊にしか思えなかった。

女性をそんな目で見ることしかできなくなったのは半年前の事件からだ。

姉さんが失踪した。

噂によると任務を失敗して自暴自棄になって上官を殺して逃走したらしい。

信じられなかった。

姉はそんなに器用な人ではなかったからだ。

まっすぐに美しく、男の名前でもへこたれなくて常に太陽のように明るかった。

何事にも愚直で、思い込みが激しく、脳筋であったけれども、優しく、人が忌避することを進んで引き受ける奇特な人だった。

事件にしても姉さんならば逃走するより出頭して釈明を待つはずだ。

俺は真相を突き止めるために奔走した。

だが、現実の壁は厚かった。

事件としては結構大きな事件であったはずなのに闇の中に落とそうとする気配さえある。

結果分かったことは姉は誰かに嵌められたことだけだ。

今までの行動では効果がないことを知った俺は別のやり方にした。

俺は転生者だ。転生前はホストをしていて色んな女性たちとをモテ遊んだ。

幸いにして今の俺はかなりの美貌を持っている。

学院に所属していた俺は貴族の子女を手折って、彼女達の情報網を使うことにしたのだ。

学院の子女の殆どに手を付けた。

有閑マダム達のツバメもやった。

事件に関わりのない女騎士達も手を出した。

城の侍女達もお手つきにした。

初潮の来ていない娘たちの恋人もした。

まさに揺り籠から墓場まで、美も醜も手当たり次第だ。

今、隣にいる少女もその過程で手に入れて調教した。

手に入れた情報は姉さんの親友が裏切ったという信じられないものであった。

彼女はよく知っている。

姉さんといつも二人でつるんでいた。

遊んでもらったこともある。

今回のことだって彼女に心配かけたくないから話していないくらいだ。

彼女は今、複数の騎士たちをハメているらしい。

関係を持ってそれで脅しているのだ。

彼女に何があったのか知らない。

だが、姉さんを貶めた罪は重い。

復讐することにした。

男共に身体を売っているなら丁度よい。

下町の浮浪者に強請る雌豚に落としてやる。

姉さんの行方は分からない。

商国に奴隷として売られた後の情報がないのだ。

奴隷売買を推奨している商国も復讐の対象だ。

今は帝国と膠着状態だが、俺がこの手で握りつぶしてやる。

「御主人様。例の二人は予定どおりに。」

いつの間にか入ってきた大貴族の令嬢が、気になっていた案件にケリがついたことを知らせる。

「よくやった。一緒に付ける者も手のものにしてあるだろうな？」

「はい。」

俺は労う為に懐に呼び込んだ。

一か月前にこの聖王国で勇者召還が行われた。

隣の王国から逃れた研究所の所長と人任せな騎士達が独断で行ったのだ。

本当はどうでもいいことであつたのだが、召喚されたのが十にも満たない少女が二人と聞いて気が変わった。

奴等は年端もいかない少女達を戦場に送り出そうとしているのだ。宰相も大貴族達も賛成しているらしい。

吐き気がする。

俺は手を回して彼女たちを他国の学園に送ることにした。

ツアルテュース王国から分裂して建国することになったアララギ公国。

かの国で新たに女性だけの学園が造られたそうだ。

そして、理事長は召喚された男らしい。

情報が曖昧だが、この国にいて利用されるよりましだろう。
偽善と分かっているがせめてこのくらいはしておきたい。

第29話 エピソード

「じゃあ、また明日ね」

「また明日」

帝国から来た貴族の可愛い少女と手を振って分かれる。

彼女とは友達として心の内を話して貰って以来の親友だ。

その親友にも話せないことがある。

当然、俺の心の中にも鬱憤が溜まる訳で、彼女と分かれた後は暗い顔になってしまう。

憂鬱な気持ちになりながら住処になっている教職員棟に向かって歩き始める。

さあ、これからお仕事の時間だ！

胸を張って気持ちを切り替えてみても沈んだ気落ちは変わらない。隠し事もそうだが、待っている仕事も書類が山のようにあることを予想すれば肩を落としたくなるもの。しかも可愛い眷属達のせいで毎回夜明けまで搾り取られているならば尚更のことだ。

トボトボと歩いていると、俺を待ちつけていたように黒髪黒目の魔族の少女が俺に声を掛けてきた。

「気持ち悪い。」

第一声からひどい。何も好き好んで俺もこんな姿をしているわけでは無いのに。

うちのマイハニー^{肝っ玉おかん}が聖王国の勇者達の友達が少ないのは可愛そう

だからって無理やりこんな姿にして数合わせに登校させられたんだ。
この悲しみがお前に分かるもんか!!

「こんなところで遊んでいいのか？魔王様。宰相が必死になって探しているぞ？」

「……………何のこと？」

カチンと来た俺の言い返しに、目をキョドらせながら取り繕う。
やっぱり。

俺のカマ賭けに引つかかった女子生徒は変装した魔王である。

魔王の姿は十七歳の少女だと云うから、姿を変えているのか使
い魔に精神を乗っけているのか、はたまたこの姿が本来の姿なのか
いずれかなのdarou。

「こんな所で学生やってて良いのかよ。今頃、執務が溜まって大騒
ぎしているっじゃ無いか？」

「うるさいわね！変態には言われたくないわ。」

一触即発な雰囲気漂うが、本気で喧嘩すると洒落世界が滅びますにならないの
で決して手出ししない。出来ない。

しばらく睨み合いをしていたが、魔王様がフンツと鳴らして立ち
去ってしまった。

勝った。

むなしい勝利であった。

魔王がこんな所にいる理由は彼女も召喚された口らしいので懐か
しくなって声お茶をしいを掛けに来たのdarouと検討妄想してを付けてみた。

そう考えると此処で分かれるのは良くなかったのかもれない。
が、話すのはいつでも出来るから、会う度にからかい捲ろうと決意
してみた。

「御主人様。今お帰りですか？」

「…一緒に帰る。」

授業が終わったらしいマイカとアリスアインが駆け寄ってきた。
彼女達の姿は遺跡で見つけたボディペイント姿だ。スーツを解除
するには管理棟に行かなくてはならないので帰り道が近くの場所
になる。

彼女達がスーツを着けている理由は、学生女の子の身体の保護をする
と言う名目で遺跡の機械を複製して利用しているのだ。嫁入り前の女
性に傷を付けてはいけないという事で重点的に開発された。

遺跡の機械を『』で複製して『』効果を打ち消す事により安
全に機械を使用できるようにしたのだが、この学園を作ることより
も苦労した。というか遺跡の機械の複製を作る気分転換に学園の施
設を作っていた気がする。

さらにパワーアシストを無くして防御力に特化させたため、一日
以上着用すると身体機能に以上が出るものだが、女の子の身体を傷
つけない戦闘用の防護用スーツとして活躍挿入している。

もちろん、ボディペイント姿では扇情的過ぎるので、『』を付
与した色気のないワンピースを着ることになっているはずだ。(付
加武器が高価だった理由に品物に《邪神》を付与することが難しか
ったことが挙げられる。)

しかしながら目の前にいる少女達は羞恥心が無くなってしまっ
たかのように、堂々とボディペイント姿で歩いている。

「そんな格好で恥ずかしくはないのか？」と訊ねたら「えっなんで？」と逆に問いかけられてしまった。

俺の感性がおかしいのだろうか？

まあ郷に入れば郷に従えとも云うし、戦闘系授業を取ってボディペイント姿になる未来は想像しない様にしよう。

「そっいえば、エリーは？」

話を変えるためにここにいない人間の事を話題に振ってみる。どうせ園芸用の畑のところだろうけど一応の確認だ。

案の定、畑に向かったとの回答があった。

彼女は植物を育てる魅力に取り付かれたらしく、暇があると畑や花壇を弄っている。

エリーはマイカと歳が近いため一緒の中等部に入学した。アリスアインは歳と頭の良さからいって高等部でも良かったのだが世間になれるために中等部からの出発となった。

それにしても、マイカと一緒に並んでいて全く違和感の無いところが恐ろしい。

サクヤは理事長として娘のミクルをあやしながら日々精力的に働いている。

母親となつてから凶悪さが増して、俺を強制的にこんな姿にしたり、休日を書類仕事で埋めて窒息死させてみたり、娘が見ている前で搾り取ってみたりとやりたい放題である。

ルーカサスとリリディアは高等部の生徒として在籍して学園の名を広げるために少しでも優秀な成績で卒業できるように頑張っている。

る。

頑張っているのは良いのだが、ストレス解消のために変態度が上
がっているのは勘弁して欲しい。

対照的なのがミニアで、高等部に在籍しているが寝ている姿しか
見たことがない。

ミシャーラは屋敷のメイドとして働いている。エシャーラは姉と
道を違えるように教師として野外活動の教師をしている。

王女は妊娠して屋敷で休養中。青髪の女騎士は王女につき従って
離れようとしない。

二人とも最近は犬の散歩に嵌ってしまい人間を辞めてペット生活
を満喫しているようだ。

リリーは学園の特別教師として隠密系を教えているはずだが、噂
によると影で女性の心得を教えているそうだ。事実、前まで草食系
の女の子達が肉食系や捕食系に変わってしまったのを見たこと
がある。

……学園の未来に影響させないことを祈るばかりである。

色々問題はあるが元の世界よりも充実した生活を送れて満足し
ている。

これからの仕事を思い浮かべると気分が最下層アマチットの亡者のようロー
テンションになるが、愛しい女達トクに満足感を覚えながらマイカとア
リスアインを伴って教職員棟に向かうことにした。

第29話 エピローグ（後書き）

最後まで読んでいただきありがとうございました。

初めての小説の小説にもかかわらず630件以上のお気に入りを入れて頂いたことに深く感謝を致したいと思います。

ニートな勇者で鬼畜な邪神はこの回で終了とさせて頂きますが、機会があれば修正した続きの作品を別作品として投稿したいと思います。（原作は黒歴史として晒しものにするため）

次回作として、『僕は巻き込まれた一般人』（N6022R）を投稿しているのでもし良かったら其方も読んでいただけると嬉しいです。（完全な別作品です）

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1759m/>

ニートな勇者で鬼畜な邪神

2011年4月6日23時40分発行